
ルーントルーパーズ

浜松春日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーントルーパーズ

【Nコード】

N9111S

【作者名】

浜松春日

【あらすじ】

戦乱の中、一人の少女が願った。異世界からの、救いを信じて。だが世界の命運を託されたのは、勇者でも何でもない、海外派遣されるはずだった日本の自衛隊員達だった！？

果たして彼らはその世界にとって？漂流者？なのか？救世主？なのか？

剣と魔法の平行世界で、存在するはずのない近代兵器が咆哮を上げる！

序章 依巫（前書き）

2002年に「自衛隊漂流戦記」として発表していた作品を完全にリメイクしたものです。

序章 依巫

序章 依巫よりまし

朽ちかけた神殿の中に、扉を破ろうとする重い音が響いていた。神殿の最深部である円形の洞窟内広場にもその音は聞こえてくる。既に聖都は敵の手に落ち、敗残兵をまとめてこの山麓に立てこもって六日になるが、遂に正門を突破されたのだ。

じきにここにも敵が雪崩れ込んでくる。

五百年に渡って栄華を誇ってきた神聖プロミニア帝国も、今は無惨な最期を待つばかりだった。玉座に神皇帝は既になく、精鋭を誇った近衛聖騎士団もそのほとんどが魔物の腹の中へ収まっていた。この洞窟を出ればまだ燃え上がる皇都の赤い夜景をみることが出来るだろう。

「ここが落ちるのも時間の問題か……」

「ならば計画を実行に移さねばなるまい」

薄暗く、微かな光魔法が灯されたランプに照らされた広場の中で、老若男女が静かな絶望と狂気を宿した表情で話し合っていた。

拜月神の高位の神官や魔法学院の老練な魔導師に至るまで、雑多な、しかし誰もが一流の魔法を操ることのできる顔ぶればかりだった。

しかし、ただで滅びるわけにはいかない。そんな潔さは彼らにはなかった。

地位や役職も定かではないが、一人の男が重く、感情のこもらない声を祭壇へ投げかける。

「よいな？ ヒュムナ」

しゃがれたその声は、有無をいわさぬ強制力があつた。

「はい……」

祭壇の上には依巫が静かに座っていた。

依巫はまだ幼い年頃の少女であつた。

薄く身体の線が透けて見える白く薄い羽衣に身を包み、声をかけられてなお深く祈るような思慮深い表情のまま手を合わせている。

有翼の民の末裔を意味する白い翼を備え、まるで人形と見紛わんばかりの神秘性を備えた少女だった。

彼らが今実行しようとしていることは外道の所作である。

しかし、滅び行く者にとって、それは間違いなく希望に他ならなかった。

戦場が、殺戮の宴が一步一步と近づいてくる。

中央の祭壇を一周するように黒いローヴを被った魔術師たちが等間隔に並んだ。

全員が静かに同一の言葉を口ずさむ。

それは洞窟の壁に反響し、集まり、うねり、混じり合っていく。

『虚空の狭間をたゆたう光よ』

じわり、と祭壇の上で依巫の身体に刻まれた文様から鮮血が滲んだ。

『現世と冥界を繋ぐ番兵に投げ掛けん』

少女が苦悶の表情を浮かべる。

『有翼の民の血を対価としてここに願わん』

溢れ出た血はやがて床へと溜まり、魔法陣に生き血を吸わせる。

『この世界へ異空の代償を示したまえ！』

詠唱の完了と同時に、鉄扉に敵が殺到し、衛兵の断末魔の叫びが聞こえた。

それからそこで起こったことは一方的な戦いであった。

いや、虐殺というべきだろう。

ローヴ姿の者たちは手にする武器もなく、乱入してきた人外の軍団に倒れていった。抵抗らしい抵抗もしない。

しかし、倒れ伏す者の顔には単なる絶望以外の感情が宿っていたことに気づく敵兵はいなかった。

死体が、ローヴの奥で歪んだ笑みを浮かべ、誰もいなくなった祭壇に虚ろな視線を向けていた。

第1章 P K F派遣艦隊

声が聞こえたような気がした。

「て……を……」

女性の声だ。

……綺麗な声だな。

茫漠とした意識の中で、彼はそんな感情を抱いた。
遠い海から響いてくるような、どこか朧気な声。

しかしなぜか、その声を美しいと感じると同時に、不吉なものも感じた。

「……守って……私たちの世界を……」

最後に耳に入った言葉が、何を意味するのか、彼には理解できなかった。

「んっ!？」

市之瀬竜治いちのせりゅうじはうつすらと目を開けた。

見慣れない殺風景な天井。それも随分と低い。

ややあって、それが三段ベッドの一番下から見上げた二段目ベッドの床だと気づく。

ああ、そうだったな、と寝起きの覚醒しきれていない頭でそれに思い至った彼は、ポリポリと短い髪をかきながらベッドから身を起こし、床に足を降ろした。

無機質なりノリウムの床がひんやりと冷たく、それに関しては夢でないことを嫌でも理解してしまう。

彼が周囲を一瞥すると、もう見慣れた狭い光景があった。

三段ベッドを据えるだけあって天上は高く、そこから暗くはないが明るくもない蛍光灯が並んでぶら下がっている。

今はどうやら自分以外に人気はないようだ。

「……何の夢、見てたっけ？」

何か恐ろしい、いや、それだけではない、不思議な夢を見た……
ような気がする。

うーん、判然としないな……

とりあえず寝間着代わりの青いジャージ上下を着替えることにする。

着替えながらも、なぜか気になった。

「確か……羽のついた女の子が……」

妹と違って頭は悪いかもだが、記憶力はそこそこある方だった。

考え事をしていながらも着替え終わった。ベッドに腰掛けて靴を取り出す。ピカピカに磨かれた半長靴はんちゅうかをはく。

立ち上がると、すぐ近くの壁にある姿見の鏡の前に立った。

鏡に映った市之瀬の姿は、迷彩服を着ていることを除けば、ごく普通の少年の容姿といえた。

（市之瀬竜治、一八歳、身長一七〇センチ、体重六四キロ、今日も至って健康、と）

彼は心の中で呟く。

鏡の中で、締まった身体に、まだあどけなさの残る顔の少年がこちらを見つめていた。

「あ！？ もう食堂の時間終わりそうじゃん！？」

夢のことなど忘れ、市之瀬は声を上げた。

壁にかけられている時計の針は、もうすぐ昼食時間の終わる十分前くらいを指していた。

「やつべえ！」

彼は慌ててベツドルームを飛び出す。

本来禁止事項な廊下を走り、その窓から見える景色にため息をつく。

「今日も晴れてんなあ」

もう見慣れた、そして見飽きた太平洋の海原と、自分の乗る輸送艦と併走するイージス護衛艦の姿が、網膜に夏の日差しと共に焼き付いた。

目を細め、今の自分が迷彩服に身を包んでいることが、未だに実感としてわかないことに気づく。

……俺、半年前まで高校生だったんだぜ、嘘みたいだろ？ なあ、美奈。

誰に言うでもなく、自身への問いかけのように心の中で呟いた。

自衛隊員になって、外国へ派遣される途中だという実感は、なぜか今でもいまいち湧かなかった。

イージス。

ギリシャ神話における全能の神ゼウスが、戦術に長ける女神アテナに授けたとされる、最強の盾。

イージス艦。

イージス・システムと呼ばれる、高性能レーダーとコンピュータを搭載し、各種武装を統括、同時に百以上の目標をレーダー捕捉・迎撃するシステム防空を行うことのできる世界最強の防空艦。

自衛隊の、そして日本の専守防衛という理念の最も象徴的とされる戦艦である。

その海上自衛隊イージス護衛艦？いぶき？艦内では『配食始め』のアナウンスと同時に昼食が始まっていた。満載排水量約一万トン、全長一七〇メートルに達する世界的にみても大型の艦であるため、乗員の数も多い。

だが、喧噪で賑わう一般乗組員用の食堂である科員食堂とは別に、幹部隊員専用の食事が行われる士官室は肅々とした雰囲気で包まれていた。

狭い艦内だが、ここだけは落ち着いた印象を受ける洋間となっている。上級者である幹部のためのものであることは容易に想像ができた。

「司令臨場、気をつけっ！」

幹部の一人が声を上げ、長テーブルに座る各区分の幹部達が一斉に姿勢を正した。

すると、ずっと士官室に入ってきた一人の男が、上座に腰を下ろす。

男は幹部達同様に航海中の服装である濃紺の作業服姿である。

一見すると年齢は若く見える。

それは雰囲気によるものだった。中年男性とは思えないほど身のこなしにキレがあるのだ。背筋は全く曲がっておらず、むしろこちらの現代の若者よりも覇気に満ちた印象がある。身長こそ小柄だが、それが気にならない威厳を備えている。いや、威厳というよりは信頼感であろうか。見た目だけはどこにでもいそうな、人の良さそう

な男性だ。

かぶらぎのりお

蕪木紀夫海将補、この国連平和維持軍派遣艦隊の最高責任者であった。

「休ませ」

「休めえ！」

「ああ、後はいいさ。とっとと食べてしまおうか。皆食べてくれ。お、今日は金曜カレーかね？」

真面目にしたのは最初だけで、蕪木は司会役の幹部を止めた。

大して意味のない形式化したことを長く続ける必要はないと彼は考えていたのである。

彼らしい、と笑みを浮かべる幹部もいれば、締まりのない司令だと無然とする者もいた。

「相変わらずですね、蕪木司令」

野太い男達の声ではない、涼やかな声が士官室に響いた。

近くの席に座る、艦隊の指揮幕僚団の主席幕僚、加藤修二二等海佐が笑ったのである。かとうしゅうじ

彼はこの居並ぶ幹部隊員の中でも異彩を放つ人物だった。

彼はきらりと輝くノンフレームの楕円形の眼鏡で遠くの甲板にいても認識できることで有名だった。一見するとまるで高校生でも通うのではないかと思われる童顔が、むさ苦しい中に場違いな印象を添えている。時代が時代なら？参謀？と呼称される主席幕僚の役職を持った人物には到底みえない。

司令の右腕、それが彼だった。昼食で席がすぐ側なのはそのためだ。

「指揮官の私が良いんだからいいんだ」

にやりと笑うその顔は、まるで少年のように活気に満ちている。
蕪木は周囲の様々な意味のこもった視線はあえて気にせず、カレ
ーを口に運ぶことにした。

しばらくすると、艦内での数少ない楽しみである昼食に意識が向
いたためか、蕪木のことを気にする者はいなくなり、和やかな食事
風景となる。

一人、主席幕僚の加藤だけが報告がてらに話をする。

「気象班からの報告によると昨日発生 of 台風は航路からは逸れるそ
うですよ」

「ほう、なら安心だ。他には？」

「いえ、別にはないですねえ。ああ、昨日僕が変な夢みたくらいです
よ」

「夢……？」

できるだけ平静を装い、顔を向ける。

「ええ。よく覚えてはいないんですが……背中に羽の生えた女の子
が、血を流して……」

彼の周囲の幹部達がぎょつとして目を向ける。

さすがの彼も、苦笑してごまかした。

「あははっ。すいません、食事中にする話じゃなかったですね」

だが、蕪木はそれで流すことはしなかった。

「不思議だな」

「え？」

「私も見たんだよ。翼の少女が生贄にされてしまう夢……」
「ええ！ ほ、本当ですか？」

心底驚いたように、加藤が眼鏡の奥の好奇心の強そうな瞳を丸くした。

生贄……ああ、確かにそんな感じだったような、と唸っている。
夢、翼の少女、生贄、そして同じ夢をみた部下、か。

「司令、お疲れなのではないですか？」

傍目に見ても異様な話をしている上官に、医務官の一人が口を挟んだ。

「そうですね、何せ今まで苦しい日程でしたから……」

？いぶき？の航海長が加わる。

彼らの言葉の意味するところは、現在のこの艦隊の出動経緯についてであった。

この艦隊が編成され、何を任務とするのかである。

それは、今から半年前の話だった。

アフリカのある国での紛争で国連施設が立て続けにテロに見舞われたせいで、米英を中心とした平和維持軍の積極派兵に踏み切った
はいいものの、いかんせん頭数がそろわない。そして米国がある国
へ支援要請をするに至った。

それが日本だったわけである。

国際社会からの圧力にあっさりと負けた政府は国民不在の下に派遣を決定。

『国連参加国としての人道支援』という言葉こそ格好良いが、つまるところ政治家の保身やら、防衛省で豪華なイスにふんぞりかえっている階級章の星の多い連中の点数稼ぎだ。

これで何か失敗でもすれば命令した自分たちではなく、現場に責任を被せて自分は反対していたとでも言うつもりだろう。

畜生め、と現場一筋の蕪木も思っている。

救いなのか重荷なのかはわからないが、最悪の事態が起こる可能性が高いため、武器・弾薬は今までの海外派遣では例になく充実していた。防衛省の中にも送られる側の身を案じる人間がいたのだろう。軽空母並の巨体を誇る二隻の輸送艦には、陸上自衛隊の車輛や各種機材、戦車や戦闘ヘリ、そして弾薬が満載されている。

海上自衛隊はこの最新鋭イージス護衛艦？いぶき？の他に、？ひゅうが？級ヘリ搭載艦、支援艦として大型補給艦までひっぱり出している。

これは戦場に行く布陣といってほぼ間違いない。

政治家の中には『世界に誇れる日本艦隊』などと喜んでいる者もいるが、そんな悠長な理由で艦隊を編成したわけではないのだ。

こここのところの情けない上層部の汚職事件など不祥事が祟ってか、自衛隊が嫌いでたまらない市民団体に派遣反対のシュプレヒコールを浴びながら横須賀基地を出航し、三日目の今日に至っている。

だが、蕪木はそれほど悲観していなかった。

彼は現場が好きだった。できることなら定年まで艦に乗っていたい。

現場の先頭に立つ者がいないなら自分が立てばいい。それが蕪木の信念だった。そんな性格が災いして、エリートでありながら今の役職から上は絶望視されているが。

「蕪木司令や僕が普通に見えたらむしろ危険信号だよ。医療班は注意してね」

「よしなさい」

加藤二佐があっけらかんと答える。

……こいつも変わり者だな。まあ、あれを原隊から主席幕僚に引

き抜いたのは他ならぬ自分なのだから、不思議はないのかもしれないが。

蕪木は心の中でそう苦笑いしながら、こればかりは嫌いになれない伝統の海軍カレーにスプーンを運んだ。

艦に乗って三十年、食べ慣れた海の男の味が心を落ち着かせてくれる。

何の名誉もなく、国民さえ誰も望まない戦場に行く自分たちのこの日常が、なぜかとても大切なもののように彼には感じられた。そう、？日常？という平和な営みを忘れたときは、自分たちが戦争を本当に戦う時なのだ。

それを思いながら、蕪木は先刻の加藤の話を反芻していてもいた。

……翼を背中に持った少女。

そして、彼女はなぜか、何かを求めていたような気がした。

……そう、何か切実に。

カレーを口に運ぶのも忘れ、蕪木はしばし思考に捕らわれた。

たかが同じ夢をみた者がいるからと、何が起るわけではない。

そのはずなのだが、彼には何故か胸騒ぎがしたのである。船乗りの勘だろうか。

『そう……あなたたちなのですね……』

「え？」

少女の声が聞こえた。

そのありえないことに、脳が一瞬、空耳ではないかと意識を混乱させてしまう。

ややあって、彼ははっとして顔を上げた。

加藤がカレーを口に運ぶ途中のまま、ぽかんと間抜けに口を開けて、ある一点を凝視している。

蕪木が視線の先を見ると、そこには薄衣を纏った少女が立っていた。

「なっ!？」

長テーブルの上、向かい合う幹部達のと真ん中である。

自分は夢を見ているのか!？

背中に冷たい汗が伝う。

その場が一瞬で騒然となった。ガタガタと居合わせる隊員たちがイスを立ち上がる。

「お、おい!？ 誰だお前はっ! どうやってこの艦に侵入した!？」

「司令お下がりでください!」

部下の一人に制されるが、蕪木はその少女の顔をじっと見つめたまま動かない。

「き、君は……!」

深い場所に眠っていた記憶が呼び覚まされていく。そう、彼はつい昨日に彼女のことを見ていた。

夢の中で。

幼さを残す顔、白い肌。腰まである長い銀髪の間から、薄く白い衣がのぞいており、身体中に黒い刺青が幾何学的な模様で走っている。

そして、その背中には、大きな白い翼。
すう、と彼女が目を開けた。

『あなたたちに託すしかないのです』

その言葉の意味を理解できずにいると、加藤が代わるように聞き

返した。

「託す？ いったい何をだい？」

この状況で唯一、冷静になっているように見える加藤を、少女の優しげな瞳が捉えた。

そして、加藤の真剣な眼差しを前に一つ寂しげに呟いた。

『ごめんなさい……』

「お、おいつ！？」

瞑目した少女に何かを感じた蕪木が咄嗟に制止の声を上げる。

だが、その瞬間、士官室が薄暗くなった。しかし、照明が落ちた訳ではない。

いったい何だ！？

その場の全員が、じわりと無意識に嫌な汗を背中に流す。

少女はぶつぶつと何か不思議な旋律の歌を口ずさんでいる。

ふっと彼女の足下が緑色に淡く光り、彼女のか細く白い肌を染める。

蕪木の隣で加藤が彼女の足下で淡く光るものを凝視する。

「魔法陣……？」

それは加藤が趣味で読んでいるオカルト雑誌で目にしたことがあるものによく似ていた。

確かに、その光は何か人為的なもののように見える。蠢いているように見える模様は、ひょっとして文字だろうか。

「何をしてるんだ！ やめろ！」

若い幹部の一人が少女を止めようとテーブルに上がった。丸腰の少女一人、止めることができると思ったのだろう。

「ダメだ止せ!？」

嫌な予感がした蕪木が叫んだ、その時だった。
ゆらり

士官室の空間が歪んだ。

その今まで覚えたことのない感触に、全員が目の錯覚か、毒ガスによるテロだと思った。

しかし、その予想はどれも違った。

まるでタールのような闇が、彼女の全身に刻まれた紋様から溢れ出ると、白いテーブルクロスを浸食してあっという間に士官室を蝕む。

「ひ!」

闇が近くにいた船務長に飛びかかると、そのまま包み込み、飲み込んだ。

「うわあああ!？」

「た、退避っ……や、やめろおー!？」

まるで意思を持っているかのようなぬめった闇が、逃げ惑う幹部達を飲み込んでいく。

阿鼻叫喚の世界が現出した。

闇に喰われる!

人間の奥底にある暗い本能が恐怖で警告した。

「ひよああああ!？ お助けえー!？」

逃げ遅れた加藤が悲鳴と共に闇に消える中、蕪木は一人だけ冷静に司令として最後の抵抗を試みていた。

自分に課せられた使命、部下を守るという責務を果たさねばならない。

「こ、こちら士官室、蕪木……総員……救命ボートを……」

必死になって蕪木は入り口の隣の壁に掛けられている艦内電話を握る。

総員退避を命令しようとするが、引きずり込まれるように闇が覆い被さってきた。

艦の中では広い部類のこの士官室とて、部屋として狭いものだ。闇が追いつくのはあつという間だった。

「繰り返す……総員……くう……」

闇は士官室を取り込んだだけでは飽きたらず、艦全体を、いや、それだけではない、艦隊そのものを取り込もうとしていた。

視界全てが闇に包まれたとき、蕪木は最後の手段として、この？いぶき？への撃沈命令を出そうとした。だが、遠のいていく意識の中、艦内電話を握る手からも力が奪われていき、彼はまるで昨日の夢の中のような絶望の淵へと追い落とされていった。

「う……」

仰向けに倒れたまま、市之瀬は目を覚ました。

彼は最初、自分は俯せに倒れているのだと思った。さっきまで晴

れていた太平洋の空がこんなに薄暗いはずがないからである。しかし、そうではない。冷たい甲板の感触が背中に感じられる。今自分は仰向けに倒れ、空を眺めているのだ。ややあって、それが周囲を包む霧が原因だと理解する。

「はっ！？」

あ、あの気味の悪い黒いウネウネは！？

イージス護衛艦？いぶき？から溢れだしたあの謎の存在のことを彼はすぐに思い出した。

少し前、彼はまるで芋洗い状態の混雑を見せる食堂で、味も分らないまま飯をかき込んだ後に、人混みにいた熱気を冷まそうと思っただのだ。

隊での自分の役割である狙撃要員として、狙撃銃のスコープの調整だと小隊長に許可をもらって上部甲板に出て涼んでいたところまでははっきりと覚えている。

……気を失ってたのか。

まさか白昼夢でも見てしまったのだろうか、それとも、今も夢の続きを見ているのだろうか。霧のかかった今の周囲の光景はそう思わせてしまう幻じみたものだった。

艦尾近くの彼の位置からは、艦が進んでいることを示す白い航跡が見え、大きな機関音も聞こえてくる。今この輸送艦は幽霊船ではなく生きた船として動いているのだ。

彼はそれに何故かとても安心した。

「に、してもさっきのは一体……」

まさか自分一人が見た幻覚だろうか。

とにかく艦内に戻って誰かに尋ねなければ。今のこの突然現れた霧といい、尋常ではない。

傍らの狙撃銃を抱き起こし、立ち上がった。

痛むところもない。ただただ頭にもやがかかったような感覚が残っているが、意識は完全に覚醒しているし、すぐに良くなるだろうと思った。

そして急いで足を艦内へ続くハッチに向かわせようとした時だった。

ラ……ララ……

旋律が霧を伝って彼の耳に届いた。

まるで引き留められたように、彼は足を止め、声の方を向いた。岩礁だろうか、乗っている輸送艦の右舷二百メートルほど先に何か見える。声はそこから流れてきているようだった。

「なんだ？ 歌？」

誰が歌っているのだろう、ここは太平洋のと真ん中のはずだ。彼は禁止されているものの、狙撃銃のスコープで確認してみることにした。

慣れた姿勢と動作で銃を構え、スコープに右目をあてる。

映画などで大抵の人間が見たことのある十の字形に交差した照準線^{クル}。その向こうの世界が彼の眼に映し出される。

ララ……ラララ……

輸送艦が岩礁から離れていき、霧の中に消えゆく中、彼ははっきりと見た。

「う……そだろ……！？」

岩礁には数人の人影があった。

最初はアシカなどの海棲動物が横たわっているのかと思ったが、そうではなかった。

その光景を凝視し、凍り付いたように霧の中へ没していく岩礁を

見送る。

「なんだ市之瀬！　こんな所にいたのか！」

すると背後で男の声がした。

振り向くと、そこに立っていたのは若い男性だった。

年齢的には二十代前半、市之瀬と同様に陸自の迷彩服姿だ。自衛官にしては優しげな印象を受ける柔らかな目元や、同性である市之瀬からみてもかなり整っていることがわかる顔立ちが特徴的だ。背もそこそこに高く、普通の人から見れば少し短い、自衛官にしては少し長い黒髪がよく似合っていた。

久世啓幸^{くせいひろゆき}三等陸尉。市之瀬の所属する小隊の隊長だった。

やっと生きた人間、それも自分と関係のある人物と出会えた。

姿を認めるなり、市之瀬は弾かれるように彼のもとへ駆け寄った。

「しょ、しょ、小隊長殿お！？」

滅多に敬語など使わない市之瀬が、この時ばかりは錯乱したように自らの上官の下へ走っていく。

途中、あまりの気の動転に脚がもつれて転げそうになりながら、彼は久世に詰め寄った。

「ほ、報告しますっ！」

「ど、どうしたんだい……？」

「いいい今、本艦右舷に、『人魚』の群れが！」

必死の形相でその方向を指さす。

久世がその先を何事かと確認するが、そこには濃い霧がかかっているだけでもう何も見えなかった。

市之瀬もそのことに気づいて呆然とする。

と、彼の上官はそつと肩に手をかけ、心配そうな表情を浮かべた。

「……落ち着くんだ市之瀬二士。どこか痛むところはあるか？」

「へ？」

「君は気を失ったショックで混乱しているんだ。大丈夫、医務室に行こう。自分で歩けるかい？」

「う、嘘じゃありません！」

「うん、そうだな。詳しくは医務室へ行ってから聞こう」

普段ならこの優しさが嬉しかったが、今はじれったいことこの上なかった。

「ちよつと待ってください！ ホントなんですよお！」

「ああ、わかつてるよ。さあ、艦内へ戻ろう」

がっしりと腕を掴まれ、連行されるように引きずられていく。徐々に市之瀬の叫ぶ声が艦内へと遠ざかっていった。

やがて甲板から二人の姿が消え、再び静寂が海原を支配した。周囲にはただスクリュウの巻き起こす白い航跡だけがはつきりとした形として海面に浮かび上がっている。

ややあつて、その航跡の横に、ちやぷん、と微かな音を立てるものがあつた。

それが数人の少女の顔であることに気づく者はいない。

霧中であつて、彼女らの美しさは全く損なわれず、宝石のような瞳が白い世界に花のように彩りを与え、波間には豊かな長髪が揺らめいていた。

彼女らの先には、あてもなく進んでいる輸送艦の艦尾がある。

少女たちが、人形のように整った顔で小首を傾げあつと、心配そうな表情で再び海中へと潜っていった。

彼女らの尾鰭おひれが、スクリュウの起こした航跡の中で踊っていた。

第2章 鳥

びよう、と風を切って飛ぶ感覚が彼女は好きだった。

ゴースト越しの眼前には、吸い込まれそうなほどに蒼い海原が広がっている。

マリースアの夏の潮風だ。世界がどんな惨状を呈しているようにも、とりあえず夏はちゃんとやってきてくれるらしい。

ラロナはまるで熱い血潮のように紅い髪を掻き上げた。

女だというのに肩にもかからない髪だ、とよく莫迦^{ばか}にされるが、彼女はこの機能的な髪型をそれなりに気に入っていた。

眼下の海原のような蒼い瞳は一点の曇りもない。

彼女は癖のように身につけている物を確認する。

空を飛ぶ人間はひょんなことで物を落とすので、その確認作業は癖になって当然だった。

まず、あるかないかの軽い防具。役割としてはほとんど儀礼的な部隊識別用である。鳥のシルエツトに槍と短剣が交差した？飛行軽甲戦士団？を表す紋章入りの短胸当て^{ハーフ・プレストブレスト}が輝かしい。

オリーブ色の履き古された短パンに、腰には白兵戦用の短剣^{カトラス}が提げられている。長時間の飛行で足が傷つかないように濃紺のニーソックスを履いているが、靴はとにかくとして、そろそろニーソックスの方は買い換え時だった。

「はっ！」

彼女は気合いを入れて手綱を操った。まだ十五歳になったばかりとはいえ、その動作は手慣れたものだ。

彼女は今、晴れ渡った空を飛んでいた。

乗っているのは、？鳥？である。

鳥といつても、当然普通の鳥ではない。翼長だけなら竜並みの巨大種である。

アルゲンタビス。

人を乗せ、人と飛ぶ大いなる鳥。

外見はコンドルに似ており、その偉容にふさわしい知性もある程度備えている。

比較的世界的に軍・商用に飼い慣らされている種であり、一般には？巨鳥？と呼ばれて親しまれている。

ラロナが小柄とはいえ、一人の他に旅道具一式を背や腹に掛けて長時間飛行してられるその馬力ならぬ鳥力はかなりのものだ。

竜と比べれば安価に手に入れられることなどから、一般的には伝令や偵察など小規模な役割を担っているが、数が揃えられる名産地では軍に専門の部隊が編成されることもあった。ラロナの属する部隊がそうである。マリーシア南海連合王国軍・飛行軽甲戦士団が正式名称だ。

この南の島々と、デメテル大陸の一部を領土とする連合国家が彼女の母国である。ラロナは大陸内陸部の山育ちだったが、美しいこの海原がとても好きだった。そのため、哨戒任務という地味な仕事でもそれほど苦にはならない。

「テール！ 気持ちいいなあー！」

背中に装着された専用の鞍に跨り、彼女は軍に入隊してからずっと組んできた？相棒？に語りかけた。

キュエ、と甲高くテールと呼ばれた巨鳥は応じる。

「うんうん。そうだろー」

ラロナがカッカと笑う。

ある程度巨鳥の言っていることが彼女には分かるのだ。その人外

じみた能力のおかげで彼女は飛行軽甲戦士団の鳥騎手ちよきしゅに選抜してもらえた経緯がある。

と、彼女の表情がさっと変わった。

潮の香りが変わったのを察知したのだ。

重く、まわりつくような空気。

潮の香りというより、場の雰囲気が変わったといったほうが正確だろう。

水平線を確認すると、霧のかかった海域が近づいてきていた。

「……もう少しで『人魚の海』か」

だいぶ飛んできたな、と彼女は呟いた。

そこには常に霧がかかり、決して晴れることはない魔の海域が広がっていた。

？大継承戦争？の頃に戦火から逃れてきた最後の海棲人マーフォークたちが住み着いた場所である。

なぜこの海域に住み着いたのかは、はっきりとしたことが判っていないらしい。王立教養学院での研究者には『閉鎖環境を創ることで種族を守るため』という説が有力だ。

なにせ、あの霧の中へ迷い込めば最後、ほとんどの場合生きて帰ってくる者はいないという。研究が進まないのは仕方がなかった。そんなわけもあって、あの海域の奥深くには、世界の切れ目があるのだ、という奇想天外な説もあるらしい。

が、なににせよ、今の彼女にとっては特にあの海域の真実なんかはどうでもよかった。

大継承戦争といえば神話の域、一千年以上前の話なのだ。そんな時代から存在し続け、前人未踏の場所など自分にはどうしようもないといしか言いようがない。

それよりも重要なのは今の任務だ。

現在の彼女の任務は領海の哨戒だった。

早朝に王都からほぼ一直線に進路をとってきたから、正午に差し掛かるうという今の時刻に人魚の海に到達するのはかなり早い。夏風が強く吹いていたため、テールが簡単に風に乗って飛べたからだろう。天気は左右される巨鳥の速度と行動範囲だが、今日は運が良かったようだ。

この海域は人魚の海の影響があつて船や商用巨鳥の往来は少ない。辺境といって差し支えない領域だ。

だが、海を挟んだ向こう側のルールイエ大陸からは比較的近いため、敵の侵攻が懸念されている軍事的重要地域なのだ。

敵。つい二ヶ月前にルールイエ最後の防波堤と言われた神聖プロミア帝国を滅ぼした国である。ルールイエ大陸をわずか五年でその手中に収め、このデメテル大陸に迫らんとしている。

フィルボルグ継承帝国。

ご丁寧に自らが世界の継承者であることを強調するために国名に継承の名を刻んでいる。

ラロナはじつと対岸の方向を監視した。

本来ならプロミア領だが、今は継承帝国の手に落ちている。

無論、必ずこの方向から敵船団が現れるとは限らない。それに、侵攻があるにしてもプロミアとの戦争である程度損害を受けている上、海を越えて軍勢を上陸させねばならないので、そう早くに敵影はみえないだろうと戦士団の中でも言われている。

しかし、ラロナは普段はずばらな性格だが、任務については生真面目だった。

彼女は気を抜かずに水平線を睨んだ。

彼女は目が良い。巨鳥乗りに必須の身体条件だが、その中でも飛び抜けていた。元々が山育ちだ。

「ん……？」

ふと警戒領域から外していた人魚の海に気配を感じる。

彼女の動物的な勘はよくも悪くも当たることが多く、本人もそれを信じていた。

ラロナは身体を緊張させ、感覚を研ぎ澄ます。
その瞬間だった。

ボオオオー

「おわっ！？　びっくりしたあ」

市之瀬は身体に振動が伝わってくるような汽笛の音を聞いて耳をふさいだ。

どうやら霧を抜けた瞬間に、全艦が警笛を鳴らしたようだ。
市之瀬は無許可で甲板に出ていた。

久世にも信じてもらえず、医務官からはしばらく安静にしておくように言われたのだが、自分が見た人魚の姿が頭を離れず、今度は先輩隊員に借りたデジカメを手に甲板に座り込んでいた。

結局再び人魚たちは姿をみせず、頭上には青空が戻ってきた。

残念な気もするが、空が見えるとはやはり安心する。

どうなるのだろうか、今回の派遣は。日本に帰還するとなると、派遣隊員に与えられる手当金がなくなるわけだから、骨折り損のくたびれもうけだ。

と、そんな給料のことを考えながら艦内へ戻ろうと立ち上がったとき、頭上を何かが横切る影が見えた。

「え？」

市之瀬が見たこともない影にはっと空を見上げる。

「何……だ？」

太陽を背にした逆光。シルエットしか認識できず、判然としない頭上をしきりに旋回していることからどうやら鳥のようだ。

だが、何か違和感がある。市之瀬は狙撃手として距離感の把握には人並み以上のものを持っているので、すぐにおおよその高度と対象物の大きさを割り出せた。

デカイ！

市之瀬は直感的にそう思った。

それが鳥であることは分かったが、そんな大きさの鳥など彼は聞いたこともなかった。

キューー、と鳥の鳴き声が海に響いた。

思わず身を縮こめてしまふ、威嚇するような声だった。

「うわっ！？」

いつの間にか、その生物は高度を下げていた。旋回していたのは徐々に高度を下げていたのだ。艦隊の合間を縫うように滑空している。

市之瀬は手にしていたデジカメの倍率を上げてその生物を追った。艦内へ戻るべきだとも思ったが、まだ高校生気分が抜けきっていない彼には好奇心の方が勝ったのだ。

夢中になってシャッターボタンを押し続けていると、彼はあることに気づいた。

鳥の背中には人が乗っていたのだ。

「嘘だろ……！？」

市之瀬はその乗っている人物をズームアップする。一瞬手ぶれ防止のいいカメラだ、と思ったが、次の瞬間に目を見開いていた。

乗っているのが幼い少女だと分かったからだ。ショートカットの紅い髪が、潮風と飛行の逆風に荒々しく靡いている。

紅い髪というのも驚いたが、それ以外にも驚くべき点があった。少女の格好が市之瀬には信じられなかった。

まるで大昔の兵隊のような鎧姿なのだ。

しかし鎧とはいっても、動きやすいようにかなり軽装化されている最低限のもので、腰には湾曲した短剣を提げている。

まあ海に出るのに防具なんか着込んでたら落ちたとき助からないか、と思いつくが、市之瀬にはそれ以上のことは分からなかった。

そもそもなぜそんな時代錯誤な格好でいるのだろうか。市之瀬が率直な疑問を抱く。

その間も彼女は細い両手で手綱を巧みに操っていた。

ゴーグルの奥から海原のように深く蒼い瞳がこちらを窺っている。え、こちらを？

市之瀬はカメラから目を離れた。

倍率ではない視界が戻ってくる。

しかしそのとき、倍率と変わらない巨大な鳥のシルエットが視界いっぱいに広がっていた。

「な、何なんだ……！？　これ!？」

ラロナは眼下に現れた？物体？に対して、形容すべき言葉が見つからなかった。

灰色の、巨大な何か。

彼女に分かるのはそれだけだった。

海の上に存在し、そして一定の方向へ進んでいるのだから、それはいわゆる船に違いない。だが、船ならば進むために必要な帆の類は一切それには見つけられなかった。にも関わらず、白い航跡を引きながらその物体は海の上を風のように早く進んでいる。それだけではない、この物体はあまりにも大きいのだ。マリースアの港を利

用する巨大な交易輸送船でさえ、この船の半分もないはずだ。

「し、しかもあっちって!？」

そう、入った者は出て来られず、また出てくる者もないはずの、人魚の海。

そこからやってきた異形の存在。

ラロナは全身の毛が総毛立つのを感じた。

何か、良くないことが起きるのではないか？

直感だがそう思えたのだ。

「と、とにかく、情報を収集しなきゃ」

彼女は必死になって冷静な判断を心がける。

自分の任務は哨戒だ。異常があればそれを可能な限り詳細に調べることが最優先である。

「数は五隻、色は灰色、全体的に角張っていて、人の姿は見当たらない」

彼女は目を懲らしてその物体の全容を把握しようとした。

普通、船なら甲板上に水夫などがいつも忙しく働いているものだが、そういった人間も見当たらない。何から何まで不可思議な船だった。それが、レーダー使用中は甲板への出入りが禁止されていることによるのを彼女が知るはずもなかった。

「テール！ もう少し接近してみよう！」

彼女は相棒と共に旋回すると、その物体の合間を高度を下げた飛行するのを試みる。

「船内に人がいる？」

イージス艦の艦橋の真横を飛び去った際に、彼女は目を丸くしてこちらを見ている海上自衛隊の乗員達を横目に見た。

だが、ずんぐりとしたライフジャケットを身につけたその姿は、彼女には奇怪な服装にしか思えなかった。

「一体どこの国の人間だ？」

やはり最初は仮想敵国である継承帝国の人間ではないかと疑ったが、どうもそうではないような気が彼女にはした。こちらに対して弓矢を撃つて来るなどの敵対行動も今のところ見られない。それにいくら継承帝国とはいえ、このような巨大な船を、それも帆も張らずに動くことのできるものを持ったという情報は聞いたこともなかった。継承帝国の海軍といえば、悪名高き海賊集団を母体としたものだが、海賊がこんな船を乗り回すとは思えない。

「分かんない……奴ら何者なんだろう？」

ラロナは、きつとこの報告を持ち帰ってしたところで、誰にも信じてもらえないのではないかと感じた。自分なら、きつとこんなバカみたいな話をされたら、鳥の上で羽毛に気持ちよくなつて昼寝でもしていた夢の話でもしているのだろう、と取り合わないはずだ。

「もつと確かな情報が必要！」

彼女はキツと表情を引き締めると、兵士としての使命感に奮い立った。

「こうなりや威力偵察だ！ テール、行くよっ！」

彼女は手綱をさばき、高度を更に下げた。

鳥騎兵は偵察任務に多用される。そして、敵への威力偵察は最も危険かつ重要な任務だった。が、彼女の思いついた威力偵察とは、つまるところ……

「あの船がいい！ 場所が平たくて空いてるから、着陸できるはず！」

単なる殴り込みなのだった。

「うわあああああつ！？」

市之瀬はあまりの迫力にその場に尻餅をついた。

そして、強く何度か羽ばたいて、突風を起こしながら巨大な鳥が彼の目の前に降り立った。見た目は大きい、身のこなしは軽やかだった。輸送艦の甲板は空母のように平たく広いためか、降りやすかったのだろう。

もう一隻の輸送艦は甲板に車両を満載しているために降りることが難しかったからか、と市之瀬が気づくが、それよりも今は艦内へ逃げなければならない。

這うようにハッチへ向かおうとするが、カメラを構えているときにすっかり乗り出しすぎていたために予想外に遠い。

彼は恐怖のあまり慌てふためいて背後にいる怪物から逃れようとした。
と

「おい、貴様！」

「どわあっ!？」

少女の怒気を孕んだ声だった。

次の瞬間、体当たりされるような衝撃を受け、その場に倒れ伏す。そして、背中に誰かが馬乗りになると同時に、首筋に冷たい感触が走る。

突きつけられているものが刃物であることを理解するのに時間がかからなかった。

「騒ぐな、ゆつくりとこちらを向け」

声は幼いが、本気さが伝わってくる口調だった。

うめくことさえできず、彼は言われた通りにする。

仰向けの情けない姿になると、自分の自由を奪っている張本人と対面する形となった。

蒼い瞳、紅い髪、はつとするような美しさを持った少女がそこにいた。

しばし言葉を失い、少女の顔をまじまじと見つめる。

ゴーグルを今は脱いでいるため、顔の全容がよりはっきりと分かった。

少女のそれは野性味のある美しさで、自分が持っている魅力を全く理解せずに生きているのが一目でわかる、そんなボーイッシュさを備えたものだ。

……カワイイのにカメラ映えないタイプかな。

刃物を首筋にあてられていなければもっとそう感じたことだろう。そして、なんの理由があつてこんな目に遭わされているのか、彼には全く見当もつかなかった。

「お前たち、いったい何者だ？ この鉄船の行き先は？」

ラロナは冷たい視線を向けながらそう尋ねた。

え？ 日本語じゃないか……

市之瀬は彼女の口から発せられている言語が流暢な日本語であることに気がついた。

「それにしても何て大きさ……まるで島じゃないか！ 信じられない、本当に船なのかこれは？」

しきりに少女は辺りを見渡しては意味不明な言葉を呟いている。
だが、今は命がかかっているときだ。そのことに言及する余裕はなかった。

「お、俺たちは日本人だよ！ 国連部隊のさ！ テレビでやってない？」

市之瀬は自分に向けられた敵意が誤解なのだとばかりに、肩に刺繍された日の丸のワッペンを彼女へ見せた。
だが、少女はきょとんとした顔で市之瀬の見せる日の丸を見つめる。

「はぁ……二ホン？ て……れび？ なんだそれは？」

嘘だろなんで通じないんだよ！？

日本という国名くらい知っていてもおかしくないはずだ。

（もしかしてあんまり教育が行き届いていない国の女の子なのかな？ いやそれにしては日本語話せるし……）

「ひょっとして……あ、あんた海賊か？」

市之瀬は航海前にニュースでやっていた日本の貨物船などを狙う東南アジアなどの海賊のことを思い出し、そう口にしていた。こんな凶鑑にも載っていないであろう巨大な鳥を駆る海賊など聞いたこともないが。

？海賊？という言葉聞いた途端、少女の表情が険しさを増した。

「誰が海賊だとっ！」

「ひいつ！？ わ、悪かったよ！」

今にも首に刃を突き立てそうな剣幕の少女に圧倒され、市之瀬が叫ぶ。

「貴様アタシの栄えある飛行軽甲戦士団の紋章が分かんないのかっ！？」

少女が自らの胸に手をあててそう詰問した。

「な、なんだよそれ？」

訳が分からずに市之瀬がそう言うと、少女が信じられないといった表情をする。

「ほら！ ここだよ！」

胸をずい、と突き出して何かを強調した。

「分かったか！？」

「……ちっちゃい胸だね」

ピク、と彼女のこめかみが反応した。
そして、どこか爽やかな笑みを浮かべる。

「……貴様、名は？」

「い、市之瀬」

「そうかイチノセ、珍しい名前だな。今から死んでもらうのが惜しいよ」

人間の部位でも最高の急所に刃物を押し当てられている市之瀬は、顔を真っ赤にしてジタバタとした。

「ちょ、ちよつと待てえー！？」

その瞬間、彼が逃げこもうとしていたハッチから大勢の隊員たちが飛び出してきた。

「おいあそこだ！ 陸自の若い奴が捕まってるぞ！」

「なんじゃ、あの化け物みたいな鳥は！？」

海自の隊員らが不審者対処用の強化プラスチック盾や警棒を手に駆けつけてきたらしい。

彼らはまるで警察の機動隊のように盾を構えると、分隊長らしき壮健な男が拡声器を手に少女へ呼びかけた。

「その不審者、君は包囲されている！ 人質を放して降参しなさい！」

マニュアルか何かにはそう言うように記載されているのだろうが、別に今の彼女は包囲されていなかった。

「誰が不審者だあーっ!?」

なぜか拡声器の増幅された声に一瞬怯んだ少女だったが、すぐに組み敷いている市之瀬を引き起こして怒号を発していた。

「ちよっ……乱暴にしないでくれって」

「やかましい黙れっ!」

腕を締め上げられた。

「あいたたっ!?!」

「ちっ!」

いくら市之瀬が無防備とはいえ男相手に少女の体格では少々無理があつた。

しかし、制圧部隊は彼女の背後でこちらを睨む巨大な生物を恐れてか対処に窮しているようだった。

奇妙な均衡状態が漂う。

市之瀬はちらりと彼女の横顔を盗み見た。

彼女の顔は、自分より幼いはずなのに、なぜか大人びて見える。

心に一本の芯が通っているような強固な意志を感じさせる、そんな顔つきだった。

彼女が何者なのか一切分からないが、市之瀬にはそれだけが漠然と理解できた。

しばし思考した後、分の悪さを感じたのか、突然少女が勢いよく市之瀬を突き飛ばす。

「うわっ」

甲板に叩きつけられ悲鳴を上げる市之瀬を尻目に、少女が駆けた。

市之瀬はその背中を見るなり、思わず呼びかけていた。
なぜそんなことをするのか、気が動転しているのか彼自身にもよく分からなかった。

「な、なあっ！」

市之瀬の鋭い声に少女がさつと振り向いた。
蒼い瞳が市之瀬を捉える。一切の迷いのない、真っ直ぐな視線だった。

そしてその顔は真剣そのものだ。
なぜだろう、と市之瀬は自らに問いかける。
……こんな面構えした女の子、見たことがない。
市之瀬は心に芽生えた不思議な感覚に戸惑った。

「じゃあ、君の名前はなんなんだよ？」

咄嗟に思いついた言葉はそれしかなかった。
少女がまたきょとんとした表情を見せた。
おそらく本人に自覚はないのだろうが、険しい顔が和らいで、円らな目になっているのが可愛い。
彼女は逡巡したようだったが、そう間をおかずに答えていた。

「ら、ラロナ……」

遠慮がちにそれだけ言うと、彼女は踵を返した。

「テールっ！」

叫び、彼女は軽やかな身のこなしで巨大な鳥の背に跨る。
鳥が威嚇するように大きく翼を拡げた。

少女が手綱を引っ張ると、艦首の方へと向きを変え、そして走り出した。

甲板を滑走路代わりに助走をつけたのだ。

艦首から飛び降りるように甲板を鋭い爪で蹴ると、まるでグライダーのように風を掴んでいた。滑空し、数回羽ばたいて高度を上げる。

クエー……

鳥の鳴き声が徐々に遠ざかっていった。

「行ってしまった……」

イージス護衛艦？いぶき？の艦橋で双眼鏡を覗きつぱなしだった加藤が呟いた。

今しがた起こったことをどうにか理解しようとしているのだ。

それは艦橋にいる者全員に共通している。

皆が青空が戻ってきたことに喜んだ矢先の出来事で、艦橋内は様々な言葉を交わす雑然とした空気が支配していた。

しかし、加藤だけは信じられないことが起きたと異口同音に言う他の幹部隊員たちとは違い、必死に今の状況について何らかの結論を出そうとしている。

主席幕僚の義務感もあるだろうが、これは彼自身の柔軟さや適応能力の高さもあった。

硬直した思考を持ってしまうがちな自衛隊幹部の中では例外的な存在である。

ざわざわと落ち着かない雰囲気は艦橋を包んでも、加藤はほとんど動揺を見せずにいた。

「何か、分かったか？」

他の海自隊員と同じく灰色の救命胴衣と鉄帽を身につけた、紺色の作業服姿の蕪木が、司令席を降りて隣に静かに立っていた。若く、異質な存在になりがちな自分を理解してくれる得難い人物である蕪木に対して、加藤も信頼を寄せていた。

ええ、と明るく答える。

彼の声に、示し合わせたかのように艦橋が一斉に静まった。注目を集めても平然とした様子で、加藤は一つ咳払いする。

「我々が士官室に現れた翼を持った少女の引き起こした異変により現在位置を見失い、濃霧の中を迷走して約二十二時間が経過しました。その間、あらゆる周波数帯が沈黙。通信手段を失ったまま、緊急措置として最寄りと考えられたグアム島の米軍基地を目指す進路をとっていました」

加藤は異を唱える者がいないことを確認して一呼吸を置く。

「しかし、霧を抜けたと思ったら、あの鳥です。乗っていた少女の国籍も不明……しかしこれはさほど重要なことではありません。これは今後の問題であり根本的な問題ではないからです」

加藤はかなりの重大事に達しない先刻のことについてあまり言及はしなかった。

だが、代わりに現在の通信・レーダーの状況を？いぶき？の艦長に詳しく尋ねる。

「では霧が晴れた今も、何の電波も傍受できないんですね？」

「はい」

「故障ではない？」

「三回も点検しましたが、機器そのものに故障はありません」

「衛星位置観測システムも、人工衛星からのレスポンスが消失して使用不能……ですね？」

「いぶき？艦長は無言の肯定をした。」

加藤は断言した。

「そんなことは地球上ではありえない」

それはその場の人間が最も強く感じていた疑問だった。

電波妨害をかけられているわけでもないのに、民間のラジオ電波や衛星通信までもが全てダウンするというのは絶対にありえない。

しかし、ありえないことなのだから、そうなっている原因が分からなかったのだ。

自然環境以外の電波の消失。

そう、それはまるで世界そのものが消失でもしたかのような現象だった。

ぼそぼそと何人かが加藤の言っていることの意味を図りかねて不安げに話し始める。

加藤が続けた。

「量子力学の？多次元解釈？というものをご存じですか？」

「いや……なんだねそれは？」

蕪木が聞き慣れない言葉に少し驚いた様子で答えた。

加藤は腕を組み、片手の人差し指を立てて教師のように説明を始めた。

「？シュレディンガーの猫？という思考実験で有名な分野なのですが、量子力学では極論してしまうと世界は一つだけではない、という仮説があるんです」

「世界？」

「そう、世界です。我々が住む世界には多数の平行世界が存在し、平行しているがゆえに交わらず、我々には知覚できないし、存在を知る術也没有ありません」

加藤の淡々とした話し声は聞く者の耳にすんなりと入ってくる不思議な説得力があった。

「ですが、なんらかの方法で別の世界にあるものを我々の世界へもつてくることができたなら？」

加藤はそこまで言って、メガネを珍しく神経質そうに中指を差し、位置を直した。

「あの翼を背中にもった少女という？観測者？の存在は、重なりあった可能性に形を与えることにより、自らを？結節点？として我々を別世界へ引きずり込むことをも可能にしたのでは……？しかし、一体なぜ我々である必要が……？」

「加藤二佐、いったい何の話をしているのか私にはさっぱりわからんよ」

幹部の一人がヤジを飛ばすように遮った。しかし、加藤はそれ在意を介さずに話を進める。

そして、少し早く、結論を導き出すことにする。

「つまり、僕の仮説が正しいなら……世界が消失したのではない」

居並ぶ幹部たちを見渡し、彼が宣言するかのように言い放った。

「その逆、つまり今、我が艦隊の方が？平行世界？に迷い込んだ！」

第3章 上空

マリースア南海連合王国の王都？セイロード？の王城からは、城下町として栄える海洋交易都市としての都と、国家の象徴ともいえる整然とした活気ある都としての両方を一望にできる。

夕刻になってしばらくの時間があつたので、そろそろ教会の鐘の音が聞こえてくるはずだ。全てが朱に染められた逢魔が時に、悪霊を追い払う光神の音色である。

都の湾岸線は大きく三日月型を描いており、その両側は岬となっていた。低い岬が灯台で、高い方が王城だ。

王城はその岬を古くから改築を繰り返し、記録に残っているだけで六回目の拡張整備の後に今の姿に落ち着いていた。目を見張る白い王城は、大陸横断街道經由でなくては手に入らない白大理石の城壁で、建築様式は前期光母教建築^{しうぽきやう}。五本の天を突く尖塔と、宮殿には金や真珠、翡翠などをふんだんに使用した華美な様式が印象的である。

ラロナの部隊の駐屯地は対岸にその王城を望む灯台の足下にあつた。

岬の先端、助走路として荒く整備されている場所に滑り込み、巨^{アルゲ}鳥^{ンタリス}のテールを鳩舎へ入れることも投げ出して宿舎へと走る。

途中、何人かの同僚が血相を変えた彼女に驚いて声をかけるが全て無視する。

二階建ての頑丈そうな石造りの建物へたどり着くと、立哨当番日であろう幼い少年の衛兵を突き飛ばして戦士団長室へと駆け込んだ。質素な執務室といった室内には、豊かな草色の長髪を持った妙齡の女性が座っていた。

名をカルダといった。

マリースアは文化的に名字を重視しないという特殊な背景を持つ

ている。そのため、カルダも名字を今まで部下の前で口にしたこと
がなかった。それは貴族として歴史的に義務付けられたもので、カ
ルダが貴族のステータスである名字や爵位を誇りに思っていないわ
けではなかった。南海連合王国という名であるように、様々な文化
を持つ国や民族の連合体がこの国なのだ。

ちなみに、ラロナのような平民は名字を持つ者、持たない者と混
在している。便宜上、ラロナが名字を名乗る必要に迫られた場合は、
母の名前を名字として代用する。

「何事ですか？ ラロナ練戦士^{れんせんし}」

練戦士とはこの国での戦士団で用いられる階級である。下から練
士生・練戦士・戦士……と上へ続いていくので、下から二番目のラ
ロナはやつと半人前といった階級の兵士だった。

そして、目の前のカルダは若いものの階級は戦士団長、部隊の長
であり、更に戦士団では少ない貴族身分だった。

封建社会において身分は絶対である。階級以外にも貴族へ対する
畏怖からラロナは非礼を詫^{わづ}び、床に片膝を立てて頭^{うづ}を垂れた。

「突然の無礼をお許してください！ ですが可及的速やかにご報告せ
ねばならないことがあるのです」

カルダが右目にかけていた片眼鏡^{モノクル}をそつと外した。
動作の一つ一つが洗練されている。さすが貴族だ、とラロナは思
った。

彼女が身につける黒の槍兵将校用の夏外套は、ユニコーンの家紋
が入っていないければ、まるで拝月教^{はいげつきょう}の修道女のようなだった。

切れ長の双眸がラロナを捉える。

彼女の眼光は高貴さを表す紫水晶のような輝きを持っていた。

「……よろしい。手短に」

ラロナは元気よく顔を上げ、昼に自分が経験したことを早口で捲し立てた。

人魚の海から何かが現れること自体が大事件だが、更に出てきたものが巨大な城のような鉄の船。数は五隻、国籍不明。

いつもは凜として冷静な表情を崩さないカルダが、その報告にやがてうつすらと額に汗をかいだ。

「まさか、フィルボルグ帝国か？」

敵国の？継承帝国？という傲慢な名をマリースア貴族らしく口にしない。

カルダは今現在最も懸念されている国について言及したのである。プロミニア占領という対岸の火事が、こちらにも飛び火する勢いを持っているのだから当然といえた。

「いえ、私が見た限りではそうではないかと……」

少々齒切れ悪く、ラロナが答えた。

彼女自身そのことを考えていたが、しかし短剣一本でおとなしくなる帝国兵などいるだろうか。

それを思うと、とてもではないがあゝの蛮勇で知られる帝国の人間とは言い切れなかった。

イチノセ。

あの少年の名前を思い出す。

男のくせに、ずいぶんと情けない声を出す奴だった。あんな奴が軍人であるはずがない。

彼女に分かるのはそれだけだった。

（まるで、別世界から来たような奴だったな）

ラロナはそんなことを考えてうつかり笑いそうになるが、貴族の前であるのを思い出して堪える。

カルダは大きいため息をついた。

一瞬、笑いそうになったのを気付かれたのかとヒヤリとしたが、そうではないようだ。

「……今はそんな不確かな報告の真偽を正している状況ではない」

カルダは椅子を立ち上がると、窓から海の方こうへ沈もうとしている太陽を眺めた。

「カルダ戦士団長？」

「なあ練戦士、今この世界はどうなっていると思う？」

唐突に話題が変わり、ラロナは思わず間抜けな声を出す。

「え？」

しかし、カルダの美しい顔には苦悩が見て取れた。

深く、沈痛な表情。部下の前ではまず見せない姿である。

何か、様子がおかしい。ラロナにはそう見えた。

「あの千年帝国と呼ばれたプロミニアさえ滅んだ。そして、今のフイルボルグ帝国との最前線は……このマリースアなのだ」

ラロナは、その言葉の意味するところを理解するのに、しばしの時間を要した。

そして、カルダが口にしたことが、まだ公表されていない軍事機

密であることを知る。

心臓が、悪魔に驚掴みされたような驚愕をラロナは感じた。

「その鉄でできた船と、国籍不明の外国人共が帝国軍でないなら今はどうでもよい」

カルダは部屋の隅に置いてある槍を手で撫でた。

戦いの予感が、彼女の心には確かにあるのかもしれないかった。

「覚悟しておけ練戦士。今日、最後通告が我が国に届いたそうだ」

ラロナは、次の言葉を耳を塞いで聞きたくないと思った。だが、兵士として、聞かなければならなかった。

ごくろり、と乾いた喉を鳴らす。

上官は、冷静な声で言った。

「フィルボルグ帝国が、我が国に宣戦布告した」

洗剤を水をまいたタイルの床にぶちまけると、デッキブラシを両手にガシガシとこすり始める。デッキブラシは高校で使っていたのと同じだ。

無断で甲板に出入りし、しかも正体不明の少女に命を脅かされ、海自の関係各部署に多大な迷惑をかけたとして、今後一ヶ月の艦内各所のトイレ掃除を罰直された市之瀬二等陸士は、夕飯を食べた後に訪れるはずの自由時間の一切を剥奪されていた。

中隊長からの叱責の中で小隊長の久世が庇ってくれなければ減俸……会社という減給処分を受けていたところだろうから、まだこれでも感謝せねばならないのだろうか。

今着ているのは迷彩服ではなく、古いタイプの深緑の作業服だが、ズボンの裾を巻き上げているにも関わらずびしょ濡れになっていた。しかし、そんなことよりも彼は、作業中にもずっと頭から離れないことがあった。

あの真剣な眼差し。

ふう、と一息をつく。

なぜか、彼女のあの顔を思い出すと、自分のことが情けなくなってくるのだ。

理由は分らないでいる。

やめだやめだ！

市之瀬はもう少し楽しいことを考えることにする。トイレ掃除の精神的な負担に加え、作業の単調さは一種の拷問なのだ。

彼女が唯一まともに答えてくれた言葉を脳裏に蘇らせる。

回想の中で、彼の脳内フィルターを通して少し恥ずかしげに頬を染めている少女。

『ら、ラロナ……』

ちょっと可愛かったよな、とデッキブラシのピストン速度を遅くして考える。

心なしか、顔が笑っていた。
と

「手を抜いちゃいかんよ？」

「ぬおっ!？」

驚きのあまり水の入ったバケツを蹴飛ばしてしまい、更に服を濡らす結果を招く。

「しよ、小隊長っ!？」

市之瀬の叫びに表情を一切変えないで、迷彩服姿の久世が入り口に突っ立っている。

まるで、出来の悪い弟を諭すような冷静な口調で彼は答える。

「ここはもういいよ。明日に備えてくれ」

「明日、ですか？」

久世の言わんとしていることが分からず、市之瀬が聞き返す。

「ああ、僕と君で、任務に就くことになった」

知的な顔に、苦笑いを浮かべて、上官はそう言った。

昼食後一時間で久世三等陸尉の指揮下、搭乗開始。それ以上はあまり説明もなかった。

明石標準時で午後13時半、天候は快晴。風は潮風がやや強めだった。

隊員の間で『自分たちは今どこか違う世界にいるらしい』という噂で持ちきりの今、市之瀬はそれに参加することもできずに、輸送艦の後部甲板に待機しているへりに乗り込んでいた。

「こちらグリーンアイ、了解^{ラジャー}、発艦する」

コクピットからパイロットの声がエンジン音の中に微かに聞こえた。

貨物室^{キャビン}で市之瀬は一番端のシートで縮こまって狙撃銃を抱く。隣には久世、その向こうには映像電送装置の操作員が座っている。

この輸送ヘリは胴体側面に巨大なバレーボールのような球体カメラが着いた偵察仕様である。自衛隊では災害派遣でよく活用され、被災地の映像をリアルタイムで遠い基地や対策本部へ送ることができる。

ふわりとヘリが浮いた感覚に、市之瀬はサイドドアの四角い窓から外を眺めた。

流れるように海の風景が過ぎていく。美しいが単調な景色だった。

「どうしてなんですか？」

ヘリが巡航飛行へ入ってしばらくすると、市之瀬は隣の久世に聞いていた。

「何がだい？」

戦闘帽に防弾チョッキという完全武装の出で立ちの久世は、その質問の意味を分かっている様子で、あえて聞き返す。

「偵察なら偵察専用のヘリがあるじゃないですか？」

「ああ、あれかい。あれは見た目が戦闘ヘリに似ているからね、上がいわゆる『配慮』を気にしてね。どうみても輸送ヘリにしか見えないこの機体で行くことにしたんだよ」

「じゃあ……」

市之瀬は狙撃隊員用のブッシュハットの下で、少年らしい輝きを宿した瞳を手元へ向けた。

「どうしてこんなもん持ってきてくんです？」

狙撃銃の他にも、弾薬をポケットに詰めた集約チョッキを着用し、

救急キット・サバイバルキットなどが入った雑嚢ざつのうを袈裟懸け、腰の弾帯……軍用ベルト……には銃剣や水筒・折り畳みスコップ、右太股にはレッグホルスターに収められた9ミリ拳銃が装着されている。こんな装備は、よほどの大きな実弾演習でなければ身につけたことがない。

「何かあったときのためさ……」

久世はフライトヘルメットを被った操作員が操作パネルのジョイスティックで操るカメラ映像を、共に注意深く監視しながら言葉を濁した。

市之瀬はため息をついた。

……何かって何さ？

とはいえ、幹部である久世が言葉を濁す理由は分からないでもない。これはおそらく上層部の考えが如実に表れた結果なのだ。

またあの化け物のような鳥に襲われないと限らないのだが、偵察ヘリは出せない。となると、せめて護衛の隊員には完全武装させておこう、といった落としどころだったのだろう。

嫌な予感がするのは、自分のようなダメ隊員を行かせるということだった。

危険だから死んでもよさげな奴行かせてるんじゃないだらな？

久世は若い幹部だし、自分は二等陸士という一番下っ端だ。上が考えていることをどうにも邪推してしまうメンツだった。

考えてもしょうがない。市之瀬は水平線の向こうから現れるはずの陸地を探すことにした。

それからしばらくの時間が経ち、市之瀬がなかなか現れる気配のない陸地に飽きがきて居眠りしそうになっていた頃だった。

「見えた！ 陸地だ」

操作員が快哉のように叫んでいた。

慌てて顔を起こすと、はっきりとした輪郭を見せ始めた陸地が確認できた。

こうした形で陸を見るのは市之瀬も初めてで、思わず身を乗り出す。

「街だ……」

市之瀬は誰に言うでもなく呟いていた。

ヘリが高度を下げて陸地へ接近していくと、その光景は次第に鮮明となってくる。

やはりそこは街に違いなかった。いや、規模からいって都市といつていい。

使っている石材の関係からだろうか、建物の多くは白い壁に茶褐色の屋根といった見た目だ。木造らしきものも多い。市之瀬は、テレビの旅番組で見た地中海の風景にどこか似ているように見えた。高層ビルの類はないが、都市の中央に位置する広場らしき場所の前には、巨大な鐘楼を持った建物が聳え立っている。

上空からは、都市が三日月型の湾岸線から扇状に広がっているのが分かる。都市は海側と、その後ろには山岳地帯があることから、いわゆる扇状地の地形に沿って創られていた。

ヘリはその突端にある岬の上、灯台らしき物の上を通過していった。

これはカメラに写されて艦隊にも届いていることだろう。

きっと大騒ぎになっているに違いないと市之瀬は思った。

自分でも信じられない気持ちだったが、あの少女に出会った時から薄々何か違和感を持っていたのも確かだった。

改めて目の前に広がる見たこともない町並みに、市之瀬は言葉を失う。

ヘリの乗員全員が、いや、この映像を見ているであろう艦隊の者

もそうであることは想像に難くない。

「あれは城か？」

久世が都市で一際目立つ巨大な構造物を見つけて呟く。

へりも、そこが最も施設としても重要である可能性が高いと認め、進路をそちらへ向ける。

「あ、あれ……？」

そんな中で、市之瀬はふとあることに気づいた。

都市の上空を何かがしきりに飛び交っている。

この距離から一見すると、まるで腐ったミカンにたかるハエのようだった。

しかし、それだけではない。

市之瀬は胸騒ぎのようなものを覚えながら、隣の久世に言った。

「街、燃えてないすか？」

立ち上る黒煙が、一つ、また一つと増えている。

目の錯覚ではない。現在進行で何かが起こっているのだ。

ただならぬ気配を感じ取ったのか、久世がパイロットに叫んだ。

「帰投しては？」

「ああ、今許可をとつ……」

その瞬間、市之瀬は何かが激しくガラスを叩き割る凄まじい音を耳にした。

「わぁっ!？」

何が起きたのか理解する前に、ヘリがコントロールを崩して下降を始める。

ジェットコースターに乗ったとき、最初に滑り降りるあの感覚だった。

機体内に耳を劈く甲高い警告音が鳴り始める。

市之瀬が慌てて体勢を立て直してコックピットを垣間見ると、コックピットのフロントガラスが全面に渡って割れ、計器板に何か赤いものが散乱していた。

それが人間の血だと理解したとき、市之瀬は突風に煽られる枯れ葉のように揺れる機体内で絶叫した。

「うわああーっ!？」

叫びが高度警報のアラーム音にかき消されていく刹那、市之瀬はさっきまで見下ろしていた城が自分を吸い込むように広がってくるのを見た。

マリースア南海連合王国の王都・セイロードは混乱の中にあった。早朝、日の出と共に始まったそれは全くの奇襲攻撃だった。

朝日を背に、大量の巨鳥の群れが王都の空を埋め尽くした。その巨鳥は、ルールイエ大陸産の黒毛鳥であるのに気付いた都の住人は多かったが、今から何が起こるのかをすぐに理解するにはそれはあまりにも唐突過ぎた。

黒毛鳥は都の出入り口に当たる陸側に着陸すると、載せていたフイルボルグ帝国兵達を降ろし、またすぐに飛び立って行った。その第一次の上陸により、都は完全に封鎖されるという状態に陥った。

そして、時を置かずして行われた第二次上陸。これは本格的な攻

撃部隊の上陸となった。そして、それを阻もうとするマリースア軍を一掃したのが、他でもない帝国軍の竜騎士団だった。数にして五十騎を超える竜を前に、小国の、それも虚を突かれて反撃体制が整わない軍が太刀打ちできるはずがなかった。

そして、マリースア軍は早々に方針を敵の撃退から一般市民を城へ避難させるまでの遅滞行動……つまり時間稼ぎへと転換した。

都市を封鎖されての戦闘は、援軍も撤退しての再編成も期待できない絶望的な戦いだった。

そしてその中には、ラロナの姿もあった。

与えられた任務は伝令兵。混乱状態にある都市の各守備隊が連携して防御に当たることができるよう、命令を伝達していく役割だった。

最前線ではないからと軽んじられることもある任務だったが、今のこの都市に最前線でない場所などないも同然だった。上空は常に敵の竜騎士が我が物顔で旋回し、伝令の巨鳥を見つけるなり襲いかかって血祭りに上げてしまう。

「転進命令が出た」

戦時につき、ラロナ達同様に軽装の防具を身につけたカルダが、残存兵を前にしてそう口にした。

転進。それはつまり、退却を言い換えた単語だった。そのことを兵士達も理解している。

都市中央部の広場に集合した彼らの顔に不安と屈辱の色が滲んだ。都市の中央部でなんとか維持していた戦線が崩壊し、もはや組織的な抵抗は不可能となったのだ。城へ退却するのは末期的な戦いであることを暗に語っていた。城の中へ国民と残存部隊を収容し、籠城する構えなのだ。だが、籠城は援軍が来ることが前提の戦法だ。その望みがないこの戦いで、それは得策とはいえなかった。だが、他に方法はない。

ラロナの属する飛行軽甲戦士団も、既に行方不明と戦死者を合わせれば、既に半数近くの兵を失っていた。これは、部隊としての戦闘能力の喪失を意味した。

ラロナは、最前線からの伝令から帰還して聞かされたその命令に落胆の色を隠せなかった。自分自身、幾度となく上空で敵の竜騎士に殺されかけた。同行していた戦友が食われるのも目の当たりにした。

せめて奴らに一矢報いたい！

その思いは今にも爆発しそうだったが、現実是非情だった。

ぐつと怒りと悔しさを押さえつけ、命令に服従する。

あの謎の船団についても、今のこの非常事態にあつては忘れるよ
りない。カルダにしても、気になつていても考える暇がないよう
だった。

あのイチノセという名の少年の顔を思い出す。

……お前は、やっぱり敵なのか？

ラロナはそんなことをなんとなく考えた。あの船団が今のこの
帝国軍の奇襲攻撃に合わせて出現したことといい、そう思うのも無
理はなかった。

……それとも、私の方こそ幻でも見たんだろうか？

人魚の海の近くで起きたことだ。その可能性も否定できない。戦
場という現実の仲にあつて、あの海で

見た非現実極まりない存在の記憶は、たった一日で自信のない曖昧
さを持ち始めていた。

「これより城へと転進、その守備に当たる」

カルダが命令を発すると、この状況にあつてまだ士気旺盛な部下
達が応えた。

「はっ！」

カルダは部下達を頼もしげに見渡した。
薄汚れ、中には負傷している者もいたが、それでもなお祖国を守るために戦う気概を失ってはいない。

「ここから城まで、アルゲンタビスに乗って可能な限り辿り着け。
途中、安全な空はない。よって、各人の鳥騎手としての腕だけが頼りだ」

カルダは片眼鏡の奥の鋭い目を部下達に向けた。

「向こうで、落ち合おう。もし落ち合えなかったなら……」

彼女は自身の鳥に跨った。

「『戦士の海辺』で会おう！」

彼女が先陣を切って飛び立つ。

巨鳥は羽ばたいている内が最も目立つ上に無防備だ。おそらく、彼女は上空の敵の注意を自分に引きつけるつもりなのだ。
そんな上官に奮い立った部下達が続いて行く。

「行くぞガキ共！」

老年の古参兵が行く。

「『戦士の海辺』で会いましょう！」

ラロナの先輩にあたるまだ若い娘が叫ぶ。
名誉ある死を遂げた戦士が辿りつくと呼ばれる、死後の世界を願

いながら。

「テールっ！ 行くよ！」

ラロナも遅れまいと飛び立った。

部隊は各班に別れ、可能な限り散会しての撤退となった。

ラロナは街の建物の影を縫うように飛んだ。低空飛行だけが敵の竜から逃れられる最善の策だ。恐ろしい速さで風景が自分に向かって流れて来る。一瞬でも気を抜いたら建物の壁に衝突して一環の終わりだ。

（光母神様！ どうか敵に見つかりませんように！）

勝ち気な性格の彼女がそう願うのは屈辱的なことだったが、そう祈らずにはいらなかった。

「うわあああ!？」

彼女の願いも虚しく、飛び立ってそう間を置かない内に背後で味方の悲鳴と、巨鳥の断末魔が聞こえた。

振り返ると、背後の空に敵の姿が見えた。

白い体表の竜、おそらく大陸北方の氷結竜だ。

ラロナも話に聞いたことしかなく、その話を聞いたときは格好良いと興奮したのを覚えているが、今、敵としてそれを目の当たりにして感じるものは恐怖だけだった。

氷結竜がカツと口を開くと、中から高速の氷の刃が打ち出された。次の瞬間、鈍い音を立ててラロナの隣の通りを飛行していた仲間の鳥の羽毛が舞うのが垣間見えた。建物に阻まれ、その串刺しにされた姿を直視しなかったのだけが救いだった。

「クソっ！ クソおっ！」

ラロナは齒を食いしばり、無力感に叫ぶ。

竜騎士相手では巨鳥では太刀打ちできない。いや、竜騎士を倒すためには莫大な兵力と、そして運が必要だ。マリースアに、そんな余裕はない。それが意味することは、もうこの国は帝国の侵略を撃退することが叶わないのではないかという恐ろしい結論だった。それを打ち消したい一心で、ラロナは叫んでいた。

そして、彼女は低空飛行を止めた。

一気に高度を上げ、竜と同じ高みへと登る。地べたを這いずるようにして死ぬのだけは嫌だったし、自分がこうして踊り出れば、注意はこちらに集中する。それだけ、味方が生き延びる確立が上がるはずだ。

「ラロナ！？ ダメだ！」

仲間の誰かの声が聞こえたが、彼女は止まらなかった。

「来い！ アタシが相手だ！」

彼女は旋回すると、敵と真正面から向き合うコースを取る。

イチかバチか！

ラロナは腰の短剣を抜いた。

重いためと自分が扱うには非力であるために、短槍を用意していなかったのを後悔したが、贅沢は言っていられない。

狙うのは敵と空中接触して敵の竜騎士に肉弾戦を挑むことだ。鳥と竜なら、空中の能力に差はない。むしろ、身が軽いこちらの方が有利だ。

「勝負っ！」

ラロナは敵の注意を自分に集中させるべく、気合いを入れて身構えた。

と

「ん……？」

何か聞き慣れない音が聞こえる。

竜騎士達の動きも変だ。

こちらではなく、海の方角に注意が逸れているようだった。

規則的な音が、風を震わせていた。

バラバラバラバラ！

その音を何と例えるべきか、ラロナには適当な語彙が見つからなかった。あえて表現するなら、空気そのものを叩いているような音だろうか。それはこの世のどんなものが出す音とも異質なものであった。

「な、何だよ……アレ？」

振り返ったラロナはそれを見た瞬間、ここが戦場であることさえ忘れてそう口走っていた。

？それ？は空を飛んでいた。

空を飛んでいるということは、アルゲンタビス同様に何か飛行能力を持った生き物であると考えるのが普通だ。

だが、？それ？は緑色と茶色の模様の、明らかに物体の一つだった。その形状も異様で、箱に尻尾がくつつき、その箱の上で目にも留まらない速さで風車が回っている。

まるで冗談のような物体だ。子供の空想でさえ、こんなものを思

いついたりはしない。

しかも、ここは戦場だ。そんな場違いな空想の産物があつていいはずはなく、それを見た者は敵も味方も皆、呆氣にとられてしまつていた。

そして幸い、それによつて味方を追撃する竜騎士はいなくなつた。だが、自分も、そしておそらく敵の竜騎士も、その？物体？が何なのか、全く理解できなかった。

しかし、ラロナにはある確信があつた。

きつと間違いない。あの物体は、あの船からやつてきたのだ、と。やつぱり幻なんかじゃなかつた！

そう彼女が思つた時だつた。

「あつ！」

竜騎士が動いた。

その物体を、敵として認識したらしい。

仲間を屠つてきた、あの氷の刃が打ち出されるのを、彼女はただ見ていることしかできなかった。

（煙を噴き始めた！？）

竜の攻撃を受け、その物体は明らかにダメージを受けたようだつた。それまで安定していた飛行が、フラフラとしたものになり、やがて……

「城に……落ちた……？」

フィルボルグ継承帝国南伐混成軍のセイロード攻略作戦は、概ね

計画通りに進んでいた。

陣頭指揮の最高司令官である第四階位將軍の表情にも余裕を感じさせるものがある。

現在、陣を張っているのはセイロードの山側の街道近くだった。

敵軍の脱出経路を遮断し、王を含めたマリースア貴族を一人も逃がさないためのものである。

マリースア軍も、おそらく昨日の宣戦布告のたった一日で侵攻を受けるとは予測していなかっただろう。それも、都市を包囲される形で後背を突かれるなど思いもよらなかったはずだ。これならば増援も加えれば、最低限の被害で日没までには都市全域を占領できるだろう。

將軍リヒャルダ・フォン・アードラーは火の手が次々と上がる街を小高い丘から見下ろしながら、報告に上がってくる軽微な敵の抵抗を聞き、そう樂觀した。

リヒャルダは帝国西方領貴族出身の姫將軍きしよつぐんであつた。

若干二五歳。実力主義の前線部隊とはいえ、若い。

白磁のように白い肌と、肩までの銀髪が太陽に輝くその姿は、漆黒の甲冑を着込んでいなければまるで聖女と見紛うばかりの美しさを持っていることだろう。

「報告っ！」

重い影が現れたかと思うと、彼女の目の前に巨大な？竜？が着陸した。

体表が北方竜独特の雪に溶け込むような色合いをしていることから、氷結竜だろう。

都市の後背を突くという奇策を可能にしたのも、この竜騎士団の動員を本国から許可されたからに他ならない。同時に、竜騎士団が共に戦うことで將兵の士気も高まる。

この氷結竜を主力とする氷雪竜騎士団と、火炎黒竜を主力とした

黒竜騎士団の二個竜騎士団が今回の戦闘には参加していた。マリー・スアのような弱小国家相手には過剰とも言える戦力である。

「何事か？」

リヒャルダは自分の父親ほど年上であろう竜騎士に向かって鋭い声を放った。

全竜騎士は都市内の敵陣の破壊をと命じている。持ち場を離れた事への叱責でもあった。

「急ぎお知らせすることがあります」

「何だ」

「都市上空で見たこともない奇妙な空飛ぶ物体を撃破いたしました」

部下の顔には動揺が走っていた。

百戦錬磨で知られる竜騎士が動揺することは滅多にない。それだけでもかなりの事態といえた。

「奇妙な物体だと？」

リヒャルダが呆氣にとられたような顔をする。

「はっ！ 自分も信じられませぬが、確かに見たのです。奇怪な羽音を響かせ、中には人らしき姿もありました。友軍であるはずもないので我が竜と共に襲いかかり、氷結弾にて打ち落としましています」

リヒャルダはしばし思考した。

この竜騎士は周囲からの信頼も厚いベテランである。実直で、命令を曲げてまで嘘を言いくるはずはなかった。

心情的には半信半疑だが、リヒヤルダは部下を信じることにした。

「分かった。で、息の根は止められたと思うか？　我が軍の進軍に影響は？」

「はい！　正面から我が竜の氷結弾を撃ち込みましたので。それに、あの高さから落ちて助かるとは思えませぬ」

氷結竜を見やると、確かに竜の口からは氷の塊を高速で撃ち出した後の冷気が漏れている。

「そうか。報告御苦労。行ってよい」
「はっ！」

再び竜が羽ばたき、冷たい風を残して飛び立っていく。

リヒヤルダは順調な戦況の中に現出した小さな異変に、不吉な予感を抱いた。

しかし、帝国軍人として不安を表に出すことなど許されることはない。

現状として順調ならば、占領後にも考えればよいことだ、と思いき直すことにする。

「お困りですか……？」

しゃがれた声が彼女の耳に障った。

うんざりしながら振り返ると、本国から派遣されてきた魔導師が不気味な笑みを浮かべて立っていた。

……確か名前はゲンフルとか言ったか。

竜騎士団の増援の見返り、といった形でこの男は督戦とくせんを命じられていた。

年齢も出身も、はつきりとした階級も持たない肩書きだけの男は、

それだけで軍の中で浮いていた。

督戦などわざわざ魔導師にやらせる理由などないのだ。何か別の任務があつてここへ来ているに違いなかった。

「いいや、督戦官殿のお手を煩わせるほどのものではない。まだ未確認の情報であり、作戦も当初の計画通り、滞りない」

「それは重畳にございます」

急ごしらえの天幕の中へ帰って行く黒い後ろ姿に、リヒャルダは小さく舌打ちする。

その忌々しさに、先刻の報告に感じた微かな不安も消えてしまう。彼女は再び炯々とした目を戦場へ向けた。

「う……」

幸い、気を失わずに済んだようだ。

しかし、身体中に痛みが走っている。まずは骨が折れていないか確認する必要があつた。

なんとか大丈夫だ。

市之瀬は身体を起こした。

頭に鈍痛が残っている。手で軽く触れると、墜落の衝撃で擦った傷から血が流れていた。

……墜落、そう、ヘリが墜落したんだ！ でも、いったいどうして？

機内は文字通りひっくり返ったような有様で、荷物や機器がバラバラになって足下を埋め尽くしている。

「久世三尉っ!？」

朦朧とする意識の中で、真っ先に上官の名前を口にする。

慌てて機内を探すと、彼は機材の下敷きになっていた。

無我夢中でそれを退け、生死を確認する。

……良かった。息をしてるし、目立った傷もない。

気を失ってるだけか、と運に感謝したのは一瞬のことだった。

コックピットから呻き声が聞こえたのだ。

「大丈夫ですか!？」

コックピットに駆け寄ると、市之瀬は絶句した。

二人のパイロットの内、一人はおそらくトラブル発生直後に何かの直撃を受けて即死していた。副パイロットらしき若いパイロットは、最後まで機体と格闘したようで、操縦桿を握ったまま瀕死の重傷を負っている。

あまりの惨状に胃の中の物が逆流しそうだったが、すんでのところで抑える。そして、とにかく生存者を助けようと思った。

動けない重傷者は二人。副パイロットと映像伝送装置の操作員だった。二人とも、骨折や内臓への損傷の恐れがあるのは、衛生隊員でない市之瀬にも一目瞭然だった。

機内に備え付けられていた担架と、座席シートを利用した応急担架で二人を外へと引きずるように運び出した。

外から見るヘリの損傷状態は、まさに残骸といった感じだった。

回転翼はあらぬ方向へ折れ曲がり、尾翼はひしゃげてだらしなく地面に垂れ下がっている。

「しっかりしてください！　すぐに救出がきますから！」

市之瀬は慣れない手つきで二人に応急処置を施す。しかし、ヘリの救急箱程度では気休めにしかない。一刻も早く病院設備を備

えた輸送艦に搬送しなくてはならない。

救助が来るならと、ヘリの中で煙幕手榴弾や信号弾発射機などを探し出す。だが、すぐに救助ヘリが飛び立ったとしてもここまで片道で一時間はかかるだろう。往復で二時間だ。それまで彼らが保つかどうか怪しい。

うめく負傷者に包帯を必死に巻きながら、市之瀬は泣きそうな気持ちになった。目の前で人が死にそうになっているのに、自分は何もできないでいる。

「くっそお！」

あっという間になくなった消毒液の空瓶を蹴飛ばし、市之瀬は機内の艦隊との交信が可能な長距離通信機を調べる。

雑音すら聞こえない。墜落の衝撃で壊れていた。

彼は精根尽き果てた表情でよろよろと機外へ出た。

さっきまで夢中だったので気がつかなかったが、今自分がいる場所は、上空から見たあの巨大な城のどこからしかった。周囲にはハイビスカスに似た美しい花などが植えられている。何かの女神だろうか、女性を象った石像から水が流れている噴水もある。

中庭か何かかな？

市之瀬はなんとなしそう感じる。

そして

「あ」

と間拔けな声を漏らしてしまう。

周囲の状況を確認しようと、反対方向を振り返ると、そこには大勢の人間の姿があったからだ。

そこにいたのは数百人、いや数千人の雑多な種類の人々だった。薄汚れた服を着た初老の男性、子供を抱えた若い母親、急ごしらえ

の担架に乗せられた負傷者……皆、あのラロナとかいう少女と同じように、時代錯誤な民族衣装のような服装をしている。いや、時代錯誤ではなく、ここではそれが当たり前なだけなのだろう。

彼らに共通するのは、少なくともこの場所に望んでいるのではないのであろうことだった。怯えと不安に彩られた表情を誰もが顔に貼り付けている。事情が全く分からない市之瀬にも、彼らがここへ避難か何かをしてきたのだと理解できる。追い詰められた者達が纏う一種異様な雰囲気がピリピリと肌に感じられた。

そして、そんな彼らは今、ある一点を凝視している。

他でもない、市之瀬を見ているのだ。

付け加えるなら、その視線に宿った感情は、お世辞にも好意的とは言えないものだった。

「信じられるか？　そ、空から降ってきたぞ？」

「な、何なんだあいつ……気味の悪い模様の服を着ているぞ」

「あれは乗り物なのか……？」

「て、帝国軍なのかしら？」

様々な負の感情が群衆の中に渦巻きながら、ざわざわと話し合っている。鉄で出来た乗り物が突然空から落下してきたかと思うと、その中から奇妙な緑色の服を着た少年が現れた。それは、市之瀬のいた世界の価値観でいえば、墜落してきたUFOから宇宙人が現れたくらいに衝撃的な光景に違いなかった。ただ、この世界の人々は、そういった時にどうすればいいか分かっていないだけなのだ。

市之瀬はその時、例えようのない孤独感に襲われた。

まるで、子供の頃に知らない旅行先で迷子になった時のような、頼るべきものが全くない感覚だった。

詳しくは分からない。だが、一つだけ理解できた。ここは自分の知る？世界？ではないのだと。そして、目の前にいる人々も、自分のことを、それこそこの国の人間であるのかさえ知らないのだ。

今朝、艦内で噂されていたのは嘘ではなかった。今、自分は、？
平行世界？へと迷い込んでいるのだった。

（マジかよ……！？）

全くお互いの事を知らない。それがここまで心細く、そして不安なことだとは思わなかった。

だが、今は一刻を争う。ヘリには重傷者がいるのだから。
気がおかしくなりそうだったが、彼はそれだけを精神の支えにして踏み止まる。

「あ、あの」

市之瀬は大勢の見ず知らずの人間に対してどうすれば良いか、しばし考えあぐねていたが、意を決して声を発した。
市之瀬の声に、群衆が「ひっ」と一歩後退った。

「じ、自分は怪しい者じゃありません！ け、怪我してる仲間がいるんです！ こ、この中にお医者さんか何かいませんか！？」

彼は群衆を刺激しないように手には何も持たずに彼らに近づいた。
警戒の色が濃い人々が、小さな悲鳴を上げて彼から距離を取ろうとする。

「あ、ちょ、ちょっと！？ 怖がらないでくださいよ！？」

彼も仲間の命がかかっているので必死だった。しかし、蜘蛛の子を散らすように彼らは逃げて行ってしまう。そんな中、誰かが叫んだ。

「兵隊だ！ 兵隊を呼べ！」

「きつとあいつも帝国兵に違いないわ！」

市之瀬はとりあえず状況が悪化していることに焦る。

「ち、違うんですよ！？ ちよ、ちよつと話を……」

近くにいた女性を呼び止めようとするが、次の瞬間、彼は自分の喉に何かが突きつけられたのに息を飲んだ。

「動くな」

有無を言わさぬ冷徹な女の声が彼をその場に釘付けにした。

「ちよ、な、何すかこれ……？」

「動けば命はない」

目の前には、背の高い美女が立っていた。

サラサラの草色の髪をした、黒いコートのようなものを着た女だ。彼女は市之瀬の喉もとに槍を突きつけ、微動だにしない。その冷静そうな表情と合わさって、威厳のようなものが漂っていた。そうした雰囲気纏う人物は、そうはいない。市之瀬はすっかり気圧されてしまっていた。

その女の背後には、部下だろうか、軽装の鎧を身につけた兵士達が控えている。

それが、ラロナの身につけていた物と同じであると気付くほどの余裕は、彼にはなかった。

そして女……カルダは目の前にいる少年に対して、小さな警戒と大きな苛立ちを感じていた。

今は戦時だ。戦闘以外に手を割かれなかった。そう思ったの

も、この緑色や茶色の混じり合ったような奇妙な服を着た少年が、どう考えても軍人の類には思えなかったからだ。戦時であるというのに身を守るための武器も持たず、一般市民に対してヘラヘラとしていた。兵士にあるべき戦いを至上とする雰囲気は一切感じられないのだ。腑抜けていると言っても過言ではない。

「一度しか聞かない。いいな？」

カルダは手短に尋問することにした。

部下を更に半数は失ってこの城まで到達してきた。冷静な彼女でなければ、その苛立ちは間違いなく顔に出ていることだろう。

「は、はい……」

情けない声で少年が答える。

ふん、と鼻を鳴らして彼女はそれを嘲った。

「貴様は帝国兵か？」

「な、なんすか、それ？」

「……一度しか聞かんと言った」

彼女は槍の切っ先を少年の首に当たる程に突きつけた。

「ち、違う！ 違います！ マジで！」

必死になって少年は否定する。

だが、カルダにはそれについては聞かずとも分かっていた。周囲に理解させるために自白させたただけだ。

おそらく、この少年と、あそこに残骸を晒している見たこともない機械は、ラロナ練戦士から報告があつた国籍不明の船からやって

きたものだろう。帝国兵とは思えないような腰抜け共だったという報告も正確なものだった。そして、事実、カルダも彼が帝国兵とは程遠い存在であることを一瞬で見抜いた。こんな腰抜けが相手なら、マリースアは今ここまで苦戦などしていない。ならば、とカルダは質問を考える。

「貴様は、一体どこからやってきた？ お前達は敵か、味方か？」

少年の表情が、何かを考えているかのような複雑なものになる。

「敵じゃないのは、確かだと思うんですけど……」

「ならば、どこからやってきた？」

少年は押し黙る。

急ぐカルダは恫喝した。

「貴様は我が国の領土領海に不法侵入している。この場で処刑されても文句は言えんのだぞ？」

この腑抜けた少年の存在など取るに足りないものだが、あの鉄の塊に乗って空を飛んで来たというのは驚異と言う他ない。その正体と目的を知りたいと思うのは軍人として自然なことである。それに、この戦時下にとこの馬の骨とも知れぬ外国人を野放しにはできない。

「……多分、説明しても分かんないと思いますよ」

どこかひねくれた表情で彼は言った。貴族相手にそんな態度を取ること自体、不敬罪で処断理由になるが、カルダはそれは口にしないでおく。

「構わん。言ってみろ」

少年は、言葉を選んでいる様子だった。
そして、彼は決心したような表情を浮かべ、断言した。

「俺達は……別の世界からやってきたんだ」

第4章 異界の戦士

「私のミスだ……」

イージス護衛艦？いぶき？の艦橋で、司令官・蕪木は隣の加藤にだけ聞こえる声で言った。平静を装っているものの、その顔には深い苦悩が感じられた。

「……仕方ありません。誰にも予測できないことでした」

「日本及び近隣各国との通信は？」

加藤は諦観とともとれる表情で首を横に振った。

「そうか……」

それが意味することは、現在の緊急事態の全責任が彼の肩にのし掛かっていることを意味した。その上、事態は未だ進行中であり、こうしている今でさえ決断が迫られている。

国籍不明の都市で火の手が上がっている映像を最後に交信を途絶したヘリ、そして……

「あの巨大な正体不明の生物……」

ヘリに搭載されたカメラからは、最後の映像データが送られて来ていた。そこに写っていたのは、巨大な爬虫類を思わせる巨大で、そして禍々しい生物の姿だった。口を開いたかと思うと、何とそこから氷の弾丸を撃ち出し、おそらく、ヘリを撃墜した。

その姿は加藤にも見覚えがあった。

SFやオカルトが趣味という彼が？変人？と呼ばれることに拍車をかけている趣味の中では、あまりにも有名な存在だ。

？竜？

それ以外の形容を彼は思いつかなかった。

映像を見た隊員の中には、あれが恐竜であると主張する者もいたが、そうではない。恐竜は騎士を乗せて空を飛ばないし、そして氷を打ち出したりもしない。

（……やはり、ここは？平行世界？我々の世界からは、誰一人足を踏み入れた者はいない、未知の世界）

加藤は、その思いを強くする。

（どうすれば良い……？あの街、見た限りでは戦場になっていた。我々は、この世界に介入すべきなのか？）

加藤は必死になって思考を巡らせた。

本来、交わるべきではない世界の存在が、異質な世界の情勢に関わる。それがどんな問題を引き起こすのか見当もつかなかった。

「あの人を乗せた鳥といい、この世界は一体どうなっている……？」

思案する加藤の隣で、蕪木は海の方こうを睨んだ。まるで、そこから新たな脅威がやってくるのではないかと恐れているかのように。

「司令、意見具申してよろしいでしょうか？」

主席参謀・加藤が、普段の適当そうな表情を一切浮かべず、主席参謀としての表情で尋ねた。

「何だ？」

「行方不明となったヘリ搭乗員の救出作戦を立てるべきです」

加藤が導き出した結論は、味方を救う事にまず全力を挙げるということだった。万が一、ヘリに生存者がいたなら、あの街の戦乱の中ではあまりにも危険だ。そして、もしも捕虜になったり殺害されたりした場合、ヘリに載せられた装備や武器などがこの世界に流出してしまう可能性も否定できない。この世界で波風を立てないようにすべきだとしても、介入すべきにせよ、彼らを放っておくことだけは現状では得策ではなかった。

加藤の言葉に、蕪木は険しい表情を浮かべた。

その先の言葉を制するように言う。

「救助ヘリは出せない。また撃墜される危険がある」

「戦闘ヘリを護衛に付け、武器の使用許可を出せば……」

「いかん、それでは先制攻撃になる」

蕪木は自衛隊という組織の持つ決定的な問題に直面せざるをえなかった。

自衛隊が、いや、日本という国が守り続けてきた？専守防衛？という鉄則である。

海外派遣においては、国際法上も日本の法律上も、自分の仲間あるいは守護下にある者を守るための武器使用は認められている。だが、今のような敵味方の区別がつかない状況での武器使用は？現場の判断により適切に措置をとる？と区分される。言い換えれば？現場の責任？なのだ。

(……？平行世界？での戦闘規則など、あるわけがない)
ROE

蕪木は瞳を閉じて苦悩する。

日本との通信さえ途絶した今、この事態の全責任は彼にある。そして、どれか一つをとってみても、それは彼の肩には背負えぬほどに重い。

（？決して戦つてはいけない軍隊？……戦うことを前提としながら、その矛盾を内に秘め国土防衛の任を担う組織が、我々なのだ……）

「ですがこのままでは生存者を救えません！ 事態は一刻を争います！」

珍しく加藤が語気を荒げた。

この若き主席幕僚は、変人でキレ者で、そして部下を思いやる心に篤い。

蕪木にも、その感情は痛いほど理解できた。指揮官として、そして、海上自衛隊でも少なくなりつつある？海の子？としてだ。

「……腹を決めねばならんわけか」

定年の近い自分の首一つで足りるならいいが、と彼は内心で自嘲した。

今も昔も、時代に恵まれた者は英雄と呼ばれ、時代に翻弄された者は無能と呼ばれる。だが、その差は実は紙一重のものなのかもしれない。

……自分は後者なのだろうな。

蕪木は拳を握りしめ、ヘリの搭乗員名簿を確認した。
皆、若い。

『市之瀬竜治 二等陸士 一八歳』

この若者、いや、少年に至っては自分の娘と同一年だ。

（救わねばならん。絶対に！）

蕪木は冷静さの中に一種の激情を潜ませ、決断した。するしか、なかった。

「はッ！」

カルダは怒りを通り越し、軽い笑い声を上げていた。

「別の世界から来ただと？」

舐めているのか、この小僧？

失言はまだ許せる。だが舐められるのは我慢がならない。それを捨て置いては貴族の誇りに関わる。

彼女はギツと目尻をつり上げた。

「……嘘はためにならんぞ。マリースア武人をあまり軽く見ないことだ」

「嘘じゃない！俺達は別の世界からこっちの世界に迷い込んで来たんだよ！」

「ならば何の目的でこの世界へ来た！？この戦時下で、どうしてこの城へ！？」

カルダは遂に激昂していた。

市之瀬もつい熱くなってしまう。

「こっちが聞きたいんだよそんなこと！戦争やってるって知ってれば偵察になんて……」

すっかり彼が口を滑らせた『偵察』という言葉に、彼女は即座に反応していた。

片手で構えていた槍を素早く回転させると、柄の部分で市之瀬の腹を強打する。

「あがつ!？」

突然の鈍痛に、言葉にならない呻きを漏らして彼はその場に崩れ落ちた。

「な、にを……?」

「貴様、やはり我が国に仇なす者だな?」

冷やかな目で彼女は腹を押さえて蹲る市之瀬を見下ろす。

「どこの国に雇われて偵察に来た? 帝国でないならどこだ? 隣国のエレエナか?」

勝手に何かを完結させてしまっている様子の彼女に、市之瀬は愕然とする。

（何言っているんだこの姉ちゃん!？ 頭おかしいんじゃないの!？）

エレエナはマリースアの隣国の一つだが、他国と異なり帝国の侵攻に対する軍事同盟に関して中立の立場を表明している国だった。彼女の中では、市之瀬は帝国以外の自国に対して好意的でない国の間諜ということになっていた。武人でない間諜であれば、この情けない性格も納得できるというものだ。カルダは、武人であるが故の頑迷さが強かった。

「吐け。今は悠長に尋問している時ではない。答えんのなら死んでもらう」

カルダは今度は両手で槍を構えた。

市之瀬は、目の前に立つ女が、恐ろしく自分とは思考回路が異なり、しかも暴力を厭わない性格をしていることに戦慄した。今まで生きてきて、ここまで躊躇なく暴力を初対面の人間に振るう者がいただろうか。武人だとか、無茶苦茶な自称を使うのも悪い冗談に聞こえる。

だが、それが冗談ではないのは、この状況から考えれば自明のことだった。

「嘘だろ……」

ガタガタと恐怖の余り齒が鳴り始める。

（ヤバイ。この人目がマジだ）

彼は焦った。この女ならやりかねない。そんな不気味な説得力が感じられた。

死ぬ。殺される。

どうする？ どうすればいい！？

市之瀬は自分が処刑されかかっていることに、必死になって思考を巡らせた。

ここでこのまま殺されてしまうのか？

美奈を置いて？

彼の脳裏に、家族の顔が過ぎる。

……そんなの、ぜってえダメだ！

彼は生き残るための方法を考えた。

（そうだ！？ レッグホルスターの拳銃……）

そこで彼はある事を思い出した。今、手に武器こそ持っていないが自分は完全な丸腰というわけではない。右脚にくくりつけてあるホルスターには、実弾を装填した9？拳銃が収まっている。言うまでもなく、これは護身用の武器である。今使わなければ、いつ使うというのか？

それは恐ろしい選択に思えた。しかし、このまま死ぬわけにはいかない。

妹を……美奈を残して、死んでたまるか！

そうだ、自分は生きて帰らなくてはならない。家族のため……美奈のために。

たった一人の兄妹。美奈。

数年前に父を亡くした今、母親と美奈を守ってやれるのは自分しかない。美奈には、高校にちゃんと通わせてやりたい。自衛隊に入隊したのも、そして今回、海外派遣に志願したのも、妹の将来の学費を稼いでやりたい一心からだ。美奈は賢い。将来の道を少しでも明るくしてやりたかったのだ。

……生きて帰るためなら、美奈のためなら、俺はっ！

彼がそう決心を固めた瞬間だった。

「戦士団長、待ってください！」

唐突に、少女の声が降ってきた。

そして、目の前に誰かが飛び降りてくる。

一瞬置いて頭上をあのだ巨大な鳥が飛んでいった。あれから飛び降りてきたらしい。

「ラロナ練戦士……！？」

目の前に立ち塞がった人物が、自身の部下であつたのに、彼女は驚きを隠せなかった。

ラロナは、よほど急いでいたのか、荒い息をつきながら、上官を前にしていた。

「……無事なのは良かった。御苦労。そこを退け、邪魔だ」

カルダは部下の一人の生還に少しだけ表情を和らげたが、すぐに険しい顔つきに変わる。

そして、市之瀬はその少女の姿をただ見つめるしかない。自分に背を向ける小柄な少女。紅い、燃えるようなショートカット。

「ら、ラロナ……？」

市之瀬が信じられない表情で彼女を凝視した。

「彼は、敵じゃありません！ 帝国軍の竜騎士に攻撃されるのを空で目撃したんです！」

ラロナはまるで市之瀬を庇うかのように上官に意見していた。

彼女は振り返らずに、市之瀬に確認した。

「そつだよな？ イチノセ」

「え……」

名前を呼ばれた。

自分が彼女を覚えていたように、彼女もまた自分の名を忘れてはいなかった。

安堵感。

この完全な孤独の中で、彼女は自分のことを名前だけでも知ってくれていた。

それが、こんなにも嬉しいとは思わなかった。

「エレエナないしは帝国同盟国の密偵の疑いがある。この男、我が国を偵察に来たと言った」

市之瀬が叫んだ。

「しょうがねえじゃねえか！ 違う世界から来て何も知らなかったんだ！」

「違う、世界から……！？」

ラロナが驚きの表情を浮かべて振り返る。

そこには、見たこともない服を着た、あの少年がいる。
違う世界。

人魚の海から現れた、あの巨大な船団を直接その目で見たラロナには、その言葉は何よりも説得力のある説明に聞こえた。

あの船は、そしてこの少年は、全てがこの世界から断絶した世界でなくては存在しない。そんな確信のようなものが彼女にはあった。

「そんな子供じみた言い訳が通るか！」

カルダが鋭く一喝する。

市之瀬はその迫力に何も言い返せない。最早話が通じないのではないかと思えた。

しかし

「……彼が言っていること、本当だと思います」

少女の声が、市之瀬の耳に入る。

「何？」

ラロナが呟いた言葉に、カルダの目がすつと細まった。
貴族である自分の判断が誤っている、と？

片眼鏡の奥の瞳がそう語っていた。

「私は、見ました。人魚の海からやってきたあれは幻なんかじゃない……その証明に、彼と、あの空飛ぶ機械があります」

ラロナはその目に一切怯まず、自身の考えを答える。

「その男と面識があるのか？」

「はい。甲板で尋問したのが、彼です。ですが、彼も、その仲間も、私に危害を加えようとは最後までしませんでした。もし密偵なら、あそこで私を無事で帰すでしょうか？」

カルダの顔に戸惑いの色が滲み出た。

彼女は頑迷だが無能ではなかった。指揮官として、部下を適性に評価している。そして、ラロナ練戦士は、勇猛果敢で直情的な面はあるものの、概して模範的な兵士といって差し支えない人物だった。その彼女が、そこまで言うのを一蹴するのは難しい。

「……その報告、確かなんだな？」

「はい」

ラロナは真つ直ぐに上官を見据え、断言していた。
奇妙な静寂が一瞬、訪れる。

（ラロナ、俺のことかばってしてくれてるのか……？）

市之瀬は呆然とそのやりとりを眺めていた。ほんの少しの間、話したことがあるだけの少女が、どうやらかなりの無理をして自分のために努力してくれている。それだけは理解できた。

そして、ややあつてカルダが構えていた槍を静かに降ろし、地面に立てて仁王立ちになった。

「イチノセ、と言ったか？」

「え？ あ、はい」

突然の質問に、彼は思わず間抜けな答え方をしていた。てっきり、ラロナとまだ話し合うのかと思っていた。

「所属を、聞いていなかった。どこの国に属する者が、改めて問おう」

それなら、はつきりしている。

市之瀬は、このわけの分からない状況で、数少ない確かに自信を持って言えることを答えていた。

「日本国、陸上自衛隊所属、二等陸士・市之瀬竜治」

不思議だった。

組織に組み込まれた自分の名前を口にした時、何の変哲もない自分の名前が随分と存在感あるものに思えた。きつと、自分の名前だけを間抜けな自己紹介のように口にしても、こっちは締まらない。そして……

（ああ、家族のためだっと思って入隊したけど……）

彼はこの状況下で、不意にちよつとだけ目頭が熱くなった。

（俺も、なんだかんだで苦勞してきたよな）

さらりと自分の所属と階級を言えるような立場に自分はなっていた。ほんの半年前まで、何一つ責任もなく、同時に何一つできなかった高校生の自分が、嘘のようだった。教育隊でシゴキ倒された日々が思い出される。あの時は、何で自分はこんな辛い思いをしなればならないのだと内心ボヤいてばかりだった。

だが、それはこうして胸を張って誰かに自分の所属を口にできるようになるためだったと、今なら理解できた。

それがカルダにも伝わったのか、彼女は笑わなかった。

「そう、か」

短く、そう呟く。

そして、小首を傾げて尋ねた。

「ニホンの……そのリクジヨウジエータイというのは、軍隊か？」

「え、えーと……厳密には違うことになってるんすけど、まあ、軍隊なのかな？」

「ならば、お前は軍人か？」

「え？ そ、それは、その……」

市之瀬は返答に困った。

不審な態度を取ることが命取りだと分かっているはずなのに、つい首を傾げてしまう。

「それとはちょっと、違うような……」

自衛官自身、自衛隊を軍隊ではないと本気で思っているわけではない。しかし、では冗談ではなく、真顔で自分達が？軍人？であるかと誰かに問われれば、それはどこか違うと感じるものなのだ。軍人という単語を素直に受け入れられないのは、やはり自衛隊はどこかで軍隊とは違っていているからなのかもしれない。

歩兵を『普通科』、砲兵を『特科』等と軍隊を連想させる単語から変更し、陸軍二等兵を『二等陸士』、将校を『幹部』と呼ぶ組織創設から五十年以上の間にすっかり定着したその独特の文化は、例え内容が軍隊そのものであっても、誰かから「軍人」と大真面目に呼ばれるのには違和感があるのだ。

そんな世界でも例を見ない特殊で微妙な事情など知る由もないカルダに、彼の曖昧な返事はどう受け取られるだろうか。

市之瀬はヒヤヒヤとしながら相手の反応を待った。

「では、お前には……」

カルダは、質問というより、何かを見透かそうとしているかのよう言葉が続けた。

「守るべきものは、あるのか？」

「それは、ある！」

ほとんど即答だった。

それがなく自衛隊になど、いない。

市之瀬にとって、それこそが全てだ。

彼は高校生だった頃に自衛隊員になろうと思った理由を思い出す。市之瀬には高校生になる妹がいた。母子家庭で、母も病気がちだった彼は、自分のことに一切金のかからない自衛隊に入ることだ

計を助けようとした。海外派遣に志願したのもそのためだ。

自分と違って賢い妹は成績も良く、将来は大学で勉強したいと夢を持っていた。兄として、その夢を叶えてやりたかった。

美奈……兄ちゃん、絶対生きて帰るから……

市之瀬は自分が高校を卒業し、入隊するのと入れ替わりに入学した妹の顔を思い浮かべ、そう強く誓った。

そうだ、こんな所でくたばってたまるかよ！

キツと彼はカルダを見つめた。

カルダは彼の茶色い瞳の奥にあるものを見据える。

「……お前のその取り繕うことのない様子が、逆に真実やもしれんな」

ふう、とカルダは肩の力を抜いた。

「分かった、敵ではない。それで、我らの助けが必要か？」

彼女にしては珍しく、半ば冗談でそう言っていた。

誰かを助けていられる程、今の状況は甘くない。助けて欲しいのはこちらの方だ。

だが、貴族として、こうした虚勢は必要なものだった。

「へりに負傷者がいるんだ！ 助けてください！」

市之瀬は必死になって懇願していた。

カルダは頷くと、所在なさにしている兵士らに向かって呼びかけた。

「この中に治癒魔法を使える方は？」

「私が！」

「頼む」

兵士の中で武器を持っていない一人が立ち上がると、担架の元へ駆け寄った。

見ると、とてもではないが医者には見えない、さらさらの長く、深い海色の髪をした少女だ。

しかも、このカルダとかいう女は？魔法？　と言った。

どこをどうツツこめばいいんだと空を仰いでいると、ラロナが安心させるように話しかける。

「大丈夫だよ。彼女は光母教神官戦士だ。腕は確かだよ」

「あのなあ！　ふざけてる場合じゃ……」

その時、跪いた少女の手元がほのかに輝いた。

そつと目を閉じ、集中した表情で彼女は負傷者の傷口に手をかざしていく。

市之瀬は目の前で起こっていることをまたもや呆然と見つめることになる。

少女の手をかざした後の傷口は、明らかに治癒の痕跡が見えたからだ。

市之瀬は夢でも見ているような気持ちでそれを見届けるしかない。やがて、少女が額の汗を拭ってこちらを向いた。

「……一命は取り留めましたが、血を失い過ぎています。内臓までは自分一人では治せません」

「まずいな……」

カルダの表情が曇る。

市之瀬は目の前で起こった？奇蹟？に言葉を失っていたが、慌てて二人の会話に割って入った。頭がおかしくなりそうだったが、今

はとにかく人命がかかっている。考えるのは後回しだ。

「じゃ、じゃあ早く船に戻して医務官に診せないと！」

「あの巨大な鉄船に？　そこへ運べば助かるのか？」

「ああ！　で、でもここまで救助が来るまで往復分の時間が……」

「……よし、分かった。ラロナ練戦士」

「はい！」

テール、と叫んでラロナが口笛を吹いた。

あの巨大な鳥がこちらへのそのそとやってくる。

「彼女の鳥に乗せて行こう。鉄船の大体の位置は分かるか？」

カルダが彼にそう尋ねる。

一瞬何の意味が分からなかったが、この鳥に乗せてこちらから搬送しに行けば、ヘリで往復するよりはいくらか早く着くはずだと思に至る。

市之瀬もすぐに彼女の意図を理解し、大きく頷いた。渡りに船だ。

「ああ、そうしよう！　片道ならきつと間に合う！」

市之瀬の表情にようやく希望の光が見える。

早速、負傷者を鳥の背中に乗せる作業にかかることにする。

念のため、手短に今まであったことを紙に書いて乗せておく。少しでも早く残された自分たちに救出が来ることを願うてのことだ。

「……な、なあ」

報告の文章を書きながら、市之瀬がラロナに尋ねる。

ようやく混乱が一段落し、心に少しだけ余裕が出たための言葉だ

った。

「何だ？」

担架をベルトでしっかりと固定する作業の手を休めず、ラロナが応じる。

「さっきは、ありがとうな……かばってくれて」

ラロナは首を横に振った。

「気にするな、困った時はお互い様だ」

この非常事態にあつて、そんなことが言える彼女を市之瀬は素直に凄いと思った。

そして、いまいち状況が飲み込めていないので、彼女に確認してみる。

「ラロナたちがヘリを落としたんじゃないんだよね？」

「へ……り？」

「ああ、えーと、俺が乗ってきたあの空を飛ぶ機械だよ」

「鉄の塊が空を飛んでいたなんて信じられない気持ちだけど……とりあえず違う。そうか、今この街がどうなっているのか知らないんだっただけ？」

「……そうだよ。一体何が起きたってんだ？ 空からは煙みたいなのがあちこちで見えたけど」

「戦だよ」

「え？」

「手短に説明すると、今、アタシの国は敵国に攻め込まれてる。お前たちを攻撃したのは奴ら帝国軍だ」

「お、おいおい……」

市之瀬は思わずラロナに詰め寄った。

まだはつきりと今置かれた状況を理解できた訳ではないが、紛争に巻き込まれる形になっていくらしいことは分かった。

そしてやはり、ここは自分が今までいた世界とは違う別世界。

初めて見た人魚もきつと見間違いなどではない。巨大な鳥も、目の前に立っているラロナも、死んだパイロットも……全て、現実。ぐるぐると乗り物酔いになったような感覚が身体全体を覆った。

……冗談じゃねえよ！

「それやべえじゃねえか、早くここから逃げないと！」

薄ら寒い不安感に苛まれ、市之瀬は身震いした。

だが、そんな彼を彼女はきつと睨むように直視した。

「アタシは戦う。故郷を守るために」

市之瀬は息を飲んだ。

……また、あの目だ。

何も言えなくなるくらいに、真っ直ぐで純粋な瞳。

彼女は本気なのだ。

戦士、という冗談みたいな言葉が、ずしりと重く彼の心に響いた。

「な、なんだよ。そんな怒んなくていいじゃんか……」

思わず目を逸らしてしまう。

次の瞬間、テールと呼ばれた巨鳥が羽ばたく。

負傷者を乗せていることを気遣ってか、滑走の足取りは丁寧だ。

市之瀬が思っていたよりもずっと頭が良い。

グライダーのように風に乗ると、身体が滑らかに宙に浮き、市之瀬の視界から遠ざかっていった。ラロナが暫くの間、自分が乗っていない鳥の背中を寂しげに見送る。

「……ここも戦場になる。お前は どうする？」

鳥がいなくなったからか、若干トーンダウンした口調だった。

「一体どこにいりゃ、安全なんだ？」

市之瀬が怪訝な表情で聞くが、彼女は空を見上げて微動だにしない。

「お、おい？」

「……いけない、見つかった！」

「へ？ 見つかったって誰に……」

「来いっ！」

「わっ！？ 何すんだよ！」

近くの植木の合間に引きずり倒される。

「……いつてえ」

「静かにっ！」

市之瀬は耳元で緊迫した口調のラロナの声を聞き、思わず彼女の顔を凝視した。

彼女は頬に緊張の余りか幾筋もの汗を伝わせていた。

「え……？」

彼はラロナの視線の先を見やった。

その時だった。

悲鳴が彼の耳に飛び込んできた。それも一人や二人のものではない。

それは大勢の断末魔の叫びだった。

「くっ！？ もはやこんな所まで飛んで来たか！ 退け！ 退くんだ！ 市民を奥へ逃がせ！」

カルダが必死になって指揮を執っている。

その表情には、気丈な彼女でさえも恐怖の色が隠せていなかった。そして、そのパニックの中から一つだけ場違いな喜びの声も聞こえてくる。

「くっはははあ！ 弱い！ 弱いなあー！」

市之瀬は植木の中から？それ？を見た。

「ド……ラゴン？」

自分の口から自然とこぼれ出た単語が、自分で信じられなかった。そこにいたのは黒色の生物。それも、心理的な威圧感を除いても巨大であることが分かる生命体だった。

市之瀬はその容姿に漠然とだが見覚えがあった。

そう、よくロールプレイングゲームなどに登場するボスキャラだ。

「嘘だ……こんなバカなことがあるかよ？」

当然だった。竜なんて架空の生き物だ。実在するはずがない。しかし、市之瀬の網膜にははっきりとその存在が何をしているか

が焼き付いた。

「焼き払えい！」

竜の背に乗る漆黒の甲冑を着込んだ男が命令する。

何を考えているのか分からない不気味な眼孔で逃げ惑う人々を見下ろし、黒い竜は大きく口を開けた。

紅蓮の炎と、断末魔。

市之瀬はさつきまで側にいた一般市民達が絶叫しながら消し炭になるのを目撃した。

「うつつ……!？」

咄嗟に目を背ける。

（死んだ！？ 人が、人が！？ こ、こんな簡単に！？ そんなん
ありかよ！？）

手が震えている。いや、手だけではない、身体全体が震えていた。
恐怖以外にも、今目の前で起きたことが彼の理解の範疇を超えていたのだ。

ゲームにはない生々しさと、ゲームではあり得ない唐突さで人が
焼け死んだ。そのことを現実として受け入れられないのだ。

「きゃああー！」

息を潜め、身体を震わせていた市之瀬の意識を一気に引き戻したのは、少女の悲鳴だった。

恐る恐る再び視線を戻すと、そこにはさつき負傷した二人に？ 治癒魔法？とかいうのをかけてくれた蒼い髪をした女の子だ。

彼女は味方が全滅し、最後の一人となって追い詰められていた。

「んうー？ 一人焼き漏らしたか？」

その場の全てを支配している優越感からだろうか、漆黒の甲冑を着込んだ男はくつくつと笑い、手綱を少女の方へ向かわせた。

「あああ……か、神よ……」

少女はぐつと首から提げたペンダントのようなものを握りしめている。

（や、止めてくれよ……）

市之瀬が心の中で祈る。

まるで覚めることのない悪夢の中で、必死になって懇願する気分だった。

「ふん、手間のかかる。小娘一匹にファイアブレスはもったいないな……」

男の声が微かに市之瀬にも聞こえた。

「喜べ、楽に死ねるぞ」

そして、男は傍らから背丈以上はある槍を手にとった。それから先、男が何をするのかくらい、市之瀬にも分かった。あの少女が血溜まりに沈む光景が一瞬脳裏をかすめる。

「やめろおおおーっ！」

裏返りそうな声で、市之瀬は絶叫し、植木の中から飛び出していた。

「バ、バカっ！？ 何してるんだ！」

背後でラロナが驚きの声を上げるのが聞こえたが、市之瀬は止まらなかった。

正義感や、使命感といった感覚など、彼は微塵も意識していなかった。ただ一つ、目の前で起こる？ 理不尽？ に我慢ができないという思いに突き動かされていた。

自分の理解を超える行いを、これ以上許容できない。そんな感覚が心を占めていた。

「む？」

男がこちらに気づく。

市之瀬は少女に向かって全力疾走しながら、腰の雑嚢をまさぐった。

いくら我を忘れているからといって、あの怪物を倒せる武器を自分が持っていないのは分かり切っている。しかし、彼は狙撃兵という孤独で脆弱な特性故か、圧倒的な敵を翻弄する術はよく知っていた。

「状況、煙幕っ！」

間抜けにも訓練手順を復唱し、彼はありったけの煙幕手榴弾の安全ピンを引き抜くと、立て続けに投げつけていた。

軽い破裂音と共に、瞬間にカラフルな赤や緑といった煙が広範囲に充満する。

煙幕は味方へりにこちらの居場所を伝えたりする使い道もある。救助へりが来ることも考えて、かき集めていたのが幸いした。

「ぬおおっ！？ な、何だこれは！」

想像していたよりも怪物とその御者の男は狼狽を見せた。

その巨大な翼を羽ばたかせ、煙を晴らすうとしているが、手榴弾の薬剤が反応を続ける効果時間中は次々と煙が噴出するので、返って煙にまかれる結果となっている。

これならおそらくこちらの姿は見えていないだろう。

市之瀬はすかさず少女に駆け寄ると、そのか細い手を取った。

「さあ、こっちだ！」

「え？ は、はい」

少女はほとんど為すがままに彼に手を引かれていく。

「イチノセ！」

「ああラロナ、この子を頼む！」

市之瀬は後を追ってきたラロナに彼女を託した。そして、彼はへりの残骸へと駆ける。

「ちょっとイチノセ、今は逃げなきゃ……」

「無理だ！ こんな開けた場所じゃ追いつかれる！ だから……」

「奴をぶっ倒す！」

市之瀬の言葉に、ラロナは絶句した。

「倒す……？ 竜相手に？ たった一人で？」

彼女は目の前の少年が口走ったことを理解するのに時間がかかったのか、ややあつて我に返って叫ぶ。

「そんな無茶な！ ドラゴンクラスにこの人数で勝てるわけが……」

ラロナの声を背後に浴びせられながらも、市之瀬は機内へ駆け込み、？ 非常用？ と久世に厳命されたケースをひっくり返った荷物の中から取りだした。

ケースには『火気厳禁 実弾』とペイントされている。ずしりと重い。

パチパチとケースを開ける。

そこには黒光りを放つ物体が収まっていた。

「イチノセっ！」

ラロナの悲鳴じみた声が聞こえた。

「おのれ小娘どもが！ 黒竜騎士団をコケにしてくれおって！」

煙幕の効果時間が切れ、怪物はその不気味な眼孔を今度はこちらへはつきりと向けていた。

「……焼き尽くしてくれわ」

甲冑の男は聞くだけで身がすくむような声で言った。

「あ……あ……」

ラロナがドラゴンに睨み付けられ、まるで飢えた猛獣を前にした小動物のようになる。

がくがくと足が震え、地面にへたり込みそうになっている。そこへ、彼の声が響いた。

「や、やれるもんならやつてみるよ!」

ヘリの残骸の中から、彼は?それ?を担いで現れた。

甲冑の男が、怪訝そうに声を発した。

「……小僧、なんだそれは?」

「今退けば助かるぞ!」

「なっ!?!」

甲冑の男だけでない、ラロナや少女までもが耳を疑ったようだ。しかし市之瀬は本気だった。

「警告はしたからな! これ以上やるんなら正当防衛成立だぞ! 分かってんのか!?!」

今度は減給なんかじゃ済まないだろうな畜生!

市之瀬はヤケになってそう思うが、もう遅い。どこで何を間違えてこうなっているのかさえ分からなかった。

「くははっ!」

男が笑う。

その場は驚くほどの静寂に支配されているからか、その声は特に通って聞こえた。

市之瀬にはたまらなく不気味だった。

人の死体があちこちに散在している中で、笑うことができるというこの男の神経が。

そして、次の瞬間、突然冷静な声で言い放った。

「小僧、貴様は万死に値する」

手綱を引き、声を張り上げる。

「焼き尽くせっ！」

竜が口を開け、何かをチャージするような行動に出た。それを前にして、市之瀬は反射的に絶叫していた。

「バカ野郎おおおおっ！」

市之瀬は発射レバーを引き絞っていた。

刹那、目の前は噴射煙で遮られ、それと同時に起こった閃光と爆風に、市之瀬はそのまま地面にひっくり返った。

落雷の直撃のように鳴り響く轟音。

激しい衝撃波を受け、一瞬気を失いそうになる。

「くっ……！」

爆音によるツンとした耳鳴りの中、パラパラと巻き上げられた土が降ってくる。

市之瀬は担いでいたものを投げ捨て、煤だらけの顔で何とか立ち上がった。

「うわ……」

目の前にあったものは、さっきまで竜だった存在。しかし、今はどちらかというと、肉塊に近い代物だった。

一撃で戦車を撃破可能な84？携帯無反動砲むはんどうほうの対戦車砲弾を至近距離で受けたのだ、無理もないことだった。

市之瀬はちらりと足下に転がる携帯無反動砲を見やった。見た目はいわゆる？バズーカ砲？によく似ている。

こんなものをへりに積み込んでいたのは、いわゆる踏み込んだ抑止力、つまり威力を見せつけるなどの？威嚇？のためである。本来なら目標へ向かって撃ち込むことはしない。

だが、この？お飾り？のお陰でなんとか助かった。

（そついえば俺、これの実弾撃ったことなかったんだっけか……）

ふう、と深呼吸する。

肉の焼ける臭いにむせそうになった。

「うぶ……」

それに、怪物とはいえこんな死に方をした生き物を直視はしたくない。

何より、市之瀬には重大な事実直面せねばならなかった。

「人を……殺したけど……」

市之瀬は安堵感と罪悪感を同時に抱き、整理のつけようのない感情をもてあました。

「仕方ねえじゃんか！ こっちだって死ぬとこだったんだ！」

へりの残骸を思い切り蹴飛ばす。

「ああ畜生、痛え！」

泣きそうだった。

痛いからではない。自衛隊に入って、こんなことになるなど予想できなかったことが悔しかった。まるで詐欺に遭った気分だ。

自衛隊が武装組織であることくらいはバカでも分かる。しかし、自衛官自身、その手にする武器で誰かを殺傷するということを明確に自覚はしていない。

日々の業務としての戦闘訓練はあっても、それが誰かの生身を切り裂き、血を流させるイメージには直結しないのだ。訓練は訓練であり、書類上の想定域を出ることはない。実弾の向かう先には木製が紙製の点数表示のついた標的があるに過ぎない。今回の海外派遣でも、市之瀬たち末端の隊員はアメリカ軍の後方で突っ立っていたらいい、という感覚がどこかにあったくらいだ。

それが、戦後半世紀以上もの間？戦争？を経験しなかった国の？軍隊ではない軍隊？の兵士の現実だった。

「けほっ！ けほっ！」

「ラロナ……」

粉塵の中から二人が起き上がってくる。

よろめきながらも、市之瀬は手を差し出した。

ラロナがその手を取る。

温かい。

生きた人間の手に違いなかった。ただそれだけなのに、市之瀬にはそれがたまらなく儚く、得難いもののように感じられた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……なんとか」

「わ、私も」

二人とも埃だらけでひどい有様だが、不幸中の幸い外傷はなさそうだ。

緊急避難とはいえ、この二人の命を救うことになったのだ。少しだけ、許されたような気がした。

そしてまた、訳もなく泣きたくなった。

どっと疲労感が襲ってくる。彼はヘリのドアに腰掛け、腰から水筒を取り出した。喉を潤し、ブッシュハットを目尻が見えないように目深に被った。

そこへ、呆然とした表情のカルダがやってくる。

「……なんすか？」

市之瀬が面倒臭そうな目を向けると、彼女は唇を震わせながらこう呟いた。

「これが……異界の戦士の、力なのか？」

第5章 戦火の中へ

「久世三尉、痛みますか？」

市之瀬はヘリの残骸の日陰で上官の手当にあたっていた。

この世界、というよりこの国は暑い。日なたに長時間いると熱中症になりそうだった。市之瀬は腰の水筒からたまらず水を飲み干す。王が鎮座する城が建てられるだけあつてか、涼しげな潮風が絶えないのが救いだ。

「いや、大丈夫だ」

意識を取り戻した久世は、頭に湿布を貼り付けて包帯を巻き、ヘリのサイドドアの縁に座って市之瀬の報告を聞き終えた。頭はまだ痛むが、幸い脳に後遺症などがあるようなものではなさそうだ。

「そう、か……機長が」

彼は沈痛な面持ちで呟いた。

そして、ため息をついて辺りを見渡す。

周囲は、あの竜の出現により人気はなくなっていた。避難民はより奥の城塞に逃げ込んだようだ。

無反動砲の対戦車砲弾で撃破された竜の死体と、運ぶ余裕さえなく打ち棄てられている気の毒な一般市民達の遺体が不気味な空気を漂わせていた。

そして、遠くからは軍勢同士がぶつかり合う戦場の音が聞こえてくる。おそらく、この城の城壁付近にまで帝国軍は迫ってきたのだろう。

この城はどうやら二重の防護壁を備えているらしく、正門のある第一の城壁が突破されるのを見越して、市民を逃がした奥の第二の防護壁へと守備兵力を移しているようだった。

久世は都市ごと包囲されて援軍を望めないこの戦況を知り、それはただの延命措置でしかないと思った。籠城という戦法は守る側に有利とはいえ、援軍がないということは戦況が好転しないということだ。つまり、遅かれ早かれ、この城は落ちる。

「すみません……私の魔力と技量では蘇生魔法までは無理なんです……」

久世の思案顔を見て、しゅん、と肩を落とした少女が申し訳なさそうに呟いた。

サラサラの海色の髪が風に揺れている。

久世は部下から報告を受けた、『魔法使い』の少女に慌てて言った。

「あ、い、いや君のことを責めたんじゃないんですよ」

重傷ではないとはいえ、気絶するほどの頭の打撲を受けてここまですぐで元気でいられるのは、実は彼女が治癒魔法を久世にかけたからだった。

最初は久世も信じられなかった。だが彼女を救った時に負ったという市之瀬の擦り傷を、その魔法であつという間に治してしまったのを見て認識を改めた。

とはいえ、柔軟な適応力を持った久世だが、混乱していないという嘘になる。心のどこかで、自分は頭を打ったせいで幻覚を見ているのではないかという可能性も疑っているのだった。

が、目の前の現実そのものの少女は寂しげに呟いた。

「いいんです……私には、もう治癒魔法担当の神官戦士としての部隊もありません。おめおめと一人生き残ってしまいました」

彼女は一見すると神に仕える聖職者のようだったが、その中でも武装して教会を守る職務に当たる者の

ようだ。そのため、簡単ではあるが白と紺を基調とした僧衣の上に簡単な胸当てを身につけ、腰には護身用に片手剣を帯びている。

「生きてることの何が悪いんだよ」

水筒を腰に戻しながら、市之瀬が複雑な表情で彼女に言った。

自分は死にたくない。自分が死ねば、家族が悲しむ。だから生きていることは重要だし、生きていることはそれだけで誰かの幸せだ。特に、家族を元の世界に残す彼にとっては。

そんな彼の言葉に少女がはっとする。

自分が目の前の少年に命を救われたことを思い出したのだ。

「す、すみません！ 貴方を侮辱するつもりはなかったんです！」

「あ、いや別に恩着せるつもりで言っちゃいないけどさ」

「ああ、私なんてことを…… 武人としてあるまじき言動でした」

おろおろと些細なことで狼狽する少女は、市之瀬の目から見ても武人という柄ではなかった。たれ気味の目元といい、どこかおっとりとした印象が強い。治癒担当というのも頷けた。

（……これが本当の『癒し系美少女』）

そんなくだらないことを一瞬考えてしまいが、彼女は真剣に悩んでいるようなので慌てて打ち消す。

市之瀬に代わって頭を押さえた久世が言う。

「そう思つなら、生き残つたことを恥だと思つちゃいけませんよ。えーと、名前は……？」

少女はそつと上目遣いで二人の自衛官を見つめた。

「リュミ、と申します」

「俺は市之瀬」

「久世だ。リュミさん、怪我を治してくれてありがとう。何とお礼を言つたらいいか」

久世も、市之瀬も心から少女に対して礼を言っていた。

見ず知らずの人間に、戦時下でここまで奉仕してくれているのだ。礼を言つて言い足りない。

リュミはそんな二人をじつと見つめる。

(……とても、誠実そうな方々)

竜を相手に死闘を演じ、人の命を救つたというのに、彼らは恐ろしい程に謙虚である。

彼女には彼らが別の世界からやってきたということは、いまいちよく分からなかった。よく分からないというのは、実感として理解できないからかもしれない。目の前の二人があまりにも人間臭いからかもしれない。超然とした勇者でも、人知を超えた怪物でもない。その反面で、たった一撃で竜を打ち倒す力を持つ……

全てが不釣り合いなのだった。力と人格が一定の比例関係を持つこの世界と、科学力によつて戦闘能力を補う現代世界ではそうしたことは珍しくはない。

リュミは、二人を計りかねていた。

しかし、少なくとも、悪人でないことだけは確かなのは分かる。

ならば、と彼女は意を決した。

「……そう、思われるのでしたら」

ぐつと勇気を振り絞り、真剣な表情で彼女は言った。

「ん？」

「失礼を承知で、一つ、頼んでもよろしいでしょうか……？」

そうだ、もう彼らしかない。

異世界から来た戦士達という、不確定要素に賭けるしかないのだ。
恐れてはいけない。

「自分らにできることなら、なんなりと」

久世は軽い気持ちで応じていた。

ラロナと同じ年頃の少女が、無茶なことはまさか口にしないだろうと見てびついていた。だが、リユミは真剣そのものの口調で願いを口にした。

「この国を、救っていただきたいのです」

リユミの言葉に、二人の自衛官はぎょつとした顔になる。

神に仕える少女は畳み掛ける。

「これはきつと神のお導きなのです！ イチノセ様は私たちのことを命をかけて守ってくださいました！ 私の信仰は間違っではないなかつたのです！ 貴方たちはきつと……この国の、いえ……」

彼女は市之瀬の手を力強く両手で包み込んだ。

華奢な少女の指だったが、驚くほどに力強かった。いや、そう感じられるだけの彼女の意思の強さがそう感じさせているのかもしれない。

彼女は、彼の目を真っ直ぐと見つめた。

そして、断言する。

「この世界の……希望なのです」

「え……ああ、その……」

ごくぐり、と市之瀬がその恐ろしい程に澄み切った瞳に気圧される。普通なら過剰防衛と問題になりそうな重火器の使用が原因で、こんな状況に陥るとは予想外過ぎた。
と

「尼ちゃん。それくらいにしときなよ」

快活な少女の声がその場の空気を変えた。

「ら、ラロナ？」

市之瀬が気の抜けた声を上げながら振り返る。

「ほらよ、酒と食い物だ。腹減っただろ？」

紅い髪の少女はニツと白い歯を見せると、麻袋を放り投げて寄越した。中には干し肉と葡萄酒の入った革袋があった。
久世が尋ねる。

「いいんですか？ 籠城してるなら食糧は貴重でしょう？」

ラロナは苦笑いする。

「持久戦になるほど残存兵力もないらしいからな。女王陛下が士気を高めるために食料庫は開けっ放しにしてるんだ」

そう言い、彼女はどつかとヘリの残骸の日陰に入ると、自分の分の食糧を広げてむしゃむしゃと食べ始める。

「うんめー朝からはんもくっへなかつたんら！」

リュミは、真剣な表情を崩さずに戦士の少女を睨んだ。

「……このまま、仲間の仇も討てないまま終わっていいのですか？」

この温厚そうな少女のどこにそんな闇が潜んでいたのかという低い声だった。

いや、潜んでいたのではない。この戦争で、仲間を全て失ったついさつき、その闇は生まれたのだ。

ラロナは本人は自覚していない復讐の色が宿るリュミの瞳を見つめ返す。

「ごくん、と口の中のものを飲み込んでから、世間話のように答えた。」

「イチノセ達は、この世界にわけも分からずに漂流してきただけなんだ。それなのに、アタシ達を命をかけて守ってくれた。信じられるか？ 黒竜相手にだぜ。それだけでも勲章ものの働きだよ。だから……」

ぐい、と酒を喉に流し込み、口元を拭ってから続ける。

「もう十分なんだよ。無関係なこの国のことなんか忘れて、もう元の世界に戻るべきなんだ」

短い食事を終え、彼女はさっさと立ち上がった。
リユミは自分が復讐を望んでいたことに気付き、目を見開いたまま頂垂れた。

ラロナはそんな彼女の肩を優しく叩いてやる。

「それ食つたら、お仲間が助けに来るまで隠れてたらどうだ？ カルダ団長も許可してくれたし」

カルダは広場の向こう、正門へ続く回廊前で残存兵を率いて再編成を行っているようだった。彼女は、ヘリの残骸に時折眩しげな、羨望とも嫉妬ともつかぬ表情を向けていた。

「ラロナ……そ、その……」

忘れて、という言葉が彼の心に深く突き刺さった。

彼女は、誰も彼もが敵だったここで、ただ一人自分のことを庇ってくれた。ただ一人、名前を覚えていてくれた。

その彼女を、忘れることなどできない。

彼女は行ってしまう。戦場へ。死と狂気が支配する場所へ。

何故だ？ どうしてそこまでして戦おうとする？

分からない……

分からないから、どうしようもなかった。

市之瀬は中途半端に立ち上がってラロナを止めるもせず、送り出しもせずに杳然とした。

ラロナはそんな彼をしばらく見つめていたが、何も言わない彼に何かを感じ取ったのか、腰に手を当てて言った。

「勘違いするなよ。この戦争は帝国の糞野郎共と、アタシらの戦いなんだ。余所の奴の手なんか借りない。自分の国は、自分で守る」

彼女はそう言い放つと、向こうで部隊を再編成しているカルダのもとへ向かおうとした。

「じゃあな、イチノセ。……悪いな、命を救われた借り、返せなくて」

彼女の小さな背中が、更に小さくなっていく。
去っていくのだ。

「お、おい」

「ん？」

ラロナが足を止める。

市之瀬は、彼女の顔を直視できないまま、言う。

「戦況、悪いんだろう？ ……死んじまってるのか？」

「戦士として戦って死ぬなら本望だ」

「か、家族が悲しむだろう！？ 逃げてでも生きるべきなんじゃないのかよ！？」

彼女が、ゆつくりと振り返った。

恐る恐る、彼は顔を上げる。

迷彩服の少年と、鎧姿の少女が、見つめ合う。

「……アタシは戦災孤児だ。家族はいない」

一陣の風。

短い彼女の髪が揺れた。

沈黙。

「だから、だからもう……自分が死ぬことになっても、アタシは何も失いたくないんだ」

彼女は微かに肩を震わせていた。

そして、ぎりり、と歯を食いしばった。

「もう、何もっ！」

彼女は短く叫ぶと、脱兎の如くその場を離れた。

市之瀬には目もくれずに。

その頬に涙が光っていたように見えたのは気のせいだろうか。

彼は、ただただその場に立ち尽くすしかなかった。

「黒竜が仕留められただっ！？」

リヒャルダは伝令から上がってきた報告を耳にした瞬間、普段の冷静さからは想像もつかない動揺をみせた。

……先刻の爆音の正体はあれであつたか！

リヒャルダは呻きそうな顔で懸念していた音の事実を悟る。

今の今まで、戦況は完全に帝国軍に有利であつた。それが覆されたかのような情報だつた。

それは他の幕僚たちも同じであつた。

「マリースア軍にそんな力が……！？」

「いや、あり得ぬ！ 何かの事故ではないのか？」

前線司令部内にはあつという間に憶測が飛び交った。
リヒャルダは銀髪を忌々しげに掻き上げると、よく通る声で一喝する。

「静かに！」

静まったのを確認すると、彼女は切れ長の瞳を伝令に再び向けた。

「黒竜はどのような武器でやられていたのだ？ 槍か、それとも魔法か？」

「それが……おそらく魔法ではないかと思われませんが」
「おそらくとは何だ？」

伝令はその問いに即答できなかった。

「その……竜の体が原型を留めておりませんでしたので、火炎属性の高位魔法かと」

伝令の説明に、幕僚の一人が声を荒げる。

「竜の体を破壊するほどの魔術師がこんな辺境国の軍にいるはずがなかるう！」

「待て、その目で確認したのだな？」

縮み上がる伝令を救うようにリヒャルダは念を押した。

「は、はい！」

「よろしい……下がれ」

リヒヤルダは火の手が上がる敵国の都市を再び丘から眺めた。

今のところ、異常らしきものは見受けられない。しかし、妙な胸騒ぎがした。

すると、頭を抱える彼女の背後に影のように立っている男がいた。

「実に面白いですな」

ローヴを目深に被っているため、表情を読み取ることとはできない。だが、その顔が薄気味の悪い笑みに彩られていることは想像に難くなかった。

「……督戦官殿、我が軍に損害が出ており、作戦に遅延をもたらしているこの事態が面白いとは聞き捨てならぬな」

「いや失礼。非礼はお詫びいたしますよ、將軍」

「貴様、何か知っているのではないだろうな？」

「督戦に同行しているだけの私に左様なことを尋ねられましても返答に窮しますなあ」

次の瞬間、椅子から立ち上がった彼女は、督戦官ゲンフルの首根を片手で掴み上げていた。

「う、ぐ!？」

「本国からの差し金知らぬが、我が將兵に仇なすと分かればその場で斬る!」

緋色の瞳が男を射抜く。有無を言わさぬ恫喝だった。

「と、督戦官を殺せば、本国への反乱と取られますぞ?」

「情報を出し惜しみする督戦官だ、間諜の嫌疑があつたとすればよい」

リヒヤルダは口の端を歪めて男に釘を刺す。脅しと取られるのが癪だった。

「ふ、ふふ…… お好きになさればよろしい」

「言われんでも」

彼女はようやく男を解放した。

咳き込むゲンフルを尻目に、彼女は部下たちを睥睨する。

部下は皆、彼女のことを信頼した面持ちで、督戦官の男を哀れむ者は一人もいない。

「主力は健在だ。日没までに城を完全に包囲しろ。正体不明の敵の抵抗に遭えばそこで陣を止めてよい。各部隊、伝令を密にしろ」

「はっ！」

「戦利品掠奪や残敵掃討なぞ後回しだ。部隊を再編成して城攻めの準備。明日までに落とす！」

応！

姫將軍に率いられし精鋭たちは、命を捨てるに値する戦場を求めるかのように天幕を離れて行った。

「では…… 御達者で……」

蒼い髪に僧衣を纏った少女が、深々と頭を下げていた。

目の前に、二人の迷彩服姿の若者の姿がある。

「あなたの助けを必要としている人は、きっと大勢います。ですか

ら、生きること諦めないでください」

リュミは久世が宥め賺し、なんとかして後方の民間人達のもとへと下がってもらったことになった。

彼女は、もしかしたら迷っていたのかもしれない。

信仰も、仲間の全滅という現実には、あまりにも無力だったのだろう。

そんな中、自分の命を救ってくれた異界の戦士達の励ましは、神の声よりも心に響いた。

少女は何度も彼らを振り返りながら、寂しげな視線を送って去っていく。

だが、最後に彼女はこう叫んだ。

「真の勇ある者を神は必ず見ておられます！ あなた方に、神のご加護とご武運を！」

彼女の目にも、ラロナのように涙があった。

そして、戦場に奇妙なエアポケットが生まれた。

そこには、迷彩服姿の二人だけが残された。

「市之瀬、何を考えてる？」

「え……？」

ヘリの残骸の中から使えそうな装備や、そして武器弾薬を運び出す作業をしていると、久世が不意にそう尋ねた。

久世はヘリの中から弾薬の入った箱を運び出し、地面に置いて一つため息をつく。

「ラロナちゃんには、ラロナちゃんの国の事情があるし、僕達には僕達の国の事情があるんだ」

市之瀬は、うつと言葉に詰まった。

ラロナが去っていった正門の方がどうしても気になり、何度も見つめてしまっていたのだ。

そして、久世は彼に釘を刺した。自衛隊に身を置く指揮官として、それは仕方のないことだった。

「我々は、ラロナちゃんにも、その敵にも、味方をしちゃいけないんだ。それが……」

彼自身、納得してはいないといった様子だったが、それでもはっきりと言う。

「自衛隊って組織なんだ」

市之瀬は上官から目を逸らすようにラロナの行ってしまった先を再び見た。

「……俺、あいつに助けられたんです」

「あの竜を倒したことで貸し借りなしだ」

「あいつ、きつと死ぬ気なんです」

「だとしても僕達にはどうしようもない」

「どうしようもなくないですよっ！」

市之瀬は叫んでいた。

それが、久世が部下に対して理解ある良き上官であることに甘えていると分かっていたが、それでも止められなかった。

「久世三尉だって見たじゃないですか！？ あんなにたくさん兵隊でもない人達が殺されてるんだ！ 俺達、人を救うために海外派遣

されてたんじゃないんですか!？」

「我々の任務は人道支援であって戦闘ではない。それに、ここは派遣先のアフリカじゃない」

「何の違いがあるっていうんです!？ 同じ人間なのに!」

「市之瀬二士、上官命令に逆らうなら……」

久世の顔から、いつもの温厚な青年の表情が消える。

冷たささえ感じられる、鋭い眼光が宿っていた。

「俺も相応の覚悟をしなくてはならん」

久世は腰に提げた9?拳銃を引き抜いていた。

市之瀬にこれみよがしに向けたりしないことが、逆に彼の本気さを表している。

「俺の任務は、生き残った部下を無事に帰還させることだ」

「撃てば無事じゃなくなりますよ」

「あの子を助けに行っても無事ではなくなる」

市之瀬は、久世とこうして言葉を交わしている内に、自分が何をしようとしているのかが分かってきた。

俺は、ラロナを死なせたくないんだ……

そのために、自分にできることは限られている。

戦いの中へ、戦場へと飛び込むこと。

あの狂気と恐怖の世界へ。

ああ、美奈……俺、お前のために生きるって約束したのに……どうして……

本来なら、赤の他人のラロナのために命を張るなんてことは、全く天秤に釣り合わない選択だ。事実、さっきまではそう思っていた。だが、何故か今は違う。

家族のことを軽んじ始めたわけではないが、ラロナも同じくらいに気になるのだ。

家族のためなら、どんなことだってやってやると決意したように、ラロナのためなら、きつと、同じく何だってできるかもしれない。例え、上官命令に背くことでさえ。

「俺、今分かった。やっぱり自衛隊向いてないっすわ」

反抗的とも取れる自嘲の笑みを見せると、久世はどこか悲しそうな顔をした。

「市之瀬、俺は我が身可愛さで言ってるんじゃないんだ。お前にもしもの事があつたら、親御さんに合わせる顔がなくなる」

市之瀬は罪悪感に胸が痛んだ。家族以外の誰かに、ここまで真剣に心配されたことは始めてだ。

そうだ。そうなのだ。

ラロナも、久世三尉も……

みんなみんな、本当に自分以外の誰かのため、何かのために生きている。

俺は、結局、誰かのためだと言い訳をして逃げてきたただけだ。

自分で何も選択してこなかったし、そのために負う責任からも目を背けていた。

……ああ、考えれば俺は自衛隊に志願入隊したんじゃない。

就職先がないこの御時世に、公務員になれば将来安泰とか、自分が大学に行く余裕が家にないから、消去法としてその道に踏み込んだだけなのだ。

美奈のためだなんて後付の理由だったのかもしれない。

本当は説明にやってきた、どこかいやらしい笑みを浮かべた中年の広報官からこう説明を受けたからだった。

「いいかい、浪人したり、中途半端な大学に行って就職浪人するハメになるなんて、バカバカしいと思わないかい？ それならだね、自衛隊でがんばれば、衣食住ただで生活できて、ご家族のためにもなる。妹さん、今度高校進学なんだってね？ お父さんがお亡くなりになったとお母さんが仰っていたけれど、古いこととは思っけどね、一家の大黒柱になってあげるのも男の子の務めなんじゃないかな？ 君、体力ありそうだし、大丈夫大丈夫。そうだそうだ、海外派遣とかに行くとね、手当金がたくさん出てそれこそ高級車が新車で買えちゃうんだよ？ ははは、興味あるって顔してるね、じゃあ、今度駐屯地で試験があるから、受けるだけでも受けてみないかい？ そうか受けてみるかい！ じゃあ、この書類に印鑑を……」

過去の記憶を思い出した市之瀬は、空を仰いだ。

戦場だというのに、突き抜けるように高く、蒼い空。

……なんてザマだ、この俺は。

部下を守るために鬼にも仏にもなる久世三尉、故郷のために命を投げ出す覚悟のラロナ、あのカルダとかいう姉ちゃんだって、虚勢を張ってまで貴族とやらの矜持を貫いている。

俺には、そんなものは何もない。

「……分かってます。久世三尉」

久世は一瞬、市之瀬が自分の命令を聞き入れたのかと表情を緩めた。

が、次の瞬間、久世の目は驚愕に見開かれた。

「俺、クビでいいすから！」

市之瀬は久世に背中に負っていたスナイパーライフルを構え、銃

口を向けていた。

「甲板に無許可出入り、重火器の無許可使用、最後に上官反抗」

震える声で市之瀬は上官に言った。

「もう、いいんす。久世三尉には、十分お世話になりました。すいません、最後までダメ隊員で」

「市之瀬え！」

久世は叫び、拳銃を市之瀬に向けようとした。射殺するためではなく、手を撃ち抜いて行動不能にするためだった。彼は、本物の指揮官であり、本当の意味で心優しき青年だったが

「うわっ!？」

ずん、と爆音と地鳴りが彼らを襲った。

二人は震源地を無意識の内に振り返っていた。

正門の方で、黒い煙と地鳴りのような声が聞こえて来る。直感的に、正門が突破されたのだと思った。

「ラロナ！」

市之瀬は走り出した。

ただ一人の少女に会うためだけに。

「市之瀬っ！ ダメだ止まれ！」

パン！

乾いた銃声が響いた。

だが、着弾の気配がどこにもないことから、市之瀬はそれが空に向けた威嚇射撃だと理解した。

……ごめんなさい、久世三尉。ごめん！

市之瀬は走った。人としてくだらないことだが重要なことを捨て、大切だがくだらない何かを手に入れた気がした。

「死ぬなっ！　ラロナああああ！」

狙撃銃を抱え、安全装置を外し、彼は思いの力だけを頼りに戦場の中へと飛び込んでいった。

第6章 防衛戦？

城の間隙で敵の密集陣形が地響きを立てて迫ってくる。黒い甲冑に身を包んだ、海の向こう、フィルボルグ帝国精鋭の黒騎士の一系乱れぬ戦列陣形だ。

防衛側は城壁から絶え間なくそれを阻止すべく弓を射掛け、敵の顔まで判別できる距離まで接近されると、スリングを勢いよく回転させ、石を投げつける。張り巡らされた堀に手間取り、前進の速度が落ちたところを頭上の城壁から狙い撃ちにされる。特に、セイロード城の堀は水堀で、接近が極めて困難であった。言うまでもなく、正門にかかる橋は上げられている。栄華を誇るセイロード城は、その絢爛豪華さ以外にも、防衛拠点としての城としても完成されていた。

そのため攻城戦の定石通り、帝国側にもかなりの損害が出ていた。だが、攻撃側は防御側の三倍の兵力が必要だが、おそらく帝国軍は防衛側の五倍はいた。奇襲攻撃の混乱の中、都市部を放棄するのを躊躇ったために、マリースア軍は無意味に兵を消耗し切っていた。残存兵力を少年兵まで投入して前線を維持している。

「怯むな！ 敵は空を渡って来ている！ 攻城用の投石機は持っていない！」

城壁の上でカルダが叫んでいた。最前線の指揮を受け継いだのだ。正規兵の指揮官は、本丸まで撤退することになった。それが命令だった。

カルダ達、制空権を奪われた飛行部隊の残存兵は、正規兵ほどものはや期待されていない。そのため、時間稼ぎのために戦線投入されたのだった。

捨て駒である。

だが、それを理解してなお、兵士達の士気は旺盛だった。

「ここが破られれば後はないぞ！ 日没まで耐えきるのだ！」

カルダの檄に、兵士達が歓声を上げて応える。

女子供の多い二線級部隊としてどこか低く見られて来た飛行軽甲戦士団が、ここまで正面切つて敵と戦う栄誉の場を与えられている。そのことが嬉しいのだ。

今までに散っていた仲間の仇とばかりに、城壁にいる彼らは獅子奮迅の戦い振りを見せていた。

「はあっ！」

彼女は次々と城壁に登るために掛けられる敵の梯子を槍で叩き外し、登つて来る敵兵を串刺しにして城壁から払い落とす。

やはり、彼我の戦力差は歴然としていた。数の勢いで押し切られそうになっている。城壁にいるマリースア軍の数は五百足らず。対して攻撃側は三千はいる上、後詰めに更に待機している部隊が見えた。岬の上に城が建っている関係上、防衛すべき面積が小さく、守りやすいとはいえ、この戦力比は絶望的だった。

敵の魔法戦士が火炎魔法を打ち出し、城門に当たって巨大な爆音が鳴り響く。

黒い煙がもうもうと立ち上り、一瞬、門が遂に破壊されたかと肝を冷やす。

セイロード城の城門は、並の破城槌の直撃を受けてもびくともしない。だが、こうした攻撃が重なり、今にも崩れそうなほどに破損して来ている。敵は無駄のない攻撃を繰り返していた。

「……彼らの力があれば、この戦況、覆せるだろうか？」

何度目かの攻勢を何とか防ぎ切ったカルダは、返り血に朱に染まった凄絶な顔を、一瞬疲労に歪ませてそう呟いた。
竜を一撃で倒す、異界から漂流してきたという、この世にあらざる戦士達。

だが、貴族として、余所者の力にすがりたいと思っってしまった心境を恥じる。

「カルダ団長、何か仰られましたか？」

「いや、何でもない」

彼女にも薄々この戦いの結果は見えていた。

だが、武人として、自分には戦うことしかできない。その愚直さ故に、自分は幼くして家を飛び出し武人の道を歩んだし、軍にあっても二線級部隊に左遷されていた。

（私は……馬鹿な人間だったのかもしれない……）

貴族の矜持にこだわり、何か本質を見誤ってきたのではないか。自分は他の貴族とは違う、貴族の女どもとは違う。結局、それは自分の独りよがりだったのではないか。

乾いた笑みが浮かぶ。

返り血に染まった美貌の中のそれは、狂氣的に美しかった。

周囲にいる男性の兵士達は、それを見ただけで、背筋がぞつとし、同時にこの女性のために死ぬことが名誉なことに思えてきた。

「最後だけは、武人らしくあろう」

彼女は決意した。今までの自分など、もうどうでも良い。

今、いかに生きるかが重要なのだ。

ここで、満足いくまで戦えば、自分は戦士の海辺へ行けるはずだ。

すまない、私などのために命をかけさせてしまつて……

カルダは自分を信頼してついてきた兵を見渡し、高らかに槍を掲げた。

部下達の純粹な歓声が、彼女の心を少しだけ癒してくれた。

だが、その時、歓声を打ち消すように咆哮が響き渡った。

オオオーン……

竜の鳴き声。

海を渡つてきた強行軍と、初戦の戦果で疲れ、翼を休めていた竜騎士団が再び戦空へ飛び立とうとしている。

それはマリースア側にとって、死の咆哮だった。

竜の咆哮には人間の根源的な恐怖心を煽る性質がある。そのため、竜騎士団は敵前であれば、相手の士気を砕くために一斉に咆哮を上げる戦法を取る。それだけで降伏した例も少なくはない。

カルダも、先刻までの決意が揺らぐような恐怖に襲われていた。

それは、理性ではどうにもできない、人間である以上抗えない恐怖であつた。

と

「負けるかぁ！ イチノセの手柄つつつても、こっちは黒竜一匹ぶつ倒してんだぞ！」

少女の叫び声が聞こえた。

カルダは横を見る。

紅い髪の少女が、勝ち誇った顔をして敵陣を睨んでいた。

ラロナ練戦士……？

カルダは目を見張る。

「そ、そうだそうだ！ こっちは黒竜を倒している！」

「戦って勝てない相手じゃないのよ!」

部下達は虚勢には違いなかったが、誰もが戦いを放棄しようとはしなかった。

カルダは気付いた。いや、気付きたくなかったことを、認めた。そうだ、あの少年は、我らが逃げ惑う中、ただ一人で竜の前に立ちはだかった……

彼女は恥じた。

あの少年を一度でも腰抜けだと思ったことを。

「そうだ戦士イチノセを倣え! 武運は我らにあるぞ!」

カルダは部下達に続いてそう叫んでいた。
すると

「あれ、俺がどうかしたんすか?」

少年の声が城壁へ登って来る階段から聞こえた。

「……イチノセ、殿?」

カルダは振り返ると、信じられないものを見るかのように彼の姿を見つめた。

間違うはずはない。あの奇妙な緑色と茶色が混じり合った服を身につけ、得体に知れない武器らしきものを抱えている。

「まあいいや、ラロナ、います?」

「え? あ、ああ、あそこに、いるが……?」

「どうも!」

「あつ、ちょ、ちよつと……」

いつもの怜悯な言葉遣いのカルダが思わず普通の女性のような声を上げていた。

それくらい、市之瀬は無頓着にその場に現れたのだった。ラロナも、あんぐりと口を開けて彼の姿を凝視していた。

「……何しに來たの？ お前」

「何しにつて、お前を守りに來たんだよ」

市之瀬は身を低くしながら城壁で防御態勢を取っている彼女に近づいた。第一匍匐と呼ばれる中腰くらいの匍匐前進だ。

「守り、に……？」

ラロナは自分の隣へ腰を据えた少年を呆然と見つめた。そして、かっと表情を怒りに変えた。

「馬鹿野郎！ 余所者の手を借りる気はないつて言っただろ！」

「知らんよそんな。俺が守りたいから守るんだ」

「はあ！？」

ラロナは彼が何を言っているのか訳が分からなかった。

命令でも、行きずりで仕方なくでもなく、守りたいから、守る……理由になっていない。

どうしていいか分からず目を白黒させるラロナの横で、市之瀬はライフルのボルトを操作し、ガチャンと薬室内を確認した。

「リュミもそつだ。借りがあるつて思っただつたら、軽々しく死ぬ覚悟なんかするなよ」

そう独り言のようにラロナに言いながら、彼はボルトオープンしたライフルに弾薬を装填する。

「そんな……こと言われたって……アタシは……」

「ああ、分かるよ。戦士だから戦場にいるしかない。だから来た。俺も、借りを返したいしな」

「……お前、アタシに借りなんてあったか？」

ジャカツ！

ボルトを閉鎖し、弾を銃身へと押し込む。
市之瀬はラロナにそつと言った。

「あるよ。俺の名前、覚えててくれただろ」

そんな会話を続ける少年を、城壁の兵士達がまじまじと眺めていた。

「あ、あれが？竜殺し？の戦士なのか？」

城壁にいたために市之瀬を知らない守備兵の一人が隣の飛行戦士団の中年の兵士に尋ねる。

「間違いねえ、俺は見たんだ。あの小僧……いや、イチノセ殿が魔法を使って竜を一撃で倒すところを」

弓を負った若い女兵士が驚きを隠せずに言う。

「本当なの！？でもどうして私達のところへ？」

その戦友らしき若者が恐る恐る呟く。

「味方、してくれるんじゃないか？」

「そんなまさか……」

ひそひそと周囲が落ち着かない雰囲気になった。

カルダはおもむろに市之瀬の所へ歩いて行く。こんな時でも、悠然とした態度でいるのは、士気を気にしてのことだった。

「イチノセ殿、加勢していただけるのか？」

カルダは信じられない反面、信じたかった。

彼らが、異世界の戦士達が、自分達と肩を並べてくれることを。

「加勢なんて大したことじゃないっすけど、そうっすね……」

実際、ほとんど行き当たりばったりのノープランで飛び出して来たのだった。苦笑いするしかない。だが、やるべきことは分かっていた。

「一人でも多く、守ります」

それだけは心に決めていた。ラロナを、そして理不尽に死ぬべきではない一般市民を、自分は守る。それが、生まれて初めて自分が上官に反抗してまで掴み取った選択だった。

カルダはじつと少年の顔を見つめる。
そつと、目を伏せた。

「かたじけ、ない……」

彼は……こんなにも純粹に無辜の民のために命をかけるつもりで

いる……

義のために命をかけるのが貴族だ。ならば、彼こそは貴族であり、騎士に違いない。

だが、ここで彼に跪くことをしない自分に、彼女は自分のプライドの度し難さを感じた。

そんな彼女の心中を察そうともせず、市之瀬は苦笑いした。

「あのー……これ終わったらカルダさんの方から上官に取り合ってくれないか？ 俺、脱走してここ来ちゃったんで」

ラロナがぎょつとした顔をする。

「だ、脱走してきたのか！？」

この世界の一般的な軍での脱走といえば、最悪の場合軍法会議にかけられて、良くて鞭打ち、最悪死刑になる重罪だ。

だが、市之瀬はあまり気にしていないようだった。

それもそのはず、自衛隊には軍法会議はない。軍法会議というのは日本国憲法において禁止されている特別裁判所に該当するので設置や制度化はできないという細かい背景もあつたりする。つまり……

「ああそーだよ。今回ばかりは減給どころか懲戒免職まっしぐらだよ」

脱走の最高刑はそれなのだった。

そんな彼の置かれた立場を知ってか知らずか……恐らく知らずに、カルダは笑った。

「ははははっ！ 見上げた根性だなイチノセ殿。分かった。このカルダ、家紋にかけてその約束果たそう。安心していてくれ」

勇者のためなら、それくらいおやすいご用だった。

カルダの顔に、ここまで純粋な笑みがこぼれるのは珍しいことだった。そして、本人もそれに気付いていない。

「そんじゃあ、カルダさんにも死んでもらっちゃ困るっすね」

冗談じみているが、決して冗談ではない彼の言葉に、カルダは頷いた。

「そうだな……なに、イチノセ殿がいるなら一騎当千だ、自分の心の心配などせずともよいだろう」

「うへえ、プレッシャーかけないでくださいよ」

「ぶれっしやあ？」

「まあそれはさておき、戦況はどうなってるんすか……って」

城壁の影から城の外を見た市之瀬は顔面蒼白になった。

「うわっ！？ 何だよあれ！ あんたたくさん敵いんの！？ 弾ぜってー足りねーじゃん！？」

ラロナがさつきとは別の意味でぎよつとする。

カルダは、前言撤回しようかと心の奥で呟いた。

市街地の制圧を終えた帝国軍の前線司令部は城の近くまで移動していた。

無論、リヒヤルダは兵に自分の姿が見えるよう気を配り、士気の維持に努めていた。そうした彼女の指揮官としての有能さもあり、

黒竜の撃破という衝撃はさほど影響はしていない。その証拠に、攻城戦はおおむね目論見通りに進んでいる。正門を突破するのにと一歩というところだ。敵の残存戦力は多くはない。城へ雪崩れ込めば、勝敗はほぼ決する。

「竜騎士団は魂砕きの咆哮のみとは慎重に過ぎませぬか？」

その認識は麾下の指揮官達も同じだった。

だが、彼女は虎の子の竜騎士団を温存することを選んでいた。確かに強行軍を行った竜達は休ませねばならない。しかし、この正念場で最強の戦力を出し惜しみし、無駄な地上兵力の消耗を強いるのはどうしてなのか。

そんな彼らの疑問の視線に、彼女は冷静な表情で答えた。

「黒竜が倒されたのは事実だ。ならば敵を過小評価するのは愚挙。奴らが何を『隠し持っている』のかを知る必要がある」

リヒャルダは戦場において極めて実利的であり、慎重な人物だった。だからこそ、今までの戦闘で失敗が少なく、同時に危機に陥っても立ち直りが早く、致命的な損害を受けることなく作戦を完遂させてきた。

彼女の直感の外れたことがない。

とはいえ、今の幕僚達の顔には明らかな戸惑いがあった。

今見えているマリースア軍の抵抗は至極普通の田舎軍隊のものだ。城は確かに堅固な作りだが、落とせないものではない。これよりも困難な城攻めはいくらでもあった。

「閣下、命令通り戦列第三大隊が本格攻勢をかけるようですよ」

今までの戦闘は所詮、小手調べだ。

マリースア軍はどうやらよく守っていると悦に入っているようだが、手加減した攻撃を防いでいるとも知らないとはおめでたい。リヒャルダは精鋭の騎士団が整然と前進を開始するのを満足気に眺める。

前線指揮を取るガスコーニュ伯が古強者を思わせる笑みを見せて抜刀した。

「前進ー！」

黒騎士達が一糸乱れぬ隊列を整えて前進を開始する。まだ弓も魔法も届かない距離だが、その迫力は敵の度肝を抜いていることだろう。

幕僚の中には笑っている者さえいた。やはり帝国軍の黒騎士は最強である。

指揮官を示す派手な装飾の甲冑を身につけたガスコーニュ伯は、前線でまず城壁の防御状態を確認しようと遠眼鏡を従者に命じて取り出した。

ガスコーニュ伯は無骨な男だったが、敵情をよく観察し、的確な弱点や有用な情報を分析することのできる人物だった。リヒャルダが第一波の正面攻撃の先陣を彼に切らせたのは、そうした能力を買ったことだった。

彼は城壁を注意深く確認し始めた。

やはり、敵の守備隊は満身創痍の捨て駒らしき連中ばかりだった。女子供に負傷兵。哀れなほどの敗軍である。

（だが変だ……あそこまで追い詰められて怯えておる者が誰もおらぬ）

城壁上の敗軍であるはずの兵士達は、事前の竜の咆哮を受けながらも、誰一人恐怖や不安に満ちた顔をしていない。それどころか、

まるでこの戦いに勝つつもりでいるかのような戦意に満ちた表情をしている。

それには妙な胸騒ぎがした。

リヒャルダ將軍の危惧が、漠然と理解できたような気がした。

だが、彼はまだ余裕があった。

彼が立っているそこはまだ最前線からは程遠い。

どんな強い弓でさえ、ここまで矢を飛ばすことはできないだろう。そのため、彼にはそこに目立つ姿で立っていることに、何の警戒もなかった。

彼はじつくりと城壁を眺める。

あれは、敵の指揮官だろうか？ 草色の長い髪をした槍兵将校風の女が立っている。

その隣に、短く紅い髪をした小娘が一人。

そして

「……何だあの小僧は？」

周囲のマリースア兵とは異質な何かがそこにいた。

緑色と茶色が混じり合った奇怪な服を着た少年だ。

少年は微動だにせず、何か細い筒のようなものをこちらへ向けている。

筒の上には、今自分が使っているような遠眼鏡のようなものが乗せられていた。

一瞬、目が合ったような気がした。

そして

（何か光っ……）

オレンジ色の閃光と共に、超音速で飛び込んで来た何かが、遠眼鏡のレンズを貫通し、彼の右目から後頭部をぶち抜いて行った。

彼にはそれが、M24対人狙撃銃から放たれた7・62?口径の高速ライフル弾であると知る術もなかった。

勇壮なる攻撃の前に、最高の士気であったところで、ガスコーニユ伯がもんどりうって倒れた。

リヒャルダは絶句する。何か起こるのなら、最前線であろうと思っていたため、全くの予想外の出来事だった。

同時に、事が起こってなお、リヒャルダをも含む帝国兵達には一体何が起きたのか全く理解できなかった。

と、彼らの耳に、二秒遅れて乾いた音が聞こえてくる。

ターン……

百戦無敗の帝国軍が、音を知る前に命を奪われる、スナイパーライフルによる超遠距離からの狙撃を目の当たりにした瞬間だった。

防衛戦？

「が、ガスコーニュ伯討ち死につ！」

副官が叫び、指揮を引き継いだ。

「団旗をかざすのだ！ 前進あるのみ！」

副官は旗手に命じ、後方の司令部と友軍によく見えるように旗を振った。命令伝達の技術が未発達なこの世界においては、旗や笛といった視覚・聴覚による情報伝達が重要である。同時に、部隊の象徴である団旗が倒れることは、例えば部隊が健在であったとしても、指揮能力の喪失、つまり部隊の壊滅を意味した。

そのため、兵士達は健在な団旗を見て戦闘の続行と、部隊が混乱していないことを確信する。

しかし

「ぎゃあっ！？」

突然、旗手が肩を押さえると、旗を取り落とす。

旗手の肩からは鮮血が迸っていた。

パーン！

風に乗ってあの音が再び聞こえた。

兵士達が戦慄する。

だが、狙われる危険を顧みず、別の兵が旗手を交替する。

「旗手を絶やすな！」

「お、応！」

戦友の叱咤に、精鋭の騎士達は未知の脅威との戦いの中でも混乱なく戦列を前進させていく。そう、彼らは数多の戦場を駆けてきた精鋭部隊だった。新兵のように多少の恐怖で泣きわめいたりはいない。

乾いた音。

今度は誰が倒れたのかと、兵士達は周囲を見渡した。

「うぐっ！？」

副官が腹を押さえて跪いた。

「副官殿！」

側近が駆け寄る。

「……か、構うな！ 貴様が指揮を引き継げ！ 確固に現場指揮官が協働して戦闘を継続せよ」

副官の腹からは大量の血が流れている。

「くっ！」

必死になって側近の騎士は副官の傷口を止血しようとする。

ガスコーニュ伯達を殺した謎の攻撃は、まるで見えない矢で貫かれているかのようなだった。副官の鎧にも、指先ほどの小さな穴が開き、それが背中まで貫通している。

「治療魔法を！」

側近は従軍の魔法使いに治療を命じる。

そして、歯ぎしりして城壁を睨む。

抜刀し、切っ先を城へ向けると、部隊を鼓舞するように叫んだ。

「ガスコーニユ伯の仇を取るぞ！ 全軍進撃い！」

白刃が太陽に輝く。

そこ目掛けて、銃弾が飛び込み、刃をへし折って地面へと突き立てた。

「ああクソ！ 距離のせいか思ったより逸れる、少しクリック修正しないと」

市之瀬は狙撃銃を一度引っ込め、弾薬をリロードしながらそう呟く。

そんな彼をラロナが耳を押さえながら見つめていた。

「この距離から、敵将の首を挙げるなんて……」

彼女は目の前の少年を凝視する。まだ耳がキンキンと鳴っていた。

『なあラロナ、あいつらの指揮官はどいつなんだ？』

彼はすこし前、そう自分に尋ねた。

戦列の後方にいる敵将を教えてやると、『距離700メートル……大分遠いな、風向きを考慮して調整するか』とブツブツと呟き、

手にしていた変な鉄の棒を抱え込むようにした。

一体何をしているのだろうかと訝しんでいると、次の瞬間、何か
が破裂するような凄まじい音を立てて鉄の棒が火を噴いた。その音
にひっくり返りそうになったが、それよりも驚いたのは、遙か彼方
の敵将が血を吹いて倒れたことだ。

それから、彼は続けて敵の重要と思われる者を狙って攻撃し、敵
の進撃を遅延させ続けた。

信じられない戦い方だった。伝説の弓使いでさえ、こんな無茶な
戦い方などではしないだろう。

彼女は急に彼のことが恐ろしくなった。理由はない。強いて言う
なら、あまりにも次元の違う戦い方をする彼が理解不能だからかも
しれなかった。

だが、恐怖は次第に薄れた。彼は味方で、そして、自分を守るた
めにここへ来たのだから。

「あんだだけ指揮官やられてまだ引き下がらないのかよ!？」

市之瀬は再び狙撃銃を戦場へ向け、呆れと恐怖をない混ぜにした
感覚で呟いた。

「奴ら、今度こそ本気のようにだ」

カルダがその様子を見て額に汗をかく。

「何で今までは本気じゃなかったんすか？」

市之瀬の問いに、カルダが唸る。

彼の問いはもつともなものだった。確かに、何故全力を挙げてこ
こを落とそうとしなかった？ 我々の敢闘があつたとはいえ、竜騎
士団を少しでも差し向けられていたならひとたまりもなかったはず。

おそらく、自分の勘が外れていないのならば……

「あなたを知るためだったのかもしれない……」

「お、俺を!？」

市之瀬が何の冗談だとカルダを仰ぎ見る。

だが、カルダの顔にからかうような表情は見当たらない。

「敵は黒竜を倒されて慎重になっていたのです。もしも最初から本気であったなら、この守備兵力でここを守ることなど……」

市之瀬は背筋がぞつとした。

相手が、馬鹿でも烏合の衆でもない、組織化された軍隊であることを改めて思い知ったのだ。そして、敵の指揮官は自分の狙撃を知るために、作戦を立てた。だとしたら、相手の思い通りに事が動いているということだ。

戦争とは、被害の大小で勝敗が決まるのではない。作戦の目的を完遂したかどうかで勝敗が決まるのだ。だとしたら、今の状況は敵が勝っているといっても過言ではない。

市之瀬は不安に駆られた。

自分は相手の思うとおり、手の内を見せてしまった。狙撃というこちらの戦い方を見せてしまった。

狙撃の恐ろしさにより慎重になるだろうか？

それとも……

市之瀬は射程圏外に存在する敵の前線司令部をスコープで確認した。

白銀の髪を流した美女が、こちらを見ていた。

その女は、不敵な笑みをたたえているように、彼には思えた。

「……敵の手の内は分かった」

リヒヤルダは熟考の末、判断を下していた。

「作戦通り、後続隊も投入、竜騎士団にも出撃準備させる。あの程度の将校の損失ならば、無視できる範囲だ」

「御意！」

黒竜が撃破されたと聞き、敵がどれほどの切り札を持っているのかと気になったが、あんな子供騙しの戦い方しかできないのなら問題は無い。確かに将のみを狙い、指揮能力の低下や混乱を誘発させる戦法は恐ろしい。

「だが、そんなものが通用するのは普通の軍だけだ」

リヒヤルダは勝ち誇った。帝国軍の真の強さは、指揮官がいなければ戦闘が継続できなくなるほど柔な将兵ではないことにある。黒騎士達は雑兵ではないのだ。高度に訓練された常備軍なのである。それも、実戦経験豊富な精鋭達で構成されている。団旗を決して手放さなかったのを見ても分かることだ。安易な退却などあり得ない。

「マリースア、そしてそれに味方する何者かよ。その城で土くれになるがいい」

リヒヤルダの命を受け、主力部隊が攻勢をかける突撃ラッパが吹き鳴らされていた。

「来るぞ！ 全員備えよ！」

明らかに今までとは様子の異なる、怒濤のような敵の攻勢を目の当たりにし、カルダを始めとする守備隊は覚悟を決めて体制を整えた。

「俺の狙撃、取るに足らないって思われたわけか……」

市之瀬は無力感に苛まれていた。

敵が規格外な軍隊だからだという冷静な判断はできなかった。

「何言ってるイチノセ、大戦果だったじゃないか」

沈む彼の肩を、バンバンと叩く者がいた。

ラロナだった。

「羨ましいぞ。敵の大將首を挙げるなんて、我が軍だったら出世間違いないのにな」

彼女は白い歯を見せて笑った。

太陽のような笑顔だった。

「……ラロナ」

「生きて帰るんだ、イチノセ。アタシを……」

彼女は市之瀬の両肩をがっしりと掴み、じっと彼の顔を見据えた。

「アタシを守ってくれるんだろう?」

それっきり、しばらく二人は見つめ合ったまま、言葉も交わさずにいた。

少年は、誰かを守ると約束したのは初めてだった。

少女は、誰かに守られるのは初めてだった。
遠くから、敵の突撃ラッパが鳴り響いて来るのが聞こえた。
市之瀬は力強く頷いた。

「ああ、そうだ……俺達、生きて帰るんだ。誰も、ここで死んじやダメだ」

彼はライフルを握りしめる。

「イチノセ殿！ 敵の弓兵と魔法使いが厄介だ！ 狙えるか？」

カルダが戦場を睨みながら尋ねて来る。

彼は再び城壁から狙撃銃を敵に向けて構えると、ラロナに言った。

「目標を指示してくれ！」

「ああ！ 任せとけ！ 山育ちだから目の良さには自信があんだ！」
「頼んだぜ相棒！」

市之瀬はライフルを構えると、直近の敵に向かってトリガーを引いた。

一人の自衛官と、一人の兵士の戦いが始まった。
いや、それだけではなかった。

「共に戦えて光栄だ！ ? 竜殺し?!」
「先刻の戦い、目を見張りました！」

守備隊の兵士達が口々に叫んでいた。

市之瀬は彼らを振り返り、その目に焼き付けた。

例えばようなない高揚感が彼の身体を駆けめぐっていた。一種のナチュラル・ハイだ。

今自分は、今まで生きてきた中で最も誰かに必要とされている。それは不思議な感覚だった。

何か、報われた気がした。自分の選択は、少なくとも全くの誤りではなかった。

「イチノセ！ 右側面の魔法戦士部隊が魔法陣作ってる！」

「了解、阻止する！」

市之瀬は攻城のために大規模な魔法攻撃を企図しているらしい、敵の魔法戦士達に向けて射撃を加えた。術の途中で狙撃を受け、円陣に立っていた一人が斃れた魔法戦士達は慌てて魔法詠唱を取りやめ、部隊を安全地帯へ移動させていく。時間稼ぎにはなった。

「わうつ！？」

びゅ、と鈍い風切り音を立て、市之瀬の横を矢が飛んでいった。

布陣完了した攻城側の弓兵隊が支援射撃を開始したようだ。

「しゃらくせえ！」

市之瀬は射撃の指揮を執っている敵の将校を即座に撃ち倒した。ジャキン、とボルトを操作する音が続く。

たった一丁の狙撃銃でできることなどたかがしれている。こんな大軍を前に、たった一人で何ができるといふのか。

だが、市之瀬は諦めなかった。ここで戦うと決めた。ここで守ると決めた。

そして、側にはラロナがいた。恐れていては始まらない。ほとんど意地だ。

「城壁に上げるな！ 塀際で阻止しろ！」

カルダが無数にかけられる敵の梯子を見て部下に檄を飛ばす。

既に、守備側の弓や投石で阻止できる勢いではなかった。ほとんど無傷に近い状態で敵は城壁に取り付き、門には樽に詰めた爆薬を仕掛けようとしている。

市之瀬は身を乗り出し、樽を持って城壁に接近する敵の工兵を狙撃する。いや、狙撃したのは工兵ではなく、その爆薬を詰めた樽だった。

次の瞬間、周囲を巻き込んで樽が大爆発を起こした。

その爆発で、敵の攻勢が一時的だが弱まる。

また、敵の損害が目に見えたため、味方の士気が高まった。

「帝国の間抜け共め！ こちらには？ 竜殺し？ のイチノセ殿がいるんだぞ！」

「百回来たって負けるものか！」

歓声を上げながら守備兵達が眼下の敵に対して叫んでいた。

だが市之瀬は撃ち尽くした銃に慌てて弾薬をリロードするのに忙しく、その声に耳を傾ける暇がない。

「あぐっ！？」

隣で弓を構えていた味方が敵の矢に当たって倒れる。

「右側面が手薄だ！ 侵入を許すな！」

カルダが叫ぶが、時既に遅く、梯子を登って来た帝国兵が遂に城壁の上に雪崩れ込んで来た。元より、守りきることなどできないことが前提の戦いだっただけだ。

弓兵が主だったのが災いし、その場にいたマリースア兵は黒騎士

の手にする長剣に次々と切り伏せられていく。騎士の接近戦での強さは恐ろしいまでのものだった。

「退け雑兵共！ 貴様らを切っても名誉にもならぬわ！」

前線指揮官だろうか、歴戦の勇士といった風格のある黒騎士が前へ出た。守備兵側はおもわずその気迫に気圧されて後退る。

「全員伏せろお！」

市之瀬は味方に向かって叫ぶと、雑囊から何かを取り出して敵に向かって投げつけた。

「ふん、舐められたものだ。鉄の礫^{ついで}を投げつけただけで我らが怯むとでも……」

足下に転がった鉄製の丸い何かを見やり、敵の黒騎士は小馬鹿にした表情を浮かべる。

それが、安全ピンの引き抜かれた手榴弾だと理解できるはずもなかった。

ドオン！

破片をまき散らしながら、手榴弾が炸裂し、城壁へ侵入して来た黒騎士がまとめて吹き飛んだ。

突然の破裂音と爆風にマリースア兵も度肝を抜かれている。

「い、イチノセ殿がやったぞお！」

「怯むなあ！」

だが、それはすぐに歓喜に代わっていた。得体の知れない魔法を使う、竜を倒した戦士が味方にいることを改めて実感したからだ。勝てるかもしれない。そのわずかな希望にすがって。

「畜生！ 完全に白兵戦の距離じゃねえか！」

しかし、当の市之瀬は焦るしかなかった。単発式のスナイパーライフルの出番などもはや存在しなかった。彼はライフルから9？拳銃に持ち替え、こちらからも梯子をかけて登ってくる敵兵に向かって連射する。手榴弾の安全ピンを抜くと、城壁の根本に張り付いている敵の一団に向けて放り出す。

爆音と悲鳴が聞こえるが、それを確認する余裕もなく空になった拳銃のマガジンを交換する。

と、背後に黒い影が差し込んだ。

「え」

彼が振り返ると、そこにはブロードソードを手にした敵の姿があった。そして、その剣を振りかざし、振り下ろそうとしているのは他でもない自分だった。

「イチノセえ！」

ラロナの絶叫が聞こえ、ごり、と鈍い音がした。

すると、敵の身体がぐらりと揺れ、そのまま地面に倒れ伏した。そこには、短剣を全体重をかけて刺突したラロナの姿があった。

「大丈夫か！？」

「ラロナ伏せろっ！」

彼女の問いに答えようとせず、突然に市之瀬は彼女に向けて拳銃を構え、トリガーを引いていた。

「わっ!？」

ラロナが身を竦める。

彼女の後ろで、槍を手にしてこちらを狙っていた敵兵が9?パラベラム弾を三発受け、仰け反って転がる。

「俺から離れるな!」

「そりゃこっちのセリフだったの!」

城壁の上は阿鼻叫喚の乱戦状態となっていた。

あちこちで剣戟の音がかき鳴らされ、悲鳴と怒号が飛び交っている。

だが、数の上でも強さの上でも、守備側が劣勢なのは目に見えて明らかだった。

「散るな! 集団で戦って押し包め!」

カルダが必死になって部下に指示を飛ばすが、そもそも弓や投石用のスリングしか持っていない兵すら多い中では連携が難しかった。

「ダメだ! この状態でライフルなんか撃ったら味方にも当たる!」

市之瀬は狙撃銃を手にしようとするが、この乱戦の中では無用の長物であることに歯噛みした。遠距離からの狙撃のために作られたスナイパーライフルなどを至近距離で撃てば、高速スピンののかかった弾丸が敵を貫通してなお、味方の背中まで貫いてしまう危険があった。

「こんちきしょ！ これでも喰らえ！」

最後の手榴弾を手にすると、黒い絨毯のように眼下を埋め尽くすようになつた敵の大群の中へと投げ込む。もはや、手榴弾程度の破壊力では焼け石に水だった。

「敵は小勢だ！ ？ 見えない矢？ も恐れるに足らん！」

敵の指揮官の叫びが聞こえる。

市之瀬は悔しさに表情を強張らせるが、もう単発式のスナイパーライフルを振り回している余裕はない。

「イチノセ殿！ ここはもうダメだ！ 放棄して撤退しよう！」

カルダは戦略的撤退を決意していた。

ここで玉砕するつもりでいたが、遅滞行動を取ることと敵に出血を強い、時間を稼ぐ方がより現実的だと判断したのだ。

「で、でもこの状態で撤退なんてできるんですか！？」

「やるしかない！ ここで皆殺しになるよりはマシだろう！」

違いない、と市之瀬も思った。

後がないとはいえ、ここで全滅した方が後がない。

それに、もしも久世三尉がいる中庭まで撤退できれば、ヘリにはまだ武器がいくらかあったはずだ。それが手に入れば、自分はまだ戦える。久世三尉も、身を守るためには戦いに参加するしかないはずだ。

「中庭まで退くぞ！ 生存者は仲間と協調して退却しろ！ 一人で

行動するな！」

カルダの命令に応じる声は少なかった。
既に守備隊は壊滅状態と言っている状態に追いやられていた。あ
ちこちで戦いとも呼べない一方的な虐殺が起こっている。

「くっ……もはや、これまでなのか」

カルダが疲れ切った表情で戦場を見渡した。
と、

「はっ!？」

頭上を、巨大な影が横切った。

オオオーン!

「竜騎士団まで……!？」

カルダは絶望の象徴を見るかのようにその生き物の姿を凝視した。

「カルダ団長っ！ 危ない！」

ラロナの悲鳴のような声が彼女を引き戻した。

横を見ると、そこには白い体表をした氷結竜が、味方の死体を踏
みつけながら城壁に降りたっていた。

ふしゅう、と凶悪な牙ののぞく口から冷気を漏らし、氷結竜は目
の前のカルダを捉えていた。

ずん、と鈍い音が竜が一步踏み出すことに不気味に足下に響いた。

「ふっ……貴様が私の、死か……」

カルダはとてつもない諦観に襲われた。戦う意思よりも、身を委ねる方が良いと思ってしまう。無駄なあがきよりも、潔い死の方が貴族には似合っている。ここへ来てもなお、自分は自分の死に方にまで貴族の美学を求めようとしている。そのことが悲しかった。

「ちつくしよお！ てめえがへりを落としやがったんだなあ！？」

市之瀬は狙撃銃を構えてカルダを庇うように前へ出ていた。

「イチノセ……殿……」

彼女は呆然と彼の背中を見つめた。

自分よりも小柄なこの少年のどこにそんな勇気が備わっているのか、そう思えるような小さな背中だった。

「カルダさん！ 早く味方を連れて撤退するんだ！」

「え？」

「あんたに死なれたら、俺どうやって懲戒免職させられるの止めてもらえばいいんすか！？ 早くっ！」

「あ……」

彼女ははっとした。

彼は、諦めていない。

異界の戦士のこの少年は。

絶対の存在、竜を前にして、彼はまだ、諦めていない！

カルダはぐつと齒を食いしばった。

「分かった！」

彼女の返事と共に、市之瀬は狙撃銃のトリガーを引いていた。

竜の背中に乗って絶対の存在と偉そうにしている竜騎士が、突然の狙撃に血を吹いて転げ落ちていくのが見えた。

「イチノセツ！」

ラロナの悲鳴。見ると、そこには氷結弾をチャージし顎を大きく開いてこちらを皆殺しにしようとしている竜がいる。主人を殺されて逆上しているらしかった。

「うわぁぁぁぁ！」

市之瀬は素早くボルトアクションを起こした。ボルトオープンと共にバネで排出された空の薬莢が城壁の石畳に転がり、チリンと小気味良い音を奏でる。再びボルトを押し込み、次の弾丸を銃身の中へ装填、射撃体勢を取る。そのわずか二、三秒の時間が永遠に感じられた。

口の中の柔らかい部分を狙い、彼は絶望的な敵を相手に戦いを挑もうとする。

そして、市之瀬がトリガーを引き絞り、竜が氷の塊を吐き出そうとした瞬間だった。

ドシュ、と何かが突き刺さるような音が、いや、衝撃が周囲に響いた。

竜の後頭部から口の中に向かって、何か槍のようなものが突き立っている。

一瞬、その光景を認めた敵味方の兵士達の目前で、氷結竜が巨大な爆発を起こして消し炭になった。

「うわぁ！？」

市之瀬は爆風にそのままひっくり返っていた。
カルダは身を伏せ、なんとかその場に踏み止まる。
と、頭上を巨大な影が再び横切った。

（敵の竜……？ い、いや、あれは……？）

彼女にはそれが何なのか表現することができなかった。

「あれは、何なの？」

素直に疑問を口に出したのは、ラロナだ。
市之瀬は空を仰ぎ、そこに飛んでいる物体を見て思わず叫んでいた。

「ロングボウ・アパッチ！？ 戦闘ヘリだ！？」

ヘルファイア対戦車ミサイルと、30？チェーングンを備えた、
世界最強のアタック・ヘリが、竜の飛び交う空に飛び込んでいた。

第7章 イージスの盾

「何だ！？ 何が起きた！？」

リヒャルダは目の前で起こったことが一瞬理解できなかった。

いや、今も理解できていない。

氷結竜が一撃で斃された。常識的に考えて、そんなことはあり得ない出来事なのだ。

この戦いの中で違和感を抱く局面は幾度かあった。だが、今のこの出来事は違和感を通り越していた。

そう、これは？ 異変？ に他ならなかった。

今、自分の目の前では、何か大きな変化が起きている。分かるのはそれだけだった。

「ぬっ！？」

と、上空を何かの影が横切った。

聞いたこともない奇妙な羽音を響かせ、疾空竜のように早く空を舞う？ 何か？。

「あれは……何なのだ！？」

彼女は空を飛ぶそれが生き物であるとは思えなかった。だが、機械だとも思えなかった。

あまりにも彼女の想像の域を超えた形状をしていたからだ。

鳥には見えない。かといって竜でもない。一番近いのは虫だろうか。だが、虫にありがちな甲殻や足の節のようなものは見当たらない。虫にしては洗練された形をしている。

戦闘ヘリコプターという戦うために特化したヘリの形は、この世界の人間にはまさに「異形の物体」に他ならなかった。

「追え！ 我が竜を倒したなればあれは敵だ！」

リヒヤルダの檄に、待機していた竜騎士が颯爽と相棒の背に飛び乗ると、手綱を操って空へと駆ける。

『こちらラコタ2。ラコタ1、背後に敵機の姿があるぞ！』

二機編隊を組んでいた陸上自衛隊戦闘ヘリAH64D？ロングボウ・アパッチ？が、無線交信で状況を確認する。

撃墜された偵察ヘリに乗っていた生存者らしき隊員を高倍率望遠鏡システムで見えてきたのは奇跡だった。そして、彼を守るために、ヘルファイア対戦車ミサイル一発を発射。

？竜？を撃破した。

そして、今はその竜の仲間らしい怪物達に追いかけていた。強力なターボシャフトエンジンでの最大飛行速度に追いつがって来る。驚異的な生物だ。

パイロットは焦りながらも最善の判断を下そうとした。

『ラコタ2、ダメだ振り切れない！ 援護願えるか？』

『ラジャー、SAMを使用する。敵機と距離を取れ！』

『畜生！ ドラゴンと空中戦なんて聞いてねえぞ！』

列機を救助するため、一機のアパッチが踊り出た。

アパッチは本来アメリカ軍の戦闘ヘリだが、ライセンス生産の日本のアパッチには独自に国産の91式空対空ミサイルが4発装備されている。そのため近距離であれば敵戦闘ヘリ・あるいは護身程度に敵戦闘機との交戦が可能だ。

「まさかこんな化け物相手に使うなんてな！」

コックピットでガンナーが叫び、ロックオンした竜に向かって発射レバーを引く。

パシユン、と短いロケットモーターの飛翔音を響かせ、スタブウイングから放たれたミサイルが、あっという間に音速を超えて竜の一匹を追尾する。

竜が飛ぶ空は竜に服従する。

そう伝説に謡われてきた空は、その瞬間、覆された。

ミサイルの炸裂に、竜の背に乗っていた竜騎士は即死、竜自身も翼を破片にズタズタにされてきりもみ状態になって市街地へ落下して行った。

「な……あ……！？」

リヒヤルダはその戦いを見た瞬間、絶句した。

この戦争は、継承帝国軍のこれだけの戦力をもつてすれば半日で終わるとも言われていた。そして、リヒヤルダにもその自信があった。帝国が生まれてより今までの歴史の中、幾度となく繰り返されてきた戦いの中でも取るに足らないありふれたものであるはずだった。

「……マリースアめ、もしか冥界の魔王とでも契約を結んだか？」

リヒヤルダは、マリースア自身が何かの力を得たとは考えなかった。その予兆も、情報もなかったからだ。となれば、何か別の要素。つまりマリースアが何らかの特別な存在を味方につけたということだ。半ば当てずっぱうの推論だった。

「冥界との扉は継承戦争の折に封じられたはずでございます」

耳障りな男の声がした。いつからそこにいた、とあの虫の羽音よりも不愉快に感じる。

「そんなことは知っている。ならばあれは何だ？ この戦いは何かがおかしい！」

「さあ、私には分かりかねますな」

「ならば下がっておれ！」

激昂したりヒヤルダがゲンフルを睨み付けた。
その時だった。

「しょ、將軍っ！？」

部下の叫び声が響き渡る。

「何事だ！」

振り返ると、部下が全員、海の方を見ていた。

ただ、呆然と。負傷兵までもが。

燃え上がる都の光に照らされ、赤く染まった海。

そこに、？何か？が浮いていた。

「何だ……あれは……？」

それがこの世界の人間が目にすることはありえない存在。

交わることのなき世界に存在する、日本という国の戦闘艦である
ことなど理解できようはずもなかった。

だが、都の炎を反射して赤く揺らめく船体は、それが戦うために

ある船であることを本能的にリヒヤルダに察知させた。

「ふっ……なるほど、奴らを？呼んだ？のか」

リヒヤルダは直感的にそう判断した。

覇道突き進む帝国の軍人として、今この状況で見極めるべきはただ一つ。目の前の存在が敵か味方かどうかだけだった。状況から判断すれば、あの異形の船も敵であるのは当然だった。

「竜騎士団の集結は完了しているか？」

彼女は傍らの老将に尋ねた。

「はっ！ あの虫も飛び去りました故、黒竜騎士団及び氷雪騎士団のほぼ全力が集結済みでございます」

「作戦変更だ。全竜騎士団を投じてあの船を沈める」

「し、しかし……」

「奴ら相手に戦力の逐次投入は危険だ。一気に片を付ける！」

彼女が檄を飛ばすと、竜騎士団への出撃を告げる角笛が吹き鳴らされた。

待機していた竜騎士達が、その音に機敏に反応する。

「出陣ー！」

「団旗をかざせえ！」

その音色は、翼を休めていた数十匹の竜を興奮させ、猛々しい咆哮が地を痺れさせた。

戦いに喜びを見出す気高い竜達が、敵を求めて翼を羽ばたかせた。時空を超えた戦いが、始まるうとしていた。

「イージス艦だ！？ 助けが来てくれた！」

市之瀬は湾内に現れたそれを見て快哉を上げていた。
海上自衛隊の船がここまで来てくれた。それがこんなにも心強い
とは思わなかった。

「いーじす、かん？」

隣でカルダがぼかんと口を開けて湾内に現れた巨大な船を見つめ
ている。

それは他のマリースアの兵士達も同様だった。

戦闘ヘリと竜の空中戦の後に今度は見たこともない巨大な船が現
れたのだ。まるで夢を見ているような感覚なのかもしれない。

言うなれば、現代世界でいきなり頭上にUFOが現れても、一体
どうすればいいのかなどほとんどの者がすぐには分からないのと同
じなのかもしれない。

「あつ！ 敵の竜騎士団がつ！？」

ラロナがはつとして叫んだ。

命令伝達の角笛の音色の後に、とんでもない数の竜が、猛々しく
咆哮を上げて飛び立って行くのが見えたのだ。

マリースア兵達は震え上がった。

だが、攻撃目標はどうやらここではないようだ。

やられた竜達の仇討ちの方が先らしい。竜の大軍は編隊を組んで
海へと向かっていく。

それは勇壮で、そして恐怖の襲来のようにマリースアの人々には

思えた。

だが、その先には何かがいる。

灰色の、巨大な船。

一体どこの船なのかも分からない。

帝国軍が向かっているということは味方なのだろうか？

希望か絶望か。

しかし、一つだけ分かることがあった。

この戦いが、おそらく普通のものではないということ……

イージス護衛艦？いぶき？は速力を上げて艦隊から離れ、一足先に湾の中へと入っていた。

イージス艦の最大の強みは本来、あらゆる敵の射程圏外からミサイルを撃ち込むことができるアウトレンジ能力である。湾の中まで進入するという接近は必要なはずだった。

だが、蕪木は敢えてそれを行った。海軍という存在は、歴史的にその船を？見せる？ことによって相手国に対して抑止力となる場合が多かった。純粋な戦術ではなく、この異世界においてはそういった直感的な？威容？が大事だと判断したのだ。

それは同時に、敵に狙われる危険性を上昇させる行為でもあったが、陸自の隊員だけを危険な敵前にさらす方が、海自指揮官としては許せないことだった。

蕪木は艦内奥深くにある戦闘情報センター^{CIC}に降りていた。

窓はなく、照明も薄暗い室内には、レーダースクリーンや各種コンソールなどの機械が所狭しと並んでいる。

ここはハイテク戦闘の要とも言える場所で、イージス艦のレーダー、ソナーといったあらゆる探知装置の情報確認から、主砲やミサイルなどの火器管制に至るまで全ての操作・指揮が可能である。

蕪木がレーダースクリーンを見つめていると、一気に光点が増え

た。

それが？敵？が飛翔したからだというのはすぐに理解できた。

「蕪木司令！ 国籍不明機の出現を確認しました！ 数、対空目標
およそ五十機！」

「……機じゃない、匹だな」

蕪木は皮肉な笑みを浮かべた。

部下に余裕を見せて安心させたかったが、おそらく自分の笑みが
引きつったものなのは丸わかりだろう。

そう、これは自衛隊創設以来初の？実戦？なのだ。

蕪木は迷った。

迷わないはずはなかった。

日本という国が半世紀以上守り続けてきた不戦の誓いを、自分達
は壊してしまうのだから。

「加藤二佐」

彼は傍らに立つ自分の右腕の男を呼んだ。

「はい」

「我々がやろうとしていることは、正しいのか？」

首席幕僚・加藤はしばし押し黙った。

「……答えのない話であると思います」

「答えがなくては困る」

「我々は国連軍です。ならば不正なる侵略により虐殺の危機にある
人々を救う義務があります」

「だが、安保理の決議も日本本国からの許可もない」

「ですので、法的に正しい行いは、極端なところ、あの国の人々を見捨てることです」

「……他に手は？」

「我々は護身措置として既に？継承帝国？と呼ばれる勢力とは交戦状態にあります。交渉は困難であると判断します」

交渉できたとして、彼らが退く可能性がゼロに等しいことくらい彼らにも想像はついた。

「国連軍として、あのマリースアという国の一般市民を救うためには、戦うしかないということか」

先刻、ヘリ搭載艦にやってきた巨大な鳥には、あの国の人間に救われたヘリの副パイロットが乗せられていた。この窮地にあつて、彼らは見ず知らずの日本人を救ってくれたのだ。生存している久世二等陸尉と、その部下である市之瀬二等陸士も手厚く迎えられているとメモが残されていた。

そんな国の人々を救いたいという気持ちは確かにあつた。

加藤が、普段の冗談のように生きている彼からは想像もつかない真剣な表情で言った。

「ボスニアでは国連軍の目の前で5000人が殺され、ルワンダでは同じく30万人が殺されました。我々も、そんな無力な国連軍であつても文句を言われる筋合いはないかもしれません」

「……お前はそれで、納得できるのか？」

「私情を挟むことは立場上できません。ですが……」

加藤はメガネの位置を直した。

「この平行世界へやってきた今、独自で判断せねばならない以上、

その私情は直接判断に関わるものではないかと思われます。どの道、この世界で戦乱に巻き込まれない保障などどこにもありません」

あの国を救って、恩を売るつもりか。

蕪木は加藤の言葉の裏に潜んだ深層心理を見据えて背筋が寒くなる。

この男は、時折驚くほどに計算高く、冷静な判断を見せる。だからこそ、信頼できた。

「いいだろう……」

蕪木は決断した。

「我々は国連軍として、急迫不正の侵略を受けているマリースア国民を救護するために武力を行使する」

蕪木の言葉に、CICの中で頷く隊員と、複雑そうに顔を見合わせる隊員の両方がいた。

だが、それはあくまで自分達自衛隊が自衛隊たり得るための葛藤の有無によるものだ。

侵略を受けている人々を救うことに対して、異論はない。

何より、自分達の仲間が攻撃され命を落としている。目にももの見せてやるという単純な怒りもあった。

「目標群、真っ直ぐに本艦に向けて接近中です！ 最短目標との距離、約6マイル！」

「司令、指示願います……！」

兵器使用を統括する砲雷長が蕪木に指示を請う。

イージス艦の戦闘距離としては、あまりにも近いのだ。もはや一

刻の猶予もなかった。

蕪木は砲雷長に命じた。

「対空戦闘用意」

砲雷長が部下に叫ぶ。

「対空う戦闘用おー意！」

日本海軍の時代からの伝統である独特の抑揚の号令に、CICの隊員達が戦闘準備を開始する。訓練として、身体に染みつくほどに習熟した動作である。

「我が方の戦闘能力を見せつける。攻撃は、半自動モードにより行う。敵目標群の戦闘能力の喪失を目的として迎撃せよ。向かって来る敵は全て撃ち落とせ！」

乗組員達がざわめいた。

砲雷長も、普段温厚極まりない蕪木の言葉とは思えない、過剰とも言える攻撃命令に耳を疑う。

「敵は本気だ。こちら本気でなければ意味がないのだ」

蕪木は自分に言い聞かせるようにそう言った。

加藤の報告を聞く限り、また、ヘリを問答無用で撃墜した敵の心理を考えた場合、生半可な戦闘は返って危険に思えた。

敵は航空戦力のほぼ全力をこの艦に差し向けている。つまり、敵の指揮官は我々を全力で沈めるつもりなのだ。中途半端な攻撃で退くとは考え難かった。

ここは戦場、そして敵は平然と他国を侵略し、殺戮の限りを尽く

す本物の軍隊なのである。

密かに、蕪木は皮肉げに笑った。

本物の軍隊相手に、？軍隊もどき？の我々がどこまでやれる？

「……了解しました。接近してくる？敵機？は全機叩き墜とします
！」

砲雷長は蕪木が浅慮で命じているわけではないことを確認すると、腹を決めた表情で部下に命令した。

「主砲及び短距離ミサイル、スタンバイ！」

同時に200以上の目標を探知・捕捉し迎撃可能なイージス・システムのコンピュータが、向かってくる敵の距離・速力などから脅威度判定を行い、優先攻撃目標の算定を開始した。

空中では氷雪騎士団の精鋭二十六騎と黒竜騎士団の二十四騎が隊伍を組んでいた。

五十騎もの竜が空を舞う姿は壮観の一言だった。普通ならこの威容を見るだけで、白旗を掲げる敵もいることだろう。

そう、普通なら。

竜騎士エリヴィラはその中で、改めて湾の中に浮かんでいる正体不明の船を観察した。

あれを船と形容していいものか迷う。船にしてはマストもなければ帆も張っていない。だが、それでもまるで風よりも速く進んでいた。おそらく、魔導機関のようなものを使用しているのだろうが、船にそんなものを積んでいるなど聞いたことがなかった。

「それにしても何て大きなのかしら……」

彼女の常識からすると、その物体は船というより岩島のような印象を受けた。帝国軍の巨大な軍船を目にしたことがあるが、その数倍はあるだろう。

「エリヴィラ、あの船ひょっとして鉄でできてるんじゃないか？」

戦友のアルノリドが熊のような顔に、お調子者の表情を浮かべて軽口を叩いてくる。

そこそこの家柄の帝国北方貴族出身ということだが、見た感じではただの酔いどれた山賊にしか見えない。戦場でもいつも軽口を叩いてばかりで、上官から怒られてばかりいる。それでも、自分と同期で選抜された間柄もあり腐れ縁が続いていた。

「鉄が水に浮くなんて初耳だわ」

彼女は戦友に涼しげな表情でそう答えた。

あれだけの大きさの船を浮かべて、しかも帆を張らずに動かすのは確かに驚くべきことだ。しかし、鉄船などという鈍重極まりない船があそこまで速く動くことなど不可能だ。つまり、あの船はハリボテが船体の大半を占めている無様な虚仮威しに違いない。

「だがありゃあ木でできてるようにも見えんぜ？」

その船は、まるで乾いた灰のような色をしていた。継承帝国の水軍の中にも、敵を恐れさせるために船体を黒や赤に塗っている艦はあるが、灰色など聞いたことがなかった。船体にしても、まるで子供が積み木で角張ったおもちゃ船を組み立てたような形だ。一見すると、趣味が悪いようにしか見えない。

それが、ミサイル戦における海上での迷彩やステルス効果を狙ったものだと、彼らには理解できるはずもなかった。船というものが身を隠す必要に迫られる戦いが基本的に存在しないからだ。

「馬鹿馬鹿しい、ただのハリボテよ。私達が全力出撃するまでもないわ」

彼らには自信と誇りがあった。この世界で最強とも呼ばれる竜騎士であることに。

この戦役における黒竜一騎と氷結竜二騎の損害は少なくはない。だが、苦しい戦いの中で一騎二騎を失うことは歴史上ないわけではなかった。

加えて、これだけの数を揃えた上での敗北は皆無である。そのため、彼らの表情には明らかな余裕がうかがえた。

「はっ！ それもそうさな。だが見るよ、陸じゃ友軍もマリースアの連中も俺達に釘付けになってるぜ」

エリヴィラは振り返ってそれを確認した。確かに、陸では戦闘は膠着状態になっている。そして、皆この竜騎士団の雄姿に見とれていた。

悪い気はしなかった。相手があんなハリボテ船一隻なのが不満だが、リヒヤルダ將軍の竜騎士団を利用した作戦は見事なものだった。あのハリボテを海の藻屑にすれば、抵抗している敵軍も意気消沈するとお考えなのだろう。

彼女は北方人女性特有の雪色の髪を掻き上げた。

「ふっ……これだけの竜騎士が集結するのは誰だって珍しいわよ。私だって陸にいれば見物しているわ」

「観客が多いのに越したこたあねえ。お、団長が先陣を切るみたい

だぜ」

帝国軍竜騎士団の伝統、指揮官自ら切り込む戦場の美德である。団長は滅ぼした国が十を超えることが自慢の老将だった。若い頃に戦いで片眼を失い、今は眼帯をしているが、それが返って歴戦の強者といった風貌を作っていた。部下からの信望も厚く、彼が参加した戦には一回も負け戦がないと伝説になっている。

「我に続けいつ！ 帝国の精鋭達よ！」

「継承帝陛下万歳！」

指揮官クラスの四騎が一齐に速力を上げて敵に突っ込んでいく。黒竜騎士団もそれに続くように指揮官達が急降下していった。その様子を、？いぶき？のＣＩＣでは肉眼ではなくフェイスドアレイ・レーダーによって探知していた。

「目標群ブラボー、本艦に最接近！ 迎撃優先を具申します！」

いよいよ来たか。

蕪木は大きく深呼吸をした。

そして、意を決して命じる。

ここまで来れば、最早後には退けない。

「了解……迎撃を、許可する！」

その短い言葉は、自衛隊が創設されて半世紀以上、一度も発せられたことのなかった禁忌の言葉だった。

攻撃命令という名の、決して発しては……発せられてはならないもの。

だが、それを受けた以上、この船はそれに従う。

この船は、他でもない戦うための船なのだから。

「対空戦闘、CIC指示の目標、主砲、撃ち方始めえ！」

コンソール横に備えられた、ピストル型の発射装置を握った乗組員がトリガーを引く。

攻撃指令を受けた艦首に搭載されている127？速射砲は、砲塔を素早く旋回させると、自動装填されていた砲弾を即座に目標に向けて発射していた。

その砲炎は、彼らにも見えていた。

「大砲を積んでいるのね……」

その時、エリヴィラはさほど驚かなかった。

見たところ、大砲の数はたったの一門である。

海賊と一戦交えた経験があるが、その時に十隻を超える海賊船から大砲で撃たれたことがある。しかしその時は、一発たりとも命中しなかった。そもそも、大砲など空の相手に向けるようなものではない。しかも、大砲を命中させるのにこの距離はあまりにも遠すぎる。

「敵も必死ね」

相手はこちらに恐れをなし、なりふり構わず当たらない距離から大砲を撃っている。そう彼女は判断した。

彼女は、主砲がイージス・システムによってコンピュータ制御され、目標の未来位置を予測、偏差射撃しており、更に発射された砲弾が近接信管を弾頭に搭載した対空砲弾であることなど、知る由もなかった。

次の瞬間、氷雪騎士団の団長の騎乗する竜の鼻先で、127？砲

弾が信管を作動させ炸裂した。凄まじい衝撃波に竜の首が消し飛び、四散した爆炎が騎士団長の身体を焼き尽くした。

「あ……え……?!」

彼女は自分の目の前で起きたことが一瞬信じられなかった。

「団長ーっ!」

部下達が、父のように慕っていた上官が命を落としたことに愕然とする。

すると、指揮を引き継いだ将校が、隊旗を掲げて士気を鼓舞するように躍り出た。

この見事な連携と士気の高さは、彼らがいかに精鋭部隊であるかを如実に語っていた。

「おのれ! 我ら竜騎士団に傷を負わせた償い、その命で償うと知れ……」

だがその言葉を遮るように、将校の竜が爆炎に包まれた。見ると、船の大砲が再び砲撃している。

（嘘!? 大砲が何故そんなに早く次弾を!?)

大砲は数人がかりで砲口から火薬を詰め、丸い砲弾を込めねばならないはずだった。ほんの数秒で次弾を発射するなど常識外である。更に数秒後、自動装填装置で再び砲弾を装填した127?速射砲が火を噴く。

その驚きの答えも見つからないまま、今度は彼女の直属の上官が火だるまになって海に落下していった。

「まぐれ当たりじゃねえのか!？」

アルノリドが血相を変えた。

明確に、自分達は？狙われている？のだ。

そうしている内にも、次々と船の大砲が砲撃を繰り返し、その度に味方が吹き飛んでいく。

「クソ！　ありや人間業じゃねえ！」

アルノリドの言葉は皮肉だったが、事実、イージス艦の54口径127？速射砲は完全に自動化されていた。照準から発砲、次弾の装填まで全自動である。それ故、人間にありがちな能力による射撃間隔のバラつきや命中の誤差もなく、そして、躊躇いさえ存在しない。優先攻撃目標に対し、最短時間での攻撃を繰り返すのみである。それが、戦闘機だろうと竜であろうと関係はない。

竜騎士達は、今まであらゆる敵と戦ってきた。魔物に反乱軍、侵略した国の正規軍、山賊に海賊、時には人外的能力を得た聖騎士とも戦った。だが、その敵はあくまで生身だった。しかし今、彼らは機械そのものと戦っていた。

「大砲は一門だけよ！　散会して襲いかかれば狙いが追いつけないはず！」

エリヴィラはこの状況にあって、冷静な判断力を失っていないかった。竜騎士として幾多の戦場を駆けてきたのは伊達ではない。

アルノリドも頷く。

「そのような、よし、散会だ！」

竜騎士達は、家族のように意思の通じ合った戦友同士、高度な連携を見せていた。

しかし、その連携さえも、レーダーに逐一探知されている。

イージス艦の装備する三次元レーダーは、バラバラに動く数十の竜の動きを全て探知し、火器管制コンピューターは接近してくるであろう目標を脅威度判定し、迎撃目標に指定する。

「……冷静な敵だ」

しかし蕪木は、未知の敵と戦う状況に自分が置かれたとして、彼らほど冷静に戦うことができるか自信はなかった。武人として、今レーダースクリーン上に写っている敵兵士達に敬意すら覚える。それと同時に、やはり気を抜けば首を狙われかねないことを理解する。彼は、自分達が生き残るために命じた。

「発展型^{ESSM}シースパロー、主砲の対応範囲外の敵に対し指向！」

イージス艦のメインウェポンである対空ミサイルの射撃命令を受け、砲雷長が叫ぶ。

「垂直^{VLS}ミサイル発射装置解放！」

ミサイル士が即座に応じた。

「誘導^{イルミネーター}電波照射装置配分！」

ミサイル一発一発に、それぞれの敵を撃墜するのかをデータ配分する。

ミサイル士が叫ぶ。

「シースパロー発射用意よし！」
サルウォー
「一斉射撃！」

ミサイルの発射パネルが操作され、艦首と艦尾の甲板に組み込まれているVLSセルがハッチオープンした。そして、セル内に格納されていた艦対空ミサイル・ESSMがロケットブースターを作動させる。

「何よあれ！ 勝手に爆発した！？」

エリヴィラが目を見張る。

こちら側は何も攻撃など加えていない。まだ一騎たりともあの船には到達していないのだ。

一見すると、VLSでミサイルを一斉発射した光景はまるで艦が炎に包まれているかのように見える。だがそれは、ミサイルのブースターの吹き上げる炎を外に逃がしているからである。

エリヴィラはそこから、何かが飛翔するのをその目で見た。

（光る、槍！？）

それは何本も空高く飛び上がると、白い煙の尾を引きながら、一直線にこちらへ向かって飛んで来る。

本能が訴えかけた。逃げろ、と。

「ひッ！？」

咄嗟に彼女は手綱を引いた。矢を避けるのにこうした動作は珍しいことではない。

「な、なんだありや……うわあああ！？」

刹那、何かが横切る風切り音がすると、立て続けに凄まじい爆発音と爆風が彼女の隣で巻き起こった。

アルノリドが餌食になったのだ。彼女に分かるのはそれだけだった。

体勢を立て直すと、まるで松明の炎で焼かれた夏の小虫のように、仲間の竜がばらばらと空から落ちていくのが見えた。

燃えて行く竜達の断末魔の叫び。

その光景は、狂氣的で、そしてどこか幻想的でさえあった。

これだけの損害を、これだけの短時間に竜騎士団が受けることがあり得たのだろうか。

彼女には、この目の前で起きている光景が現実とは思えなくなっ

た。
「嘘よ……こんなの、嘘……」

竜騎士はこの世界で比類する者なき絶対の強者であったはずだ。

帝国がここまでの繁栄を極めることができたのも、歴史上多くの竜騎士の活躍あつてのこと。その竜騎士が、まるで木の葉のように破り捨てられていく。こんな光景を、異常者以外に夢でさえ見る者がいたのだろうか。

大砲の音が容赦なく響き、その音の数だけ仲間が海面へと燃えて墜ちて行く。光の槍が、逃げようとする竜に意思があるかのように追いつがり、爆発して無慈悲に道連れにしていく。

そう、これは悪夢だ。夢魔が見せている悪夢に違いない。

「あ……ああ……」

彼女はあることに気づいた。

悪夢で最も恐ろしいことは何だろうか。それは、背後に得体の知

れない？何か？がいることだ。

彼女は背後を振り返った。

悪夢は、自分だけを見逃してはくれなかった。

彼女が最後に見たのは、かわされた後にプログラムに従い急旋回し、リーダー誘導により再び追尾してきたホーミング・ミサイルの姿だった。

CICの中では、各担当から冷静な報告が次々と上がってきていた。

「撃墜41を確認！」

サヴァイヴ・ターゲット

「敵残存機は本艦から距離を取り始めました」

オペレーターからの報告に、蕪木は戦闘の終結を悟った。

ミサイル攻撃によって一度に十騎以上を失い、混乱状態になった後は、ほとんどが一方的な戦闘だった。

最終的に、近接距離に接近した竜は一騎もいなかった。

敵航空戦力は完全に戦意と継戦能力を喪失。本艦周辺からの離脱を始めていた。

「攻撃一時中止、モードを手動に切り替える。警戒は怠るな」

「了解」

「過熱した砲身の冷却と、消費した対空砲弾の補給作業を急がせろ」
「はっ！」

訓練の際にも発せられる命令が終わった時、CICに束の間の静寂が訪れた。隊員達は互いに顔を見合わせる。

自分たちは戦った。砲身が過熱し冷却水を浴びせる程に砲弾を撃

ち込み、ミサイルの雨を敵に見舞った。

しかし、このCICで実感できることは、レーダースクリーン上に写っていた敵を示す光点が消失する様子だけである。ハイテク戦とはそうしたもののなのだ。

だが、隊員達は、自分達が大勢の人間を殺傷したということを知っている。だが、そのあまりの実感のなさに戸惑いを覚えているのだった。

「……まるで、演習だったな」

隊員の一人がぼつりと呟いた。

その場にいる者全員の感情を代弁した言葉だった。

「演習ではない。それを決して忘れるな」

蕪木が、自分自身に言い聞かせるように、そう口にした。

そして、彼の隣で佇んでいた砲雷長が、静かにレーダースクリーンに対して手を合わせた。

第8章 破滅を呼ぶ者

戦場に、恐ろしい程の静寂が漂っていた。
絶句していたのだ、一人残らずの兵士達が。

「こ、この……」

彼女は、震える唇を何とか開いた。

「化け物め……！」

リヒヤルダは竜騎士団の波状攻撃を受けながら、傷一つ負わずに海に悠々と浮かんでいるその物体に対して、それ以上の形容を知らなかった。

その物体の周囲には、黒焦げの竜が煙を上げながら波間に漂っている。

竜騎士団が壊滅した今、このマリースア攻略作戦は全てが失敗したと言っても過言ではなかった。地上部隊を運んだのは他でもない竜達だったからだ。他にも、輸送用に徴用した巨鳥の多くは戦闘の邪魔となるので輸送が完了した時点で撤退させていた。南伐混成軍は今や、完全に孤立した状態になった。海を隔てては、もう援軍を望むことも、撤退することも叶わない。

それよりも重大だったのが、目の前であり得ない敗北、あり得ない敵を知った将兵の士気であった。

「しよ、將軍……我らは……我らは一体何を相手に戦っているのですか!？」

「竜騎士団を……赤子の手を捻るかの如く海の藻屑にするなど。や、

奴らは何者のですか!？」

幕僚達は口々に目の前で起きたことに混乱し、彼女にすぐるよう
に答えを求めて来る。

彼らとて、リヒヤルダがその答えを持たないことなど理解してい
るはずだった。

だが、それでもすがらずにはいられない程に、五十騎近い最強の
竜騎士団の壊滅という事実は、全軍に致命的な士気低下を引き起こ
しつつあった。

「……許さぬ」

「は？」

リヒヤルダは、城門を睨んだ。

城は半分が手に落ちているはずだ。女王ハミエアの首を取るま
であと少し。

最早帰還の望みは絶たれている。ならば戦士として、戦場で倒れ
ることこそ最後の誇りだ。

例えこちらが結果的に全滅しようとも、このマリースアを滅ぼす
ことができるのなら、自分達の死には意味がある。

彼女は腰から剣を抜いた。

彼女の家々に代々伝わる、魔法力の封じられた魔剣である。

「先祖よ……どうか我らをお導きください」

まるで聖女のように彼女は瞑目した。

そして、その剣を高らかに掲げると、残存する兵士達に宣言した。

「総員我に続け！ 狙うはハミエアの首一つ！」

リヒヤルダの姿は、この絶望の中にあつて尚、色褪せないカリスマを持っていた。

彼女の声に、部下達は奮い立つ。
士気崩壊寸前であつた部隊が、彼女のその声だけで立ち直つていった。

「將軍に続け！」

「我ら継承帝国軍に敗走はない！」

リヒヤルダは集結した残存兵力全てを率い、城の中へと進軍しようとした。

だが、次の瞬間、目の前に爆音を響かせながら、あの？虫？が現れる。

しかも、一匹だけではない。何匹もの空飛ぶ巨大な虫が、自分達を見下ろしていた。

『こちらは国連軍所属、日本国自衛隊です。勝敗は決しました。武器を捨てて降伏して下さい！ 降伏した場合のあなた方の生命の安全はジュネーブ条約に基づき保障します』

虫から降伏の警告が大音量で響き渡る。

その音に兵士の多くが怖じ気づいたが、リヒヤルダだけは毅然として後には下がらない。

「ニホン国……ジエイタイ」

リヒヤルダは、その時初めて、自分が戦っている相手の名を知った。

「聞かぬ名の国だな……」

乾いた笑いが漏れる。

「そして、我が帝国軍に武器を捨てよ、か」

継承帝国が、そのような屈辱的な言葉を投げかけられたのは何回あったろうか。もしかしたら、これが初めてなのかもしれない。

彼女は自分が運命に翻弄されたことを呪った。同時に、これほど完膚無きまでに敗北を喫した相手に対して一種の敬意を抱く。

剣を胸にかざし、一礼を尽くす。

「ジエイタイとやら、貴様らなら相手にとって不足はない！」

彼女は警告を無視すると、部下を率いて城内へ強行突入を図った。彼女に続いて鬨の声が上がった。

そして、城門防衛を命令されたアパッチが武装吊り下げ翼のロケットポッドからありったけの70？ロケット弾を乱射し、機首の30？チェーニングガンを薙ぎ払う。ブラックホーク輸送ヘリのドアからは、12・7？機関銃が弾丸を横殴りの雨のように眼下の帝国兵達に浴びせていった。

遮蔽物もなく、一発の弾が数人を貫通して殺傷し、ロケット弾の爆風は容赦なく隊列を吹き飛ばした。

しかし、彼女は最後の最後まで、勇気を胸に戦い抜いた。

それが一太刀も浴びせられない結果になると分かっているにもかかわらず、軍人としての誇りが歩みを止めることを許さなかった。

そして、そんな彼女を、兵士達は信じて疑わなかった。

リヒャルダは、アパッチから放たれた70？ロケット弾の弾雨の中、自分が爆風に切り裂かれていきながらも、最後まで剣を手放さずとはしなかった。

湾内に停泊するイージス護衛艦の艦砲射撃も加わった頃、帝国軍

は再建不能なまでの損害を被った。

正門の前に立ち塞がったアパッチを突破できた兵士は一人もいなかった。

こうして、南伐混成軍將軍リヒャルダの戦死と将兵の玉砕をもって、マリースア侵攻戦におけるフィルボルグ継承帝国軍の組織的な戦闘は終結した。

ヘリ部隊が帰投し、艦砲射撃の砲撃音が止んだ後、静寂が戦場を支配していた。

城の前には、生きて動く者など存在していないかのように思われた。

砲撃とロケット弾により黒煙があちこちから上がっている。

生き残った竜騎士が地上の生存者を拾うと、空の向こうへと全力で逃走していく。

「酷え……」

市之瀬は、壊滅した帝国軍の惨状を城壁から眺めていた。この岬の上の城へ続く道には、帝国兵の死体があちこちに転がっている。

攻城戦のために密集していたのが彼らには災いした。降り注ぐ砲弾と機銃掃射の効果が最大限に達したのだ。

「終わった……のか？」

カルダが呆然と目の前で起きた地獄絵図を見つめる。

マリースアの人間は、全員一樣に放心したかのようにたった今起きた戦闘とも呼べない、近代兵器によるワンサイドウォーの結果を見ていた。

敵が殲滅された、というのは分かる。

だが、それを為したのは自分達ではない。そして、同盟国の者でもないし、ましてや勇者や英雄が現れたわけでもない。

いや、と何人かはそれを否定する。

おかしな服を身につけた、我らを救いに現れた勇者ならば、ここに一人いるではないか……

彼らの視線が、居心地悪そうな表情をしている迷彩服の少年に向けられた。

と、ラロナが一人、市之瀬に向き直った。

「イチノセ！　ありがとうっ！」

感極まったというべきか、ラロナは互いに戦場でボロボロになった姿のまま彼に抱きついていた。

「わわっ！？　何だよ？」

「……ありがとう、私達を守ってくれて」

ラロナの目には涙が溜まっていた。

彼女の上官のカルダも、市之瀬に正対する。

そして、そつと膝を折り、頭を垂れて彼に礼を尽くした。

「私からも礼を言わせてもらおう……イチノセ殿、我が国の窮地をお救いいただき、感謝する」

「え、いや、俺はただなんもできずにここにいただけで……」

市之瀬は困惑するしかなかった。

戦局をひっくり返したのは自分ではなく戦闘ヘリやイージス艦といった数百億円する最新鋭兵器であって、自分のようなダメ隊員によるものではない。

むしろ、自分は結局何もできずにいたような気がする。敵と戦ったが、守れなかった数の方がきつと多い。

「あなたは私に勇ある者のなんたるかを教えてくれた……貴族として、どうあるべきなのか、今更になって分かった」

カルダは自嘲的にそう言い、市之瀬を見た。だが、彼女の顔はどこか晴れ晴れとしている。

ラロナも、涙を拭うと、真剣な顔になって片膝を突いた。すると、周囲のマリースア兵達も同じく膝を突き、市之瀬に向かって頭を垂れた。

数百の人間が、ただ一人の自衛隊員に頭を垂れている。何とも形容し難い光景が広がっていた。

「あ、ちょ、ちょっと何すか!？」

狼狽えるのは市之瀬だ。

一体自分が何をしたというのか。彼の常識からすれば、自分は何もしていない。

しかし、命を賭して自分達のために駆けつけてくれた者は、マリースアの人々にはただ一人、彼だけしかないのだ。

市之瀬は、紛れもなくそこでは救世主の象徴としか見えなくなっていた。

「や、やめてくださいよ気持ち悪いっ!？」

今までの人生でこんな経験などしたことがない、いや、というか普通はしない。

「顔を上げてくださいってば! 怖い怖いっ!」

市之瀬はびつくりしてそう叫ぶことしかできなかった。

マリースアの人々も、そんな彼に驚いた。

普通、勇者や英雄ならば、ここで皆の心を打つ演説や、名言の一つでも投げかけてくれるのではないか？

だが、目の前の少年にはそんな雰囲気は微塵も感じられない。

それでも、皆知っていた。

彼が最後まで諦めなかったこと。最後まで戦い抜こうとしたこと。最後まで、守ろうとしてくれたことを……

「俺は、なんていうかその、自衛官として当然のことをしただけで……いや、命令違反しといて何が当然なんだってのはあるんですけど

……」

「ぶっ……」

不意に、堪えきれなくなったといった感じの笑みがこぼれた。
ラロナだった。

「あはははははっ！」

「な、何だよ？」

市之瀬が怪訝な顔を見ると、ラロナは頭を垂れていたのがバカバカしいとばかりにすつくと立ち上がった。

「なっさけない勇者サマだなあってさ！」

「ゆ、勇者あ？ 俺が？」

市之瀬はぽかんとするしかなかった。

確かにここは異世界で、彼も剣や魔法が存在するファンタジーな世界だというのは分かっている。しかし、まさか自分が、ただの下

っ端公務員でしかない自分が勇者だなどと呼ばれるとは思わなかった。

「……ラロナ練戦士、失礼だぞ」

カルダも立ち上がり、部下を咎めた。が、彼女の顔にもやはり笑みがある。

次第に、マリースア兵達は顔を見合わせると、どうやら今の自分達の礼は彼に伝わらないようだと思いついたのか、そろそろと立ち上がった。

そして、もじもじとしている市之瀬を見て思わず笑い始める。

「な、何だよ今度は笑いやがって！」

「ホント、変な奴だなって思ったんだよ」

ラロナはそう言って彼の肩をぽんぽんと叩いた。
と、その時だった。

「……おい、空が何かおかしくないか？」

「え？」

誰かが異変に気づき、海の方こうを指さす。

皆がそちらの方を向くと、確かにそこには？何か？が起こっていた。

「空が……紅い。そ、そんな、まさかっ!？」

カルダが恐怖に引きつった顔で呟いた。

「惨めな最期でしたな、リヒャルダ將軍」

ローブの男が、心底嬉しそうな口調で横たわる死体の山を見つめていた。

その中から、一本の剣を見つける。

魔剣バルムンク。リヒャルダが持っていた青い宝玉の埋め込まれた剣である。

彼女の祖先グンター伯爵は、かつて僅か百人の兵と共に東部国境のマルス砦を隣国からの侵攻から守り抜いた。英雄として帝国の中でも名高い人物だ。

これはその彼が手にした武器である。冒険者だった頃にサーラルの迷宮の中で手に入れたと伝えられる。全ての魔法攻撃に対して一定の効果を持ち、アンデッドや死霊を相手に戦っても負けはしない。ゲンフルは笑った。

そんな武器を持ち、圧倒的なカリスマを持ったりリヒャルダでさえ、あの存在には敵わなかった。

「死体も残らなかったようだ。異界の怪物共め、やりおるわ」

彼は湾内に浮かんでいる異形の船を見やる。

「クク……だが貴女の死は無駄にはしませんよ」

ゲンフルは酷薄な笑みを浮かべると、懐からある物を取り出した。それは古びた水晶の珠だった。美しく磨かれた、完全なる球体。

「私が身を置いている教団はですな、將軍」

世間話でも始めるかのような口調で、彼は煤にまみれた剣を片手

で拾い上げる。

魔力の鼓動を感じる。それはまるで自分を拒絶しているかのようだった。

しかし、彼は魔術師だった。それも、かなりのハイクラスである。壊れかけの魔剣を手にする程度の耐性は持ち合わせている。

「プロミニア陥落の際、あの国の馬鹿共がとんだ置き土産をしてくれたのを発見したのですよ」

玉座を奪うことに固執して宮廷魔術師達を丸々取り逃がした騎士団の連中のお陰です、と彼は語る。

「奴らは自分達が世界の中心だと思っていましたからな、自分達が滅ぶくらいなら世界が滅んでも構わないとでも考えたのでしよう。奴らは古文書を頼りに？有翼の民？の外道の魔法を使った。そして、あの怪物をこの世界へ呼び寄せた」

彼は水晶玉を掲げて見せた。

「そう、あやつらはこの世界の存在ではないのですよ、將軍。私は貴女方、南伐混成軍が壊滅した場合、その後始末を命じられているのです」

魔剣を彼女そのものであるかの如く、彼は語り続けた。

それは、狂気の陶醉に彩られた演説だった。

「我らはこの世界の均衡を保たねばなりません。この世界にあやつらはあつてはならぬ存在。この世界を歪ませ、混沌を呼ぶ存在なのです」

彼は未だ燻る死体の山を見た。

「貴女では結局、奴らを止めることはできなかった。なので、私が全てに決着を着けて差し上げましょう。この教団から授かった切り札でね」

水晶の珠を愛しげに見つめていると、彼は魔剣が震えているのに気づく。

強く、恐ろしい魔力がその珠には込められていた。

ゲンフルは自分の力を認めてもらえたかのように楽しげに笑った。

「ククク……分かりますかな？ これは禁忌の兵器として、継承神話に登場する破壊の魔具ですよ。？流星の目？を御伽話で耳にしたことはありませんか？ 太古に滅んだと言われる有翼の民は、これを使い星を降らせ、反逆者や蛮族共を滅ぼしたと伝えられています」

陽にかざすと、その水晶の中に何かが見えた。

まるで深夜の空のような、数多の星々と、暗い宇宙。

光の屈折さえも飲み込むその水晶の中には、宇宙が在った。

「誰もが御伽話だと信じていますが……我が教団はそうは思っておりません。何故なら……ここにあるからですよ……この水晶はその制御器だ」

彼は燃える都を岬から見下ろした。

「世界の安寧のため、国一つが消える程度で済むならば安いもの」

そして、手にしていたリヒャルダの剣を地面に突き立てた。

「私は嬉しい、私は今、世界を救おうとしているのだから」

最早、剣にしか語りかける相手もなく、彼は自分の胸の内をさらけ出していた。

「貴女は私を軽蔑し切っていましたかねえ……私も守っているのですよ、帝国を、世界をね！」

水晶を両手に持つと、彼は精神の集中を始めた。

額に汗をかいているのは、この国が温暖であるだけが原因ではない。

この魔導兵器は、彼一人で扱うにはあまりにも強力過ぎるのだ。そして、彼もそれは理解している。

「私の名は教団の中で永久に語り継がれる。帝国の精鋭でさえ倒せなかった異界の敵を、その命と引き替えに葬った殉教者としてね！」

彼は既に生還するなどというつもりはなかった。これは望むべき死。名誉の死なのである。

次第に彼の身体が震え始める。

心臓が早鐘を打ち、皮膚には血管が浮きだした。

限界まで魔力を高め、？流星の目？を制御する。

攻撃地点は、この自分自身のいる場所に指定した。

自分の命を代償とした魔力とはいえ、ここまでに強力な魔法にはまだ足りない。

彼の周囲にはいつの間にか黒い闇がまとわり付き始めていた。それは、闇の魔力が結晶化したオーラだった。それはやがて、周囲に散らばる味方の死体を貪るように取り込み始める。それは、まるで意思があるかのように新鮮な血と無念を欲していたのだった。

彼の姿は闇のオーラの中に完全に取り込まれた。
しかし、何とか制御に成功したことに、彼は無上の達成感を抱いた。

「はは、はははは！ さあ……異世界の怪物共よ、この国と共に消えるがいい！」

敵主力が壊滅した中、緊張が次第に解きほぐれていたCICの中で、突然レーダーを担当している隊員が叫び声を上げた。

「し、司令！」

「どうした」

部下の声に、蕪木は緊張感を蘇らせた。

「微弱ながらレーダーに感あり！ 大気圏外から飛来物体の可能性が！」

「何だと！？」

それが意味するものを、最初は誰もが想像できなかった。しかし、この戦時という状況下、それが何か良からぬ物である嫌な予感だけは共通して持っている。

「精密にその目標を測定しろ」

「了解！」

全方位に向けられていた三次元レーダーの電波照射を、指定方向に集中させる。周囲に敵がないからこそできる芸当だった。

「じ……これは!？」

データ解析の結果に、隊員が青ざめた顔になった。

「い、隕石です！ 巨大な隕石がこちらへ向かって落下してきています！」

「隕石っ!？」

CICが騒然となった。

自然現象であるには出来すぎだ。

隕石がこのタイミングで、それも自分達の方向へ向かって来ている。それが、何らかの人為的な攻撃であることはすぐに理解できた。そうした中、イージスシステムのスーパーコンピュータが演算結果を次々と表示していく。

隕石が落下した場合の破壊力。

演算結果が表示される。

その結果を半ば言葉を失って誰もが凝視した。

それは、核攻撃に匹敵するエネルギー量だったのだ。

自分達が今、生命の危機に瀕している。それが分かると、隊員達の顔が恐怖で引きつった。絶句と絶望が全員の心を支配していく。

どうする、どうしようもない。

誰もが互いに顔を見合わせ、今にも喚き出しそうな雰囲気だった。蕪木はそんな中でただ一人、いつも通りの冷静な口調で尋ねていた。

「ここへの到達予想時間は？」

「お、およそ20分程度かと思われます！」

「くっ……!」

ディスプレイに映し出された隕石の落下推定シミュレーションの
画像に、蕪木は歯を食いしばった。

第9章 流星の目

「？流星の目？！？ 隕石が降ってくるだって！？」

市之瀬はそれを聞いた途端、素っ頓狂な声を上げていた。

「……秘術が完成してしまった今、もう止められない」

カルダはよろめき、城壁にもたれかかった。

「……神は我々を見捨てたもつた」

彼女は乾いた笑みを浮かべた。

カルダだけではない。周囲のマリースア兵達も同様に絶望の表情を顔に貼り付けている。

そう、？流星の目？はよく知られたこの世の終わりの物語に登場する、人の手ではどうすることもできない、抗いようのない終焉の象徴だった。ある神話では、星が降る中、死後の愛を誓い息絶えた悲劇の英雄と亡国の姫の歌さえある。

空が紅い。

星が降って来る。

それは、もうどうしようもない、終わりの光景……

帝国は敗北を認めなかった。

敗北そのものを消そうとしているのだ。

「光の神よ……破滅の後の世に我をお導きください……」

ある兵士が神への祈りの言葉を呟き、そつと両手を合わせた。

それがきつかけとなり、呆然としていた者は皆、それぞれの最後を受け止め、あるいは受け止められずに錯乱状態となった。

「最後まで戦えたなら、本望かしらね……」

「い、嫌だ！ 死ぬのは嫌だあー！」

「母さんっ！ 母さあーん！」

「最後に、息子に会いたかったな……」

そこには、死が前提となった空気があった。

圧倒的過ぎる破壊の力を前に、どうすることもできない無力感。市之瀬はこんな時にどうすればいいのか分からなかった。運命をありのままに受け止める農耕民族的な日本人ならではのどちらつかずの感情だろうか。

だが、胸の中でただ一つ叫ぶ。

（美奈っ！ ああ美奈……っ！ 兄ちゃん、どうすればいいんだ！？）

ただただ、妹の顔を脳裏に浮かべ、狙撃銃を抱いてその場にへたり込む。

隕石相手にこんな銃何の役にも立たない。

彼は目をきつく閉じ、何故こんなことになってしまったのか考えてしまう。

俺がラロナを救いたいと思ったから？

艦隊がこの国の人々を救うために武力を行使したから？
なら、どうすれば正しかった？

「どうすれば正しかったんだよ！？」

市之瀬は訳も分からず叫んでいた。

そんな彼の前に、そつと誰かが腰を折って寄り添う。
ラロナだった。

「……イチノセ」

彼女はそつと彼の銃を握ったまま震える彼の手を両手で包む。

「ラ……ロナ？」

「イチノセ、お前は逃げるんだ」

「え？」

ラロナは一人、冷静な表情で彼を見つめていた。

「巨鳥を一羽、お前にやる。お前はあの鉄の船に戻るんだ。隕石はこの国を目掛けてる。もしかしたら海に逃げれば助かるかもしれない」

市之瀬は愕然とした表情で少女の顔を凝視した。

「で、でも、お前はどつするんだ……？」

「アタシはここに残るよ」

「そ、そんな、何で!？」

彼女は答えた。

「……ここは、私の国だから。私の故郷だから」

迷いは、なかった。

少女は笑った。

無邪気に、そして悲しげに。

「だから、お前も帰るんだ……どうすればいいのかなんて分かんないけど、そう、？元の世界？へ」

彼女がきゅつと両手に力を入れる。

か細い、まだ少女に違いない小さな手だった。

「帰るんだ……家族のもとへ……」

この世の終わりの最後の喧噪の中で、二人はしばらくの間、じつと見つめ合い続けた。

「これは天罰なのか……？」

レーダースクリーンを冷静に見つめていた初老の男が呟く。

海自の青い作業服に灰色のライフジャケットを身につけていることを除けば、少しばかり聡明そうな中年男性といった容姿の男。優秀ではあったが、愚直とも言える現場主義が災いしてその能力に見合った出世コースから外された幹部自衛官である。

「この世界の戦争に、武力介入してしまった……数千の敵兵を殺めてしまった、その罰なのか？」

彼はギリギリ、と強く拳を握った。

救うために戦ったはずだった。

自衛隊として部下の命を、国連軍として理不尽に焼かれ、殺されていく運命だったこの国の国民達を。

だが、その結果、敵に致命的なまでの反撃を受けることになった。

武力という手段に訴えるということは、結局こうした哀れな結末しか生まないのかもしれない。

蕪木は後悔はしたくなかった。自分の選択が間違っていないと信じたかった。

日本本国はおろか、元の世界から完全に隔絶されたこの世界で、見ず知らずの数百万の命のために、ミサイルの発射ボタンを押すという行為。傍観者として虐殺を見物するよりは、人殺しと罵られようが守るために戦う。それが誤っているとは思いたくなかった。

「いいえ。天罰などではありません」

横に、メガネをかけた男が立っていた。

首席幕僚の加藤だ。

「これは、我々への純然たる攻撃です。天罰などという主体のない何かではありません」

蕪木は毅然と断言する部下の姿に目を見張った。

「我々がこの世界で戦って、数百万のために数千の侵略軍を殲滅したから何ですか。この世界はそもそも日本の法律が適応される場所ですか？ 国連の規則が当てはめられる場所ですか？」

加藤は普段ののりくらりとした性格を感じさせない力強さで、隊員達を見渡した。

「我々是我々の判断で選び取るしかなかった。だから戦った。そこに善悪なんて存在しない。我々は侵略と虐殺を見て見ぬふりをする人でなしになるか、自衛隊という枠を、いや日本という枠を捨てて戦いに飛び込むかのどちらかしか選択できなかった！ 後者を選ん

だ方が納得がいくから選択した！　ただそれだけです！」

CICの中が、微かな機械音以外聞こえない不思議な静寂に包まれた。

隊員達は互いに顔を見合わせる。

隊員達の間にあつた、戦いに身を投じたばかりにこんなことになったという疑問が、いくらか和らいだのだ。

それは、蕪木も同様だった。

この加藤という男は、時折驚くほどに冷静で冷酷で、そして今のように理路整然と熱くなる男なのだった。

蕪木は司令官を表す識別帽を被り直し、深呼吸した。

そして、加藤と目を合わせる。

「まだです。我々には、まだやれることが残っています」

加藤は静かに言った。

蕪木も頷く。

かつて、このイージス護衛艦？いぶき？について、マスコミは半ば誇張表現も加えてこう報道していた。

「一隻二千億円！？　海上自衛隊最新鋭イージス護衛艦・大気圏外から飛来する弾道ミサイルを撃墜するためだけに必要なのか？？」

蕪木は考えるよりも、自身を取り得る手段を間髪入れずに口にする。

「弾道ミサイル迎撃モード起動」
BMD

蕪木は、静かに砲雷長に命じていた。

「は、はあっ!？」

砲雷長は彼の正気を疑うかのように振り返る。隕石の落下という常識外の状況に、乗組員の多くは冷静さを失っていた。

蕪木は、それを分かった上で、敢えて冷静さを装った。

この状況下でなら、パニックに陥った部下は、冷静な上官に無条件ですがるはずだ。そんな打算もある。

「スタンダードミサイル3、発射用意」

蕪木は焦らなかった。

まだ、自分達にはやれることが残されている。

一か八かの賭け。

だが、やらなければ御陀仏なら、やった方が良いに決まっている。
足掻いてやる、足掻き切ってやる!

「りよ、了解! SM3、スタンバイ!」

SM3は、大気圏外から高速突入して来る大陸間弾道ミサイルを迎撃するために開発された超高度迎撃ミサイルである。イージス・システム、それもBMDソフトウェアを搭載したイージス護衛艦にのみ発射が可能な最新鋭防衛兵器だが、技術的に未完成な部分があり、高確率での迎撃は難しいとされている。

それは、撃ち出されたピストルの弾丸に同じくピストルの弾丸を正面から命中させて撃ち落とす程、困難であるとも表現されている。

「ありったけ撃ち込め」

蕪木は命じる。

砲雷長が信じられない物でも見たかのような表情を浮かべた。

「ま……まさか隕石を、迎撃!?」

蕪木は無言の肯定をする。

前代未聞の試みだった。

だが彼は勝算もあると踏んでいた。

実戦では多弾頭核ミサイルだった場合、多数の目標が飛来して来ることが想定されるが、今の状況は単一目標である。更に、弾道ミサイルのようにロケット部分を切り離れた弾頭だけになって落下してくるわけではなく、隕石は弾道ミサイルに比べれば巨大だった。それは、的が大きく命中させやすいことを意味している。可能性は五分五分。

「発射用意よし!」

部下の素早いセットアップに、彼は即座に応じる。

まさに賭けだ。

賭け事は苦手な方だったが、賭けなければならない時というのが人生にはあるのだった。

「発射を……許可する!」

蕪木は胸の中で、今乗っているこの?いぶき?を信じた。

?いぶき?は、弾道ミサイル防衛を前提に建造された海自初のイージス護衛艦だった。北の核武装疑惑を初めとする緊迫する国際情勢に対応するために、最新技術を積み込めるだけ積み込んだ、日本を守る最後の盾として生を受けたのである。しかし、姉妹艦と共に日本全土をカバーする計画は、その高額な建造費用が原因で頓挫。?いぶき?は、ただ一隻、その存在意義が曖昧な高性能艦として持

て余されることになった。マスコミからは税金の無駄とやり玉に挙げられ、まるで厄介払いされるかのように今回の派遣艦隊へと回された。

悔しかったろう……いぶき。だが、今お前は多くの人間の希望だ

……

蕪木は、自分の境遇とこの船を重ねたのかもしれない。

「発射あーっ！」

砲雷長が叫ぶ。

この艦だけではない、この国にいる全ての命を賭けた戦い。

甲板のVLSセルが開き、スタンダードミサイルが空へと飛び立つて行く。

数にして10発。一気に音速の壁を越え、空を駆け上る。

多少の時間差はあれ、これだけ多くのSM3を同時発射することは通常ではあり得ない。しかし、目標の巨大さと頑強さを考慮すれば、これでもまだ不安といえた。

「SM3の発射を確認、目標到達まで210秒！」
ふたひゃくじゅう

「第一段をパージしました！」

SM3は三段式のミサイルである。打ち上げ用ブースターの初段、巡航用の二段、そして直撃迎撃用キネティック弾頭を搭載した第三段から成っている。射程距離約450?、限界上昇高度約250?。これは、宇宙空間に到達する性能だった。

レーダースクリーンに、?いぶき?から発射された迎撃ミサイルと、迫り来る隕石の双方が表示されていた。

二つは徐々に距離を縮めていき、接触するまでの時間がジリジリと減っていく。

「第二段ロケットを切り離し！ 弾頭保護カバー、解放。キネティック弾頭が起動しました！」

第三段のキネティック弾頭は、目標到達の三十秒前に第二段を切り離して起動する。相対速度秒速数千口という凄まじいスピードの中、高精度シーカーは相手の赤外線を探知し、確実に迎撃できるように進行コースを微調整する。

その間が、三十秒。

つまり、あと三十秒後に、全てが決まるのだ。

隊員は空調の効いたＣＩＣにあって、額と首筋に緊張の汗を流していた。

「げ、迎撃１０秒前……」

荒い息をつきながら、隊員が報告した。

もうスクリーン上の二つは、ぴつたりと重なる寸前だった。遂にカウントダウンの段階に突入していく。

「5……4……3……2……スタンバイ……」

机に置いた拳を強く握り、蕪木はきつく目を閉じた。

この瞬間に、自分達の、いや、この国にいる数千数万、数百万の人々の運命が決めるのを、直視することができなかった。オペレーターの叫びだけが耳に届いた。

「マーク・インターセプト
迎撃、今！」

空が、光った。

終章 最後の弾丸

ゲンフルは歓喜と苦痛の中でその瞬間を見た。

いや、見たというより、感じたという方が正しいかもしれない。

彼の身体は既に水晶をその身体の中に取り込み、まわり付く闇の怨念に人の形を失いつつあった。命を代償とした流星落としての秘術は、術者の命を単に奪うのではなく、その存在を変質させるものだったのだ。

普通なら、そうなった時点で全てが終わっていたはずだった。だが、彼の執念は凄まじく、自我を持ったまま蠢く闇の中で高笑いを続けていた。この国の終わりを、この世界へ入り込んだ異物が滅ぶのを冥土の土産にこの目で見届けたいという、歪な欲求だけを支えにして。

その彼の願いを妨げるかのように、空に閃光が迸る。まるで、雷の光が瞬いたかのような感覚。

彼にはそれが隕石に何らかの障害が生じたのだと分かった。制御器である水晶を身体の中に取り込み、まるで心臓であるかのように闇のタールの中で輝かせている彼には、まるで自分の身体の一部であるかのように隕石の痛みが感じられた。

イージス護衛艦の放ったキネティック弾頭10発の命中により、隕石は1ギガジュールに匹敵する運動エネルギーの直撃を受けていた。これは、音速で約百トンの鉄球が正面衝突した破壊力とほぼ同等である。

隕石は大きく突入スピードを減退させた。そして、衝撃に耐え切れずにその巨体を砕け散らせる。

しかし、大小数十の小隕石体になった隕石は、それでも十分過ぎる破壊力を保持していた。

「ハハハハッ！　良いぞ！　全て塵となるのだ！　全て、全てだっ！」

ゲンフルは哄笑した。願いまで、あと少しだった。

その歪な意志は、今や肥大化して戦場後に存在感を誇示するかのようになつた。

自分を打ち倒せる者などもない。

あの隕石を止められる者など、いるはずもない。

圧倒的なまでの支配感に、彼は酔いしれた。

城にまで轟く彼の笑い声が、この国の絶望を象徴していた。

「目標、着弾により破砕^{はくさい}！　63個体に分解しました！」

「撃ち落とせたのか！？」

「そ、それが、約40パーセントが直近の海上に破壊力を持ったまま落下します！　シミュレーションが間に合いませんが、かなりの数が本艦及び陸地へ直撃する可能性が！」

「くっ！？　第二波の迎撃は！？」

蕪木が即座に砲雷長に言った。

だが、彼自身、既に手はないことを理解していた。

「だ、ダメです！　間に合いません！」

既にSM3を放つには近過ぎる距離にまで到達されている。こうした大気圏外からの飛来物への攻撃はどうやってもワンチャンスである。

リーダーには、まるで群がる蜘蛛の子のように大量に飛散する小隕石群が表示されていた。

「人事は尽くしたか……！」

蕪木は、まるで全てを消し去ろうとしているかのような隕石群を睨んだ。

いや、実際消し去ろうとしているのだ。蕪木は直感的にこの攻撃を行った人物の意図を知った。あの敵軍の將軍のような戦いによって雌雄を決するという？美学？がこの攻撃には感じられない。

つまりこれは、異なった意思によるもの。そしてそれは、この国を滅ぼすことだけが目的ではなく……

だが蕪木は容赦ない極限の緊張の中でその思考を中断させるしかなかった。

「隕石群、間もなく本艦上空に到達します！」

「総員、衝撃に備えろ！」

灰色のヘルメットの顎紐を締め、隊員達は隕石落下の衝撃に対して備えた。

だが、そんなものは音速を超えて落下してくる隕石の直撃を受ければ全くの無意味である。

全てを運に任せるしかない無力感が全員を支配していた。

「隕石に迎撃ミサイルぶち当てたのか！？」

市之瀬はイーグス艦のミサイル発射と、その後の雷光のような光の明滅にそれを知った。

一瞬、希望を見出したかのように思えたが、巨大な隕石に対して単艦で発射できるミサイルの数ではどうしても足りなかったようだ。

砕けた隕石の破片は、今なおこちらへ向かって落下して来ている。

「……イージス艦でも無理なんて、もうおしまいじゃねえか」

市之瀬は絶望に打ちひしがれる。

「イチノセ」

ラロナがそつと肩に手を添えてくれた。

「もう行かないと、間に合わないぞ？」

「ラロナ……」

彼女はどこか寂しげに自分を見つめていた。

自分だけは救いたいと願っているのだ。

何故そこまでする？

彼は彼女の好意が分からなかった。

だが、それは単純なことだった。

「ありがとう。私の国のためにここまで戦ってくれて……でももう、いいんだ」

彼女は微笑む。戦士として、最大の敬意を払って、彼女なりに自分への恩返しをしてくれているのだ。

彼は胸が詰まった。

「こんな結末じゃあ……そんなの意味ねえよ」

彼は彼女の顔を正視できなかった。

全てが無駄に思えた。

やはり自分は勇者なんかじゃない。

久世三尉の好意を裏切り、自己満足で戦い、そして、誰も守れなかった。

後悔の余り自分を殴り倒してやりたい衝動に駆られる。

と、その時だった。

「……ん？」

何かが遠くから聞こえて来た。

気味の悪い笑い声だ。

「何だ？」

カルダやラロナも声の方を見やる。

すると、そこに、帝国軍の壊滅した戦場跡に、何かがいた。渦巻き、何かを貪るかのように蠢く何か。

「黒い霧か？ いや……！？」

カルダは目を見開く。

「まさか、流星の目の術者！？」

市之瀬はその言葉に驚いて慌てて観測用の双眼鏡を取り出してそちらを確認した。

「うわ、何だありゃ」

市之瀬は息を飲んでその物体を、いや物体と呼べるものなのかさえ曖昧な存在を観察した。

「カルダさん、あれって……？」
「確証はないんだが」

カルダは唸って説明した。

流星落としては、大昔、その実在を指摘した研究者によると、一種の使い捨て兵器に近いものだった可能性があるという。

それは、御伽話でも、それより堅い文体の神話などでも、基本的に全てを滅するために使われ、その中では使うことを命じた者はいても、使った者についての記述が極めて少なく、その記述にしても生け贄を臭わせるような描写が散見され、そこには真相を隠そうとする意図が読み取れるからだった。

また、その制御器についても、一つのものが何度も使われているような描写が見られない。形状も？宇宙？を内在した水晶というのを除けば、特徴に共通点がなく、水晶そのものであったり、水晶を埋め込んだ杖であったり、中には指輪だったというものもある。

その研究者は、最後に流星落としての制御器について、制御というよりは、使った人間の命を燃やして流星を引きつける、ある種の引力装置であるという仮説を立てていた。

市之瀬は説明を聞き、ふと脳裏に過ぎった事を口にする。

「つまり、あの黒い怪物の中にある制御器をなんとかすれば？」

引力装置を破壊すれば、隕石のここへの命中を回避できるかもしれないと考えたのだ。

カルダも半信半疑な様子だったが、ややあつて頷く。

「しかし制御に成功した者についての記述が少ない理由が分かったな……使ったら最期、あんな姿になるなぞ、死ぬよりも苦しかろう」

つまり、自分のための人身御供になる人材を減らさないための、古代文明の指導者達の非道な情報統制だったのだ。その非道さ故か、古代有翼人文明は遙か昔に滅んだという。

「カルダ戦士団長！」

ラロナが空を見た。

すると、直後に凄まじい衝撃と地響きが彼らを、いや、この都全体を襲った。

見ると、都市の一角に隕石の一部が落下し、建物もろとも地を抉って爆炎を上げていた。一区画が丸ごと消し飛んでいる。比較的小さな隕石でさえあの威力なら、その全てが降ってきたらひとたまりもないだろう。

だが、無慈悲にも落下してくる小隕石の数は一つ、また一つと増えていく。

今いるこの城壁の耐震基準など知る由もないが、今にも倒壊しそうな勢いだ。

カルダが焦った。

「くそ！ 時間がない！ 何か手は……」

彼女はあの奇妙な存在への攻撃手段を考える。

（今から兵を率いて総攻撃をかけるか？ いや、あそこまでかなりの距離があるし、奴に気付かれれば無論抵抗を受けるだろう。短時間に奴を倒せる手段でないとダメだ……）

だが、そんな都合の良い手段は今のマリースア軍には存在しなかった。

と、視界の中に、ある少年の姿が飛び込んできた。

奇妙な武器で、遙か彼方の敵を倒す武器を持った、少年を……

「イチノセ殿」

カルダは少年の面影を持つ異界の戦士を呼んだ。

その戦士の手に握られた、武器を見つめる。

切迫した状況下、もはや手はこれしかない。カルダはそう判断した。

「ここから、奴を狙えないだろうか？」

「え？」

一瞬、市之瀬は「無理だ」と言いかけた。ここからあの黒い霧の物体まで、どう考えても一千メートルはある。明らかにこの標準的な7・62？口径のM24対人狙撃銃の有効射程圏外の距離だ。

だが、市之瀬はカルダが自分にやれるかどうかを尋ねているのではないことを悟った。

今、自分がやらなければ、誰も助からない。

（俺は……）

市之瀬は狙撃銃を強く握った。

堅く冷たい銃身を握りながら、ラロナの手の温かさを思い出す。

生きる意味がそこに凝縮されているかのような気がした。冷徹な武器を手にすることで、守るべき者の温かさを思い出すことができる。凶器と武器の区別の境界線があるとすれば、それは手にする者が守るべき者を持っているかどうかだった。

例えば、半年前に自衛隊に入隊し、ただの高校生だった自分が、何かを守る？戦士？となったのは、入隊後二週間目で行われた武器貸与式で初めて銃を渡され、その重さと冷たさを知った時だった。

その時は、妹の美奈の顔を思い描いたように覚えている。

そうだ、自分は……守ると約束した。

美奈を、そしてラロナを。

「やります」

やれます、とは答えなかった。やれると断じるのは、驕っているように思えたからだ。

「頼む……イチノセ殿……ここまで、あなたに頼り切りだな、私は」

カルダは乾いた笑顔を彼に向けた。

「イチノセ……」

「ラロナ……」

ほんの少しだけ、ラロナの顔を見つめる。その顔には、そう、気丈な中に、どこかすがるような感情が潜んでいた。

それをラロナ自身も感じる。

（ああ、そうか……）

ラロナは、目の前の少年の顔を見て、自分の中にある複雑な感情の一つが理解できた。

（アタシは……誰かに守ってもらいたかったのか……）

狙撃を前に、銃を確認する市之瀬を見ながら、彼女はそんな自分の弱さを知った。

そして、市之瀬は、これほど多くの人に期待された時、こんな自

分でもここまで戦えるのだと、自分の内に秘められた強さを知った。隕石の雨が降る、世界の終わりに、二人の少年と少女は、互いが互いの存在をかけがえのないものだと思い合った。それを伝える時間も、素直さもないままに。

ラロナは、英雄のように全てを背負って武器を手にする少年の背中をただただ見つめる。

「……あつ!?」

彼が焦ったような声を上げた。

「どうした?」

「弾が……あと一発しかないっ!?」

ボルトオープンした銃の薬室には、黄金色の弾丸はただ一発のみ装填されていた。彼はチョッキのポケットを確認して予備の弾薬がないか探るが、度重なる戦いの中で使い切っていた。

それが意味すること。

「チャンスは……一回きり」

彼の背中に冷たい汗が流れた。

だが、それでもやるしかない。

やるしかないんだ!

彼は自身を奮い立たせて射撃姿勢を取った。

心臓が高鳴る。

狙撃に良いコンディションとはとても言えなかった。

「くっ!? だ、ダメだ……」

「イチノセ……！？」

ラロナが咄嗟に彼に駆け寄った。

「こんな時に震えかよ……畜生っ！」

緊張を強いられたからだろうが、彼の手が痙攣するかのよう
に震えていた。

自分の意識と裏腹なその状態に、彼は血を吐きそう
な程に悔しそうな表情を浮かべる。

極限なまでに繊細な遠距離狙撃を行うのに、この震えではもう無理である。

だが、彼女は諦めなかった。

「イチノセ！」

ラロナは無我夢中で彼の背中に抱きついていてた。

そして、彼を一見すると羽交い締めになっているかのように、彼の銃を構える手に自分の手を重ねる。

「ら、ラロナ！？ こんな時にふざけてる場合じゃ……」

「うるさいっ！ アタシがお前の手になってやるってんだよ！」

「え？」

「お前は狙うだけだ！ これなら何とかなるだろ？」

耳元で叫ぶ彼女の声は、まるで戦いの女神に叱咤されているかのような不思議な説得力があった。事実、狙撃という繊細な行為は、多分に精神に依る部分が大きいので、ラロナの行動は全くの過ちというわけではなかった。

「落ち着け、イチノセ。一緒に生き残ろう。お前は生きて、元の世界に戻るんだ」

「ラロナ……」

彼女の息遣いを首筋に感じる。軽装の鎧と密着した背中からは、その鼓動さえも感じられそうだった。

彼は、もうそれ以上何も言わなかった。

それを肯定と受け取ったラロナは、まるで想い人に抱きつく乙女のように力を込めて彼を包み込む。

「はあー……」

市之瀬は、狙撃に備えて適度に息を吐いてブレを抑える。

自分とラロナの鼓動が、隕石の落下で全ての音がかき消される中で、彼に聞こえる最も確実な音だった。

「すう……」

ほんの僅かに息を吸い、身体が硬直する一瞬に賭ける。

刹那。

トクン……

市之瀬はハツとした。

二人の人間の鼓動が確実に合致することはそうありはしない。

それはまるで、二人の思いが通じ合った時であるかのような一瞬だった。

彼は小手先の狙撃技術をかなぐり捨てて引き金を引いていた。それは、驚く程に軽く、銃身に影響を与えない引きだった。

撃針が狙撃専用弾の雷管を叩き、弾薬を撃発させる。爆発的な化学反応によって生み出された推進力が弾丸を銃身に押し出した。ライフリングに沿って高速回転を与えられた弾丸は、銃口へと向かう。

そして、二人の生への思いが、撃ち出されていった。

「ははははははは！ 素晴らしい、素晴らしいではないか！ これが流星落としての威力か！」

ゲンフルは闇系統の魔力を高めるためにも新鮮な死体が転がるそこを制御器使用の場所として選ぶしかなかった。だが、制御に成功してからの彼は自己陶醉が過ぎていた。既に目的が達せられたと思ひ込み、自分が一千メートル先から狙われていることに気付くことはなかった。

「滅べ、滅ぶがいい！ 虫けら共、我が秘術にひれ伏すのだ！」

異形と変わり果てた今でも、彼の虚栄心からだろうか、誇らしげに制御器である水晶級を胸に飾るかのように露出させている。

それが、遠距離から見れば光を反射して絶好の狙撃ポイントになっていることなど予想だにしていない。

「終わるのだ！ 私と共になあ！ ぐはははははは！」

ピシッ！

一際下品な笑い声を上げたその時、彼は何か割れる音を聞いた。

「んー？」

何かが地面に砕けて破片をこぼしている。

それが、制御器である水晶球の砕け散った残骸だと理解するのに、彼はかなりの時間を要した。

「あ……へ……？」

一体何故だ、何故水晶が割れている。

その疑問に、遠くから遅れてやってきた乾いた音が答えた。

ターン……

その音は、隕石の降り注ぐ都の中では取るに足りない小さな音だった。

だが、全てを変える音だった。

「ぎゃ……ぎゃあああああ！？」

ゲンフルは途端に悶え苦しみ出した。

水晶に取り込まれ、水晶の一部として辛うじて自我を保っていた彼がそれを失うのは、死に直結する。

それと同時に、制御を失った流星が失速したり軌道を外してしまうことだろう。

彼にとつての命を賭しての願いが潰えてしまうのだ。

「何故だっ！？ 何故なんだあーっ！？」

水晶によって闇を従えていた彼が、今度は狂った闇に取り殺されようとしていた。

超遠距離からの狙撃などという理解不能な事態を理解することは、彼にはもう無理なことであった。

だが、彼はこれが一体何が原因で引き起こされたことなのか、半

ば決めつけとも言える結論に至っていた。

そうだ、全て奴ら異世界人共のせいなのだ！

全て、全て全て全て！

彼は最後に発狂したかのように叫んでいた。

「はは……はははははは！　だがこれだけでは終わらんぞ！　異世界人、お前たちの存在はこの世界にあつてはならぬのだ！　世界はお前達の存在を許さぬ！　世界がお前達を消そうとする！　最早それは運命なのだ！」

自らが招いた小隕石の落下する衝撃波と地響きが、その断末魔の叫びすらもかき消していった。

イージス護衛艦？いぶき？CICでは、レーダー担当の隊員が突然の変化に声を上げていた。

「小隕石群、多数が落下軌道を変化させていきます！」
「何っ！？」

蕪木が齧り付くようなレーダースクリーンを凝視した。

見ると、一直線にここを目指した落下軌道を描いていた小隕石の多くが、まるで統制を失ったかのようにバラバラな落下地点へと向かい始めている。

「迎撃で破砕したから重心や空気抵抗の変化で軌道が逸れたんだ！」

砲雷長が微かに見えた希望に歓喜する。

今や、獲物に群がる蜘蛛ではなく、蜘蛛の子を散らすかのように

隕石のほとんどが海上に向けて落下していつている。しかも、多くが大気圏突入による摩擦熱で減耗し、消滅している状態だ。

だが、と蕪木は緊張を解かなかった。

彼の懸念は、やがて現実のものとなった。

「で、ですが既に大気圏を突破したものが……！？」

小隕石とはいえ破壊力は数メガトンはある。

これ以上は、もはや運の世界だった。

「はぁ……はぁ……」

銃を下ろした時、市之瀬は心臓が爆発しそうな程に早鐘を打っていた。

極限の緊張の後に訪れる、猛烈な虚脱感。

「イチノセ」

ラロナが彼の背中をさする。

「イチノセ、やったんだ……アタシ達……やったんだよ」

隣で双眼鏡を見たカルダがはっと息を飲む。

「そのようだ……いや、まさに弓神が如き繊細なる射抜きだなイチノセ殿！」

「へ……へへ」

市之瀬も、乾いた笑みを浮かべてカルダに親指を立てて誇った。

「ははは！」

カルダが市之瀬と同年代のように屈託無く笑う。

こんな少年そのものの英雄に、全てを託していたことに今更ながら冷や汗をかく思いだが、結果良ければ全て良し、だった。

それから彼はよろよと城壁を降りた。

もはや市之瀬にこれ以上の任務など不可能だった。

「なあ、ラロナ……俺らにできることはもうないよな？」

「まあな」

傍らにはラロナがいる。

彼女は彼の装備品を収めた集約チョッキなどを持ってやっていた。市之瀬は屋内へ戻ると、避難民のいない場所まで歩いて行く。

「悪い、ちよつと寝るわ」

通路脇に適当な場所を見つけると、壁にライフルを立てかけ、横になる。

どうせ、生き残れてヘリが戻ってくるまでどうしようもない身だ。

「……寝心地悪」

温暖な気候なので、寒さは全く感じないが、大理石の床はお世辞にも寝心地が良いとは言えなかった。

苦笑いする声が頭上に聞こえる。

「ほら、アタシが枕になってやるよ」

彼女はその場に座ると、膝の上をばんぽんと叩いた。
市之瀬は眠い目を丸くした。

「い、いいのか？」

「ああ」

お互い、煤まみれ泥まみれの酷い有様だった。

そう、今の二人は、同じ戦場を駆けた戦友同士だった。

市之瀬は、余りの疲労感に、何かそれ以上言うのが面倒臭くなった。

「んじゃあ、遠慮せず」

異性に膝枕してもらうのは密かな夢だったが、思わぬ所で叶えられた。それも、戦場というまずあり得ないシチュエーションで。

隕石が空から振って来てお互い死んでしまうかもという不安はあったが、もうここまで来ると後は運任せでしかなかった。

となれば、後は気持ちよく寝た方が人として健全というものだ。

「あ」

市之瀬は頭を彼女の太股に乗せると、思わず声を出していた。

「な、何だよ？」

ラロナの顔がじつとこちらを見下ろしている。

「ラロナの太股、すげえ柔らかいなーって」

彼女の顔がボツと赤くなる。

「う、うるさい！ とつとと寝ろ！」

「あいたたた分かった、分かったって」

こめかみをグリグリとやられたので、悲鳴を上げて目を瞑る。

すると、精神力だけで今まで保っていた意識を、睡魔があつという間に彼を眠りの世界へと誘っていった。戦闘による身体の疲労は、そこまで酷いものだった。意識そのものが泥の中へと沈んでいくかのような深い眠りである。

寝息をかき始めた彼の顔を、しばらくして彼女は手でそつとなぞる。

「イチノセ、寝ちゃったか……？」

紅い髪の少女は、小さく尋ねる。

彼は既に深い眠りにつき、簡単には起きそうもない。

彼は、本来無関係なこの国のためにここまで戦ってくれた。

戦士として、礼の言葉が見つからない程に感謝している。

例え、このまま隕石に消し飛ばされてしまっても、この異世界の戦士と一緒になら、何も怖くはなかった。

「ありがとう、イチノセ……これが世界の終わりだったとしても、お前といられて、アタシは幸せだ」

一筋の涙が頬を伝う。

そして、自分を守り抜いてくれた少年の頬にそつと両手を当て、静かにその唇に自分のそれを重ねていた。

遠くから、最後の小隕石が落下してくる音が押し寄せてくる。

彼女はそのまま、彼を抱き寄せ、微動だにせずその時を待った。

エピソード 平和の風

昼休みの教室。購買で買ってきたパンを食べながら、彼女達は他愛もない話に華を咲かせていた。

まだ真新しい高校の制服に身を包んだ二人。

一人は真面目そうな、髪をツインに纏めた少女、もう一人は対称的にショートカットで、制服もやや着崩した少女だった。

「もぐもぐ……そういや次の授業なんだっけ？」

片手に持ったヤキソバパンを咀嚼しながら、ショートカット娘が心底怠そうに目の前の友達に尋ねた。

小柄で、どこかリスのような小動物を連想させる少女が答える。

「数学だよ」

「うげえ、ぜってえ寝そう」

ヤキソバパンの残りを乱暴に口に押し込み、牛乳で飲み込むと、今度はハッと何かに気付いたようだった。

「あ、そうだ美奈ちゃん、今日の宿題やってきた？」

「え？ うん、やってきたよ」

「お願いっ！ 写させて！」

「もー、最近多いよナツちゃん」

不承不承といった様子だが、根が優しいのか、美奈は鞆の中からノートを取り出して友達に渡してやった。

「えへへー、悪い悪い、最近部活が忙しくってさあ」

彼女は拝むようなポーズをしながらノートを受け取ると、早速必死になって写し始めた。

その間、美奈は窓の外をじっと眺めた。

ごく普通の、少し高台にあるだけの高校。

ここから見える風景も、ごくありふれた平和なものだ。

だが、彼女は最近、暇さえあればその風景を眺めるようになっていた。

理由はよく分からない。

ただ、あの事件を境にしているということは、何かそれと関係があるのだろうか。

「おーい、現実に戻ってこーい」

友達のナツが苦笑いしながら声を掛けてくる。

「ありがと、写し終わったから」

宿題は結構な量だったはずだ。それを写し終える時間、自分はまだぼつと窓の外を眺めていたことになる。

「ごめん、何だか気が抜けちゃって……」

ノートを受け取りながら、美奈は流石に心配をかけてしまったかもしれないと反省する。

それを、痛ましい表情でナツは見ていた。

友達を心配する余り、少し踏み込んだことを言ってみる。

「……美奈ちゃん、お兄さん、きっと見つかるよ」

「え？」

美奈はきょとんとした。

「こないだテレビでも言ってたよ。自衛隊の船には救命ボートもたくさんあるから、もしかしたら生存者がどこか無人島で助けを待ってるかもって」

ナツが言っているのは、つい昨日、テレビの報道特番でやっていたことだった。

その中ではまず、先月に太平洋上で消息を絶った自衛艦隊の司令官が、上層部でいかに疎まれていた問題人物だったかが暴露され、また、万が一、艦隊が沈没していた場合、どれだけの税金が無駄になるかがクローズアップされていた。死者が多数出た場合、その責任は誰が取るのか、派遣を命じた政府の責任についてはどうか……正直、美奈は途中から見えていなかった。隊員の安否についての話などほとんど扱われていなかったからだ。

残骸や遺品など一切の痕跡を残さず忽然と姿を消した海外派遣の自衛艦隊、という前代未聞の事件に、最近ではネット上などで「その高価な兵器をどこかの独裁国家やテロ組織に売り渡した亡命事件だ」とか「バミューダ海域と同じで時空の狭間に吸い込まれた」といった根も葉もない噂が飛び交っていた。

だが、自分の兄が今どこにいるのか、美奈にとって重要なのはそれだけである。それ以外の騒動については興味がなかった。

「う、うん……」

美奈はどう反応したら良いのか分からなかった。ただ、ナツが自分のことを心配してくれているのは嬉しい。

ナツには、本音を話してもいいのかもしれない。そう思った美奈

は、遠慮がちだが、自分が思っていることを打ち明ける。

「ナツちゃん、私ね……」

「うん」

真剣な表情のナツ。この学校に入学して、仲良くなった一番の友達。

「お兄ちゃん、この世界にもういないんじゃないかって気がしてるの」

ナツの表情がさっと変わる。

あ、いけない……と美奈は思ったがもう遅かった。

「ちよつ、ちよつとダメだよそんなこと考えちゃ!？」

ガタンと椅子から立ち上がって食って掛かった。

「希望を捨てちゃダメ! お兄さんジエータイで鍛えてんだから、きつとしぶとく生きてっから!」

「な、ナツちゃん、そうじゃないの、そういう意味じゃ……」

「だあああ! 美奈ちゃん、今日は部活なんかいいや! アタシと一緒にみんな誘ってカラオケでも行こう! 何ならアタシがおごっちゃる!」

バンバンと机を叩き、鼻息荒く詰め寄るナツに、美奈の言葉は届いていない。

「コラア! チャイム鳴ってるのにうるせえぞ、早く席つけ!」

いつの間にか昼休みが終わっていた。

次の授業の教師がやって来ると、あまり学習態度が良好とはいえないナツを注意する。

ナツは小さく「じゃあ、また放課後！」とウィンクしながら美奈に言う。

（まあ、いつか）

美奈は、何も寂しくはなかった。

授業が始まると、彼女は再び窓の外を見る。

？日常？という平和な世界がそこにあった。

（お兄ちゃんがいるところも、こんな良い天気だいいな）

彼女は、この世に兄がもういないような気がしていた。だがそれは、死んでいるという意味ではない。

虫の知らせ、とは何かが違う気がするが、とにかく、直感的にそう思えたのだ。

こうしている今も、兄はどこか自分の知らない所で、何だかんだで元気にやっている。

何故か、そんな確信に近い何かが彼女の中にはあったのだった。

「お兄ちゃん……」

彼女は外を眺めながら、そう小さく呟いた。

「あれ、誰か呼びました？」

大釜を絶えず巨大なヘラでかき混ぜ続けるといふ、一種の拷問のような作業を続けていたら、誰かに呼ばれたような気がした。

三角巾を頭に巻き、エプロンを着た彼は周囲をキョロキョロとする。

「はいはい、アホ言っでないで手を動かす」

スープの味見をやっていた久世が、オタマで市之瀬の後頭部をポクリと叩いた。トラックに牽引して移動できる自衛隊の巨大な野戦キッチン・野外炊具2型を前に、今日は小隊総出で炊き出し作業中なのである。

「あいた」

市之瀬は慌ててまた大釜を無心にかき混ぜ続ける。

こうして作られた食事は、隊員が家を失った被災者などに配給していた。今の彼らの仕事は、救国の英雄から災害派遣の炊き出しという、随分と落差のあるものだった。

戦争が終わり、することがない中、何もしないよりはずっと良いと隊員達も乗り気なので、本格的に部隊を上陸させて展開しているのだった。災害派遣は実戦よりも自衛隊の得意とする任務である。

その献身的な態度は、元々いた世界の海外派遣同様に、次第にこの国の人々にも受け入れられ始めている。

が、やはり奇妙な服に、見たこともない魔法を使う得体の知れない外国人、という感覚があるのか、彼らの周囲には人気がなかった。今陸自部隊が展開しているここは、都市の中央部にある公園だった。

向こうにはリュミが勤めている教会の鐘楼が見える。

緑豊かで、市民達の憩いの場であったはずの場所である。

今は陸上自衛隊の野外装備や車両などが所狭しと並べられ、救援

体制の確立に向けて動いていた。

だが、隕石による人的被害が少なかったのは不幸中の幸いだった。大半が海に落下し、水蒸気爆発を起こして四散したのだ。

多くの市民が、今は復興に向けて歩み始めていた。彼らの立ち止まらない力強さに、純粹に隊員達は感心する。だが、滅亡の危機からしてみれば、今の状況はそれほど苦にならないのかもしれない。

市民達の顔には不安も見え隠れするが、同時に民思いの指導者に改めて敬意を抱いているようで、混乱はそれほど見られない。

それはさておき。

命令違反をした市之瀬は、厳罰を受けるはずだった。

だが、カルダが約束を果たし、彼を全面的に庇ったため、自衛隊側としてもあまり彼女の面子を潰すような処罰を与えることができなかった。何より、自衛隊全体として、独断により武力行使という前代未聞の行為を行使した手前、一隊員だけを厳罰に処すのはナンセンスだという意見があつたからだ。

結果として、取られたのは処分の分散化。

久世三尉にまで責任を取らせ、厳重注意と減棒、無期限の外出禁止、雑作業の優先配置ということに落ち着いた。

ヘリの撃墜と敵の襲撃により精神の安定を欠いていたという久世の証言も罰を軽くする要因になった。彼は、市之瀬を最後まで自身の部下として庇ったのだった。

「ようし、これで今日五カマ目か……」

市之瀬は記念すべき五カマ目のスूपを作るべく、大量のジャガイモをバケツから鍋に流し込もうとする。

と、その中の一つを取り上げ、ひょいと向こうへ投げる誰か。

向こうで、巨大な鳥がそれを上手に嘴でキャッチして食べてしま

「な!？」

彼は妙な達成感を阻害されたことに愕然とした。

「あはははっ！ 上手だぞテール！」

「ラロナてめえ！」

自分が昼食を取らずに作っていた料理だけあって、恨みは百倍である。

と、抗議の声を上げる市之瀬の眼前に、ラロナは羊皮紙を突き出した。

「な、何だこれ？」

市之瀬はこの国の言語で書かれた羊皮紙の内容は理解できない。この世界へ召喚される時に備わった能力は、会話能力だけなのだった。

「女王陛下からの直々の勲章授与の通達だよ。やったな、イチノセ」

ラロナは不敵に笑う。

「そういつわけでクゼ隊長、こいつ、借りて行きます」

「……人手が減るのは嫌だけど、まあ女王様からの命令じゃ仕方ないね」

連帯責任であてがわれた給食班の指揮のため、エプロン姿の久世はすっかり姿が様になってしまっていた。

「じゃあ決まりだ！ ほら、早くイチノセ」

「ちょ、ちょっと待てよ、せめてエプロンくらい外していかなきゃ……」

彼は慌てて身支度を始める。

そんな彼の手を、ラロナは握りしめる。

「ちょ、ま、待てってラロナ！」

「待つてらんないよ！ アタシ達への勲章なんだからさ！」

「ったくしょうがねえなあお前……」

周囲の被災者達が、奇妙な緑色の服を着た少年と、飛行軽甲戦士団の少女が連れ立って歩いていくのを、不思議なものを見るかのように眺めていた。

ラロナに連れられ、巨鳥を休ませている場所へ行くと、そこにはもう一人の少女が立っていた。

紺と純白の神官衣姿の、髪の長い少女。

彼女は、市之瀬の姿を認めると、パツと表情を輝かせた。

「お待ちしておりましたわ、勇者様！」

「リュミちゃん！？ 無事だったんだな」

「ええ、お陰さまで。今日は陛下から勲章を賜るというお話でしたので、いてもたってもおられずにラロナさんと一緒にさせてもらいました」

リュミは「さあさあこちらへ」と恭しく彼を巨鳥の鞍に乗せる。

「あ、え、ちょ、ちょっと待って」

こういうのって離陸時の安全ベルトだとかそういうものの確認はしなくていいの？

市之瀬は慌てて掴まれるものを探す。

すると、ラロナが軽やかな身のこなしで鳥の首の付け根辺りに飛び乗った。

「おうし、行くかあ！」

ラロナが額のゴーグルを降ろし、騎手として手綱を握って叫ぶ。力強く、鳥が身を起こし、地面を疾走し始める。

「のうわああああ！？」

鳥に乗るなどという経験などしたことがない彼は、荒々しく地面を飛び立つ鳥の上で悲鳴を上げた。

情けない声が、次第に南国の青い空へと吸い込まれていく。

涼やかな平和の風が、彼らを包んでいた。

エピローグ 平和の風（後書き）

ここまでのご愛読ありがとうございます！
どうだったでしょうか？

このストーリーは原作となった2002年版「自衛隊漂流戦記」を大筋ではリメイクしたのですが、完全に新しいものになっています。

当時では不可能だったBMDなどの要素も盛り込み、様々な試みを追加してみました。

第1部では主に戦闘に巻き込まれてしまう状況を描いていますが、第2部からは異世界に迷い込んだ自衛隊がどう行動していくのか、また、それに関わる異世界の人々を中心に描いていこうと思っています。

エルフのお姉さんとかダークエルフの女の子とか、女王サマだとかまあ色々と萌えな要素も盛り込み、自衛隊in異世界ものの完成型にしていけたらなと思います。

では、第2部でまたお会いしましょう！

ご意見、ご感想お待ちしております！

序章 二人の妖精

マリースアの内陸部には豊かな田園風景が広がっていた。

蒼く突き抜けるような空と、黄金の絨毯。よく育った麦が風に揺られて静かな旋律を奏でている。

どこまでも、どこまでも広がる長閑で平和な風景。

そう、うんざりしてくるほどに。

彼女は「うはあ……」と空を見上げて心底退屈そうに荷台の藁の上に寝っ転がった。

「お嬢さん、ところで次の宿場町からはどこへ行きなさる？」

「あん？」

御者台から、見ず知らずの自分に乗せてくれた人の良い老人が声をかけてくる。

農作物を次の宿場町まで卸しに行く途中、乗っけてもらったのだ。自分の種族の関係上、野菜は好きだったが、こும்イモ臭い荷台はいささか辟易する。が、タダ乗りさせてもらっている手前、贅沢は言えない。

「うーん、とりあえず久々に海が見たくって」

「ホホッ！ それは良いですな。今なら珍しいモノが見れるっちゅう話ですしのう」

「珍しいモノ？」

彼女はそれまでの退屈そうな表情から一転、興味を示して尋ね返す。

老人は馬の手綱を握りながら、一度振り返って誇らしげに言った。

「お嬢さん、この間の戦のことはご存じで？」

「ああ、マリースアが継承帝国軍の奇襲を撃退したって話よね？」

噂ならここへ来る前の隣国でも散々聞いた。

距離と時間的に考えてもおかしい、その光景を見てきたと吹聴する吟遊詩人が酒場でそれを即興の歌にして歌っていたくらいだ。街では号外が張り出され、マリースアの勝利はこの国にとっても希望の光になっていた。

が、彼女はそれに対して半信半疑だった。

どうせ、威力偵察を撃退して良い気になっている程度に違いない
と思っていたからだ。

「帝国の脅威は誰にとっても身近だからえっらい喜びようだったわねえ」

「でしようでしょう！」

マリースア人の老人は我が事のように誇らしげだ。
そんな彼に、彼女は冷静な言葉を投げかける。

「でも、竜騎士団をぶっ倒すほどの力をどーしてマリースア一国が
持つてるのよ？」

「それですがの、異世界からの召喚軍だかをマリースア女王・ハミ
エーア様が呼び出して味方につけていたのですよ」

彼女は荷台で思わず起き上がった。

はしたなく大股を広げて胡座をかき、興味津々といった様子でい
くつも質問を浴びせた。

「異世界からの召喚軍？ 何ソレ？ 召喚獣じゃなくて、軍勢を召

喚したつての？」

「詳しいことは分からんですが、その力を助けとして、マリー
スア騎士団は雲霞の如く襲い来る帝国の竜共をバツバツタと倒し
ていったらしいですぞ」

「んなアホな」

竜を倒すのにどれだけの戦力を必要とするのか分かっているのだ
ろうか？

彼女はそれなりに荒事の経験もある。召喚獣だかを呼び出したく
らいで、精鋭の竜騎士団相手には齒が立たない。

「アホな、と言われましてもなあ」

「アタシ、百九十年生きてるけど、ここまでデタラメな噂は初めて
だわ」

「ホッホ！ エルフ様でもそう思われますかな？」

「……ったく。どうしてそんな信じ切ってたんだか」

温厚な御者にこれ以上文句じみた事を言ってもしょうがない。

彼女は宿場町を目前に、大きく伸びをした。

彼女のような胡散臭い旅人を、老人が乗せることにした理由がピ
クンと逆立つ。

笹のように細長い耳。

驚くほどに白く、きめ細かい肌。

彼女の部族特有のものだろうか、頬や二の腕、太股に紋章を描い
ている。

それがハイエルフ族の紋章であるとは、老人も気付いていないよ
うだった。

エルフ族。神秘と長命を持つ森の守り人。

人里に現れることは稀なはずだ。だが、彼女はその稀な一人だっ
た。

老人はその美しさと、稀な人物に出会ったことに吉兆を見出したのか、快く彼女を次の宿場町まで乗せて行ってくれたのだ。

が、彼女は神秘的なはずのエルフ族にあって、どこか俗っぽい表情を浮かべ、更にニヤリと笑った。

「異世界からの軍勢、かあ……面白そうねえ」

笹の葉のような耳にピアスを多数飾り付け、際どい露出の服装をしたエルフの美女は、そう呟いて次の旅の目的を見つけたのだった。

夜の居留地の広場に、ほとんどの部族の者達が集まっていた。

多くは女子供だ。男の多くは、今まで度々戦場に駆り出されその数を減らしていた。今も、どこかの戦場に出払っている者ばかりだ。夫の帰りを待つ女達の顔には、どこか諦めにも似た疲労の色が見え隠れしている。

それは夫の帰りを待つ女に限った事ではなかった。篝火に照らされた人々の表情には一様に不安の色が濃い。

それを見た彼女は、それを吹き飛ばしたい一心で大きく声を発した。

「將軍から命令が下りました！」

広場の中央、皆を見渡せる位置に彼女はいた。皆の視線が彼女に集中する。

短い銀髪に、深い緋色の瞳。アマゾネスを思わせる黒の革製の服に身を包み、腰に二つの刺突短剣^{ジャマハダール}を提げている少女がそこにいた。

一種異様な光景だった。何故なら、彼女はまだ余りにも幼かったからだ。

外見的にはまだ15と生きていないのではないかと思われた。小柄で、十分に成熟していない身体つきが頼りない。

だが、大人達は皆その少女の言葉に真剣に耳を傾けていた。他でもない、部族長の娘である彼女の言葉を。

「デメテル大陸での任務です」

一同がざわついた。

海の方こうの大陸とは随分と遠い。

いや、それだけではない。明らかに帝国領ではないのが不吉だった。孤立無援での敵地における任務は、未帰還率が桁違いに高いのは皆が経験で知っていた。

そして、箱口令が敷かれているものの、噂では大陸に侵攻した帝国軍の精鋭が壊滅させられたという情報が出回っていた。状況としては最悪に思われた。

「……また、家族を差し出すのかい？」

息子を三人失い、最後の息子だけが残る母親が尋ねた。

「心配ありません。今回は誰からも人を奪ったりはしない」

少女は複雑な表情で答えた。その母親の最後の息子は、まだ自分より幼かった。

そして、彼女は母親以外にも聞こえる声で宣言した。

「將軍と話をつけました。今回は、私が任務にあたります」

悲鳴にも似た声があちこちら上がった。

「そ、そんな！？ あなたも部族長の最後の子供……」
「私はもう子供ではありません。父が死んだ以上、今は私が部族長です」

少女は毅然とした態度で言った。部族の仲間を安心させるためだ。だが、それでも仲間達は納得できない様子だった。それは少女も予想していたため、頃合いを見計らって説明する。

「この任務に成功した暁には、戦場へ駆り出されている者を全員帰還させることができます」

どよめきが起こった。

帰りを待つ家族達が希望と不安の入り交じった複雑な表情で周囲と顔を見合わせている。

そして、次第に少女へと視線を集中させていく。

彼女が行き、成功すれば、全てがうまくいく……

部族長の娘として、それは責務なのではないか？

それまで同情の色を見せていた面々も、そんな内心を表情から隠すことができないようだった。

しかし、少女はそんな仲間を恨んだりはしなかった。

「だから、私は行きます」

彼女の言葉に、かつての部族長に対するものと同じ敬意を部族の者達は抱いた。そっと、頭を垂れる。部族は、彼女の下に一丸となつていたのであった。厳粛で、そして悲壮な光景だった。

「姉様っ！」

突然、彼女の足に子供達が抱きついてきた。

周りの大人達が咎めようとするが、少女が目で制する。

「姉様……とおくに行っちゃうの？」

「父様みたいに、帰ってこなくなっちゃうの……？」

涙を目に溜めた子供達に、少女は膝を折って同じ目線になる。
母親のように優しく、彼女は言った。

「大丈夫ですよ。私は必ず帰ってきますから」

子供達の目が希望に輝いた。

「本当!？」

「はい。本当です」

にっこりと笑った彼女の顔に、子供達がほっぺたをくつつけて笑った。

(この笑顔を守りたい……)

少女は心の底からそう思っていた。

「御武運を……」

部族長亡き後に、少女を支えてきた女戦士の一人がそう囁いた。
少女は力強く頷く。

そして、目にも留まらぬ身のこなしで腰の刺突短剣を両手に構え、
刃を交差させた。

その時の少女の顔つきは、鋭い暗殺者のそれだった。
月明かりに光る白刃と紅い瞳。

部族の皆を鼓舞するため、そして、子供達に自分達の種族の生き様を見せるため、彼女は叫んだ。

「ダークエルフの誇りにかけて！」

人間達が邪悪と死の象徴として恐れおののく、黒き種族の姿がそこにあった。

第1章 戦乱の後に

空が蒼かった。

そして、海も蒼かった。

その色を差して？マリンブルー？とはよく言ったものだと思わなかった。

それ以外に表現のしようがない色。海にはそんな魅力があるのだった。

そう、例えその海が異世界の海であつても。

「アイスコーヒーで良かったですか？」

艦橋の外、ウイングと呼ばれる目視での監視に使用されるスペースで、じつと海を眺めていると、彼の横にまだ若い男が両手にカップを持って現れた。

「すまん」

初老の男、蕪木は小さく礼を言ってカップを受け取った。深い青色の海上自衛隊の作業服姿の彼は、階級章さえ分からなければ、艦隊司令官であることなど想像もつかない普通の男性であつた。

「どうしたんです？ 暇さえあれば艦橋に上がってきて海を眺めるなんて」

ウイングの縁に背中を預け、同じくカップの冷えたお茶を飲む若い男、加藤もそれは同じだった。主席幕僚、いわゆる艦隊参謀であることを、そのメガネをかけてどこか掴み所のない笑みを浮かべている顔から連想することは難しい。

蕪木はそんな部下の問いに苦笑した。

「……私は君と違ってもう若くない」

彼は再び海に視線を戻す。

見渡すと、海の上には灰色の海洋迷彩色に染められた海上自衛隊の五隻から成る艦隊と、マリースア首都・セイロードが広がっている。古代の海洋国家を思わせる白い家屋の目立つ都と、近代戦を想定して建造された戦闘艦のコントラストは、質の悪い冗談のようだ。

「実感が沸かない、と？」

加藤の言葉は恐ろしく的確だった。

そうだ、そうなのだ、と蕪木は思う。

「ああ。異世界へ漂流してきたことも、そこで戦争に介入してしまったことも、な」

一週間前、艦隊を包み込んだ突然の？異変？により、気がついた時には戦乱の平行世界へと、自分達日本の自衛隊国連派遣艦隊は迷い込んでいた。

そして、フィルボルク継承帝国と呼ばれる軍事国家に侵略を受けていた、ここマリースア南海連合王国に辿り着いた。

偵察に出したヘリコプターが攻撃を受け、墜落。

生存者の隊員は襲いかかって来る？竜？に向かって重火器にてやむなく応戦。これを撃破してしまった。

なし崩しに戦争へ巻き込まれ、国連軍として、虐殺の危機にあるこの国の国民と、隊員の生命を守るために武力行使に踏み切った。

無難に座視してこの国の人々を見捨てるか、人として戦いに飛び込むか。

究極の決断だった。

結果として、数千のフィルボルク兵を殺傷した。それを野蛮であり、不戦を国是とする日本という国の、専守防衛を不変の理念とする自衛隊を逸脱した行為である。それを蕪木は、いや加藤を含む多くの自衛官達が理解していた。

だが、隕石を落下させるといふ驚異の攻撃までも防ぎきつたために、この国の、今日の前に確かに存在する都市の数十万の人々を救ったのも事実なのだった。

戦争に正義はない。命を天秤にかけ、救ったであろう命を盾に自身を正当化するしかないのだ。

……我々の判断は正しかったのか？

憲法第九条、国の交戦権はこれを認めない……

交戦権の放棄。それを守っていたなら、あの街の人々は死を待つしかなかった。それは、果たして正しいのか？ 命を守るためにその鉄則はあるはずだ。ならば、命を守ることが最優先されるべきだ。そのためには、武器を手にするしかなかった。

いつまで経っても明確な答えなど出ない、無限のループに陥っている気分だった。裏を返せば、それは日本が、日本人が現実の？戦争？から目を背け続けてきたツケに、単に彼らが付き合わされているだけなのかもしれない。

蕪木は今もなお、悩んでいるのだった。だが、決断し、部下に命令を下した者として、それを表に出すことは決してない。

加藤はそれを理解した上で、上官に微笑みかけた。

「確かに、こんな綺麗な海を見ると、あの戦闘があったことが嘘みたいに見える。暇だし、釣りでもしてこようかな？」

蕪木は苦笑した。

「やめておけ。きっと漁協に文句言われるぞ」

「はは！　ここは日本じゃないんですよ、司令」

「知らんよ。とにかく我々には未知の世界なんだから……まったく、騎士だの魔法だの、私の頭じゃ適応できん」

蕪木は冷えたコーヒーに口を付けた。目の前に、現代世界のようにゴミが浮かんでもいない、景観の悪い工業地帯もない純粹なる海が広がっている。

ヒューウ

甲高い鳴き声を上げながら、頭上を人に乗せた巨大な鳥が編隊を組んで飛んでいくのが見えた。

マリースアの飛行軽甲戦士団のものだ。

旋回し、艦橋の二人に見えるように飛行した三騎に乗る騎士達は、剣を胸にかざして敬礼を寄越してくれた。

蕪木は、背筋を伸ばし、額に手のひらをかざす自衛隊式の敬礼でそれに応じた。

ああ、適応や理解はできないが、実感ならできるのだな、と彼は内心で苦笑した。

軍人として、敬礼に敬礼で返す。

それは交わるはずのないこの異世界でも同じことなのだ。

そして、そこにいるのは、着ているものや価値観は違えど、我々と同じ？人間？に違いないのだった。

ヒューウ……

「いやはや、しかし本当にファンタジーな世界なんだなあ、ここ」

加藤は飛び去っていく巨大な鳥……この世界ではアルゲンタビスと呼ばれる……の幻想的なまでの編隊飛行と、その騎手の姿に感嘆

する。

それにしても、と加藤は識別帽を脱いで頭を掻いた。

（普通、漫画とかアニメとかラノベとか……そういうもんだと異世界に召喚されるのって何の変哲もない少年だとかそんなんじゃないかな？）

加藤は長期航海に備えてかなりの数のアニメや漫画、ライトノベルなどの自身の趣味のものを持ち込んでいた。オカルト関係だけでなく、加藤は割と全般的にオタク方面に強いのだった。

そして、そういったものの中で人気なのが、異世界に現代世界の人間が召喚されてしまうジャンル。大抵、そういった物語ではごく普通の主人公一人だとかが異世界へ召喚され、美少女なんかとラブコメしたりするのである。

それと比べると、自分達の置かれた状況はかなり特異だ。

普通なら何の能力も、せいぜいその時持っていた現代世界の小物くらいしか影響力を持たない主人公が、ツンデレ美少女と婚約とかされたり、お姫様にこの世界を救って欲しいだとか頼まれたりするものだ。

だが、自分達は違う。それは、良くも悪くもだ。

加藤は碇を降ろして待機している護衛艦隊を見渡した。

自身が搭乗しているこの核ミサイル防衛システムまで積んだイージス護衛艦？ いぶき？も含め、自分達には漂流者と呼ぶには過分な物を携えてしまっている。日本という国家の擁する武装集団・自衛隊という？武力？を保持しているのだ。優しさだけが取り柄の主人公ではない。

だからこそ、この世界にとって、また自分達自身にとっても危険なのかもしれない。

二次元作品の主人公は良い。自身が？火種？になる恐れは少なくともない場合が多い。

（というか……）

加藤は隣の蕪木を見た。

（こんなおっさんを召喚してどうすんのさ？ 美少女司令官とかいなかったの？）

そもそも異世界に召喚されて来たというのに、自分の横にいるのはどうしてこんな黄昏れてるおっさんなんだろうか？

加藤は心底残念そうにそんなことを考える。

「……お前、今凄い失礼な事考えてないか？」

「いいえー、別にー」

加藤の掴み所のない性格に、蕪木は複雑な気分でコーヒーを飲む。幻想的な光景の中に、インスタントコーヒーの安っぽい味と香りがどこか皮肉げだった。

だがそれは、陸側から見ればマリースアのアルゲンタビスが、異界から現れた破邪の軍船と共に在る、それ以上に幻想的な光景であるのだった。

日本人の癖である。

変な部分で、自身が当事者になっている自覚があまりないのだった。

継承帝国最精鋭の竜騎士団を一瞬で全滅させた、一千八百億円で建造された最新鋭のイージス艦が、どこか不満げに自衛艦旗をはためかせていた。

「これは現実なのか……？」

彼女は何度も自分そう問うた。

そうだ、これは現実だ。

だが部下を引き連れてあの鉄で出来た異世界の船の上を飛んだ今となっても、その疑念をぬぐい去れないでいる。

それでも現実なのだ。

草色の長髪を風に乗せ、戦士団長のカルダは内心に言い聞かせる。あの戦いから一週間。異世界からやってきたあの艦隊の戦いを自分の目で見、そして異世界の兵士と言葉を交わした彼女でさえも、今なお現実感を持ってないのだった。ミサイル戦という、剣も魔法さえも超越した、そもそも全く異なる戦いの価値観の下に作られた船は、彼女達にとって非現実感しか抱かせない。

「……イチノセ殿はお元気にしているかな？」

彼女はふと、異世界人で唯一、身近に自分と会話したことのある少年の名を思い出した。

「ラロナ練戦士、今イチノセ殿はどこにおられるか知っているか？」

彼女は右翼を任せてある紅い髪の少女に声をかけた。

ラロナ練戦士。同じくあの異世界の少年と共に三日前の戦いを戦い抜いた一人だ。

彼女なくして、今のこの状況はないのかもしれない。カルダは内心で自嘲した。自分はイチノセを初めて見た時、敵と決めつけて処刑しようとしたのだ。それを止めたのがラロナだった。

だが、あの少年はそんな我々のために戦ってくれた。

あの艦隊もそうだ。

罪なき民が死んでいくのが見過ごせぬと、戦いに身を投じてくれ

た。

だが、それが原因で今はマリースア上層部ではかなり問題が起きているのだが……

まあいい、とカルダはそれを頭から払いのける。

義に立つて戦った者達に対して、それに報いようとしない連中のことなど、今は考えなくなかった。

「戦士団長、イチノセ達？陸の隊？は今は都の聖光母公園に展開しているそうですが、そちらへ向かわれては？」

彼女達は断片的に彼らと接する中で、彼らは自分達を決して『軍』とは呼ばないことに気付いていた。なんともおかしい話で、国の組織としての武装組織ならば軍以外に考えられないのだが、彼らはまるで自らを傭兵のように『隊』と呼称する。その中でも、イチノセが所属する陸での戦いを主とする者達は？陸の隊？と彼女達は呼ぶようになっていた。確か、リクジョージエイタイという正式な名称があるらしいのだが、彼女らにはややこしく呼びにくいので使わな
いでいる。

「うむ、そうだな。……ラロナ練戦士、イチノセ殿には勲章の授与が予定されているのは知っているな？」

カルダは嬉しさ半分、複雑さ半分の気持ちでそう言った。

実はイチノセに与えられる勲章は、騎士叙勲や栄誉戦功章の類ではなかった。義勇報償と呼ばれる、いわゆる傭兵などに与えられる勲章、つまり正規の軍人と認めていない勲章なのだった。

「ええ、しかも我々飛行戦士団にまでも！　なんだか夢みたいですよ」
それもカルダには複雑だった。マリースア軍の上層部は、あくま

で彼らジエタイではなく、自分達が戦って勝利したと対外的に示したいのだ。イチノセは、飛行戦士団に傭兵として参加し、その武を認められて特別に報償を与える、そういった立場なのだった。だが、実際は全く違う。逃げ惑う避難民を救うために黒竜を魔法の杖……歩兵携帯式の重火器・84？無反動砲……で撃退し、最後には流星落としての制御器をその恐ろしいまでの命中精度の武器で破壊した。敗軍に過ぎなかった我々飛行戦士団などの比ではない、一騎当千の武功を示したはずなのだ。

彼女は恥じた。自分がイチノセにしてやったことは、その命令違反を咎めないで欲しいという嘆願だけなのだ。貴族として、何も彼に報いてやれていない。それが悔しかった。

「イチノセ殿には、お前が伝えに行つてこい」
「えっ？ い、いいのですか？」

そうした役目は自分のような兵卒ではなく、貴族である彼女が行くのだとばかり思っていた。ラロナの意外そうな顔に、カルダは苦笑する。

「良い。私のような仏頂面より、お前の笑顔の方があの方は見たいはずだからな」

「ど、どういう意味ですか、それっ！？」

「そのままの意味だよ。さ、早く行つて来い」

自分では合わせる顔がないからな……カルダはそれを胸の奥に押し込み、空を飛んだ。空の上だけは、彼女の悩みをしばし忘れさせてくれた。

彼女には、これからまた気が重い任務が待ち受けているのだった。

カルダはラロナを使いに出した後、王城へと出向いていた。

女王陛下も拝聴される御前会議ならば、いくらか様子も違つかもしれないとの期待があったが、残念ながら今日も不毛な会議が延々と続けられていた。

カルダはうんざりとする。

「奴らを信用するなど言語道断である！」

將軍の一人が声を荒げた。

賛同する声があちこちから上がる。

「ベレンゲル將軍の仰る通りですぞ！ あのようなこの馬の骨とも分からね連中、信じる方がどうかしておる」

カルダは眉を顰めた。片眼鏡の奥の伶俐な瞳を、無骨な鎧を着込んだ連中へと向ける。

……また奴ら？内地軍？か。

玉座の間の半分近くを占有する連中に、カルダは心の中で舌打ちをした。

すると、そこから男の野太い声が上がる。

「異世界からやってきた伝説の英雄だと？ あんな気味の悪い格好をした英雄などいるものか！」

あの大男の名はベレンゲル。

マリースア南海連合王国の？内地軍？の総大将である。

マリースアは連合王国と呼ばれるように、海洋民族であるマリィア人が海の群島国家から次第に大陸に版図を広げ、長い歴史を経て形成された国である。伝統的に、海に近いここセイロードをマリィ

ア人が比較的多く構成する王都守備隊が担当し、内陸の都市などは内地軍と呼ばれる非マリア人が多い部隊が担当している。地上の国境線などの防衛は彼らの任務だ。

そのため、ベレンゲル含め彼ら内地軍の者達の多くは、ジエイタイによるあの戦いで目を疑うような戦闘を見ていないのである。セイロード奇襲を知り、大慌てで国境地帯から部隊を引き抜いて編成し、王都に到着した頃には全てが終わっていた。

そして、内地軍が見たもの。

それは他でもない、異世界からやってきた謎の集団が自国へ堂々と鎮座している姿なのだった。

「そもそも何故あやつらを王都へと上陸なぞさせたのだ!? 今は聖光母公園に陣を張って妖しげな物を大量に持ち込んで良からぬことを企んでいるそうではないか!」

その言葉に、カルダが立ち上がった。

「? 陸の隊? の方々を王都へと上陸させたのは私です。貴族の多くが戦死した中、女王陛下の許可が下りました故、彼らに助けを求めたまでです」

「? 助け? だと?」

「彼らは戦災に見舞われた我らの民を助けたいと申し出てくれたのです」

ざわ、と失笑にも似た声が上がった。

「バカバカしいにも程がある! 何故、自分の国の人間でもない我らの民を奴らが助ける義理がある?」

「それは……」

カルダはしばし言葉に詰まった。

彼女自身、完全には理解できていないのだった。ベレンゲルの言う通りなのだ。異世界からやってきた彼らは何と無償で戦災に苦しむ民を救いたいと申し出て来た。体勢を立て直すことに夢中で、民のことなどほとんど考えていなかったカルダ含むマリースア軍人達は、その申し出に虚を突かれる思いだった。この世界において、軍隊とはあくまで敵と戦い、国を守るためだけの組織である。民に手を差し伸べるという発想自体が出て来ないのだった。カルダはだからこそ、彼らのその分け隔てない精神に感服していた。彼らは彼女には想像もつかない価値観の下に行動している。

彼女は見たのだ。瓦礫に埋まった人々を、必死になって救い出そうとしている？陸の隊？の兵士達の姿を。

この国を救った英雄達が、泥にまみれて民を救おうとしているのを。

そして、救えなかった命に涙している姿を。

不思議に思い、カルダはある？陸の隊？の兵士に尋ねたのだ。

何故、自分とはまるで関わりのないはずのこの国の人間が死んだのがそんなに悲しいのかと。彼らの人種はマリーア人とは明らかに異なる。髪の色から顔立ちまで、共通点は人間であること以外は見たたらないように思えた。

『……俺はハンシンアワジとヒガシニホンを知ってるからなあ、他人事には思えないんだよ、畜生』

呟くように言うと、その中年の兵士は、部下を率いて負傷者の救護にまた駆けだして行った。カルダには彼が何を言ったのか理解できなかった。だがそれでも、彼らの姿には苦しむ人々に対して他人事でいられない何かがあるのは分かった。

カルダはその光景を思い出し、目頭が熱くなった。彼らが何を感じて民を救っているのか、それは金や名誉が欲しいからではない。

何か下心があつて誰かを助けようとしている、そんな人々には彼女には思えなかった。

そう、彼らの行動はあまりにも突飛で、普通なら不審に思われることを敢えて行っているようにさえ思えた。本当に何か良からぬ事を考えているのなら、もっとスマートなやり口を取るはずだ。

何より、彼女はイチノセという異世界の人間を知っていた。

腰抜けで、愚かで、子供っぽく、だが、驚く程に優しい。自分の利益を顧みない行動の数々を知っているのである。

彼女は、こう答えるしかなかった。

理解されないと、分かっているても。

「それが彼らの中での？当然の行い？だからです」

案の定、カルダには批判が集中した。

「金ももらわずに他国の民を救うのが当然の行いだと！？ 聖人でもそこまで出来てはあらんわ！」

「我が国に取り入るか内部から侵略する手順に違いない！」

「直ちに内地軍を動かして奴らを封じ込めるべきだ！」

まずいことに、内地軍に応援の声が上がりはじめた。

カルダはせめて、？陸の隊？の救援活動、確か彼らの言葉で？災害派遣？と呼ばれるものを中断させたくはなかった。

必死になつて、食い下がる。

「ならばベレンゲル將軍、あなたは引き連れて来た兵をこの街の復興のために少しでも割いたか！？ 民に手を差し伸べ、共に戦災の労苦を分かち合おうとしたのか！？」

「何を言っているのだ？ 我ら貴族が何故そんな事をする必要がある？」

カルダはベレンゲルの返答にハツとした。

自分は何を言っている？ ベレンゲルの言う通りだ。貴族である自分が民と共に労苦を味わう筋合いはない。逆に、国を守ってやったのだから、その労苦など安い物だ。

だが、彼女はそれに違和感を抱いた。他でもない、あの異世界からやってきた軍人達の姿を見てきたからだ。彼らは、そんな事を考えたりはしないだろう。何故だ？ 彼女は彼らの考え方が分からなかった。分からないが、少なくともかつての自分と、今のベレンゲルの言う事が正しいとは思えなくなっている。

呆然とする彼女に隙有りと見たのか、批判の声が次々と上がった。

「論点をすり替えるなこの売国奴め！」

「貴様それでもマリースア貴族か！？」

彼女は内地軍の高官達を射殺さんばかりの表情で叫んだ。

「誰が売国奴か！ 私はこの国を誰よりも愛している！ 国とは民ではないのか！？ だからこそ彼らの行いを止めたくないのだ！ そもそも彼らを封じ込めるだと？ 笑止千万だ！ 彼ら相手に戦いを挑んだら最後、屍の山を築くことになるぞ！ この国を滅ぼすつもりか！？」

いよいよ会議の場は騒然となった。

「貴様あ！ 我ら内地軍を愚弄するか！？」

今にも抜刀して彼女へ斬りかかりそうな剣幕で血気盛んな青年将校が吠える。

「王都守備隊として城を守り抜いた功労者だからと今まで黙って聞いていたが、その暴言もう許せん！」

武闘派で知られる騎士団長も追隨した。

「私は城を守り抜いてなどいない！ この国を救ったのは他でもない彼らだ！」

カルダは必死に説得しようとしていたが、その言葉のことごとくが内地軍の神経を逆撫でするものだった。ベレンゲルはもはや後に退けぬと、啖呵を切る。

「それほどまでに強い奴らであれば、今頃この国は攻め落とされておろう！ それができぬということは奴らは弱つておるのだ！ ならば我ら健在なる内地軍の戦力をもつてすれば鎧袖一触^{がいしゆいつしよく}！」

ベレンゲルは鎧を軋ませ、玉座の前に跪いた。

「まずい！とカルダが焦る。

今、彼女の味方をしてくれるであろう王都守備隊関係の貴族は先の戦いで多くが戦死しており、この場で最も発言力を持っているのは内地軍なのだ。

「ハミエーア女王陛下！ 我らがこの国へ侵入したる匪賊共^{ひそく}を殲滅^{せんめつ}して御覧に入れます！ どうか御聖断を！」

カルダは心臓が止まったかのような錯覚を覚えた。事実、ベレンゲルの具申に、その場がまるで水を打ったように静まり返ったからだ。

ベレンゲルの存在がそうさせたのではない。

その奥にある玉座に座る人物の言葉を遮らないよう、静まったの

だ。

玉座はやや奥まった所にあり、日よけの薄い布に遮られ、そこに座るであろう人物の姿は判然としない。

「……妾はこの城におったのだ、ベレンゲル」

静かな、女の声が聞こえた。

「は、ははあ！」

ベレンゲルは頭を地面に擦りつけんばかりに下げる。

彼のような傲岸不遜な男でさえ、ここまでさせる人物なのだった。

「妾も見たのだ、この目でしかと。あの異世界からやってきた軍勢の？力？をのう」

落ち着いているが、どこか底の知れない含みを持った声音だった。ベレンゲルの額に汗が滲んだ。

「で、ですが、それは……」

「もっとも、カルダ戦士団長の言うことも正しいのじゃが、そなたの言うことも正しいように妾は思う」

「お、おお！？ では……」

彼が何か言おうとするのを制し、少女の声が響いた。

「そうじゃな、まずは」

玉座を立ち上がる影。

一斉に玉座の間にいた重臣達が床にひれ伏した。

トッ トッ ……

微かに、素足が絨毯を踏む音が感じられた。
くふふ、とどこか老獪さを感じさせる笑い声を漏らし、少女の声は断じた。

「その者達と、会ってみたいと思う」

それがこの国の女王の、命令だった。

第2章 陸の上、海の上

一夜が明けていた。

イージス護衛艦？いぶき？の艦橋横のウイング。いつもの二人が暇を見つけてまた話していた。

「都市に災害派遣展開させた陸自部隊は当面待機ですか？」

「ああ。撤収作業をする方が混乱を招きそうだからな」

戦後の混乱の中、戦災を少しでも早く癒してもらえればと、陸自の一部部隊を都市へと送り込んでいたが、内地軍からの圧力によって今は宿営地にこもりきりだった。

蕪木はマリースアの温かな風を感じながら、やや遠くに見える街並みを眺めていた。

加藤も何となしに、双眼鏡を覗いてみる。

平行世界への突然の召喚。日本本国はおるか元の世界とさえ交信できない今、艦隊とその乗組員、陸上自衛隊の隊員達の統率は彼らの双肩にかかっているのだった。

だが幸いにして、自衛隊という組織は武装集団である以上、非常時の指揮系統の機能は問題なかった。蕪木の下に、今の所自衛隊員達に混乱は見られないのが救いだった。

そんな中、加藤は双眼鏡であちこち興味津々といった様子で観察しながら、ある事に気付いた。

「港近辺は昨日までと違って人だかりがありませんねえ」

昨日くらいまで、街の人々が物珍しさからかこの自衛艦隊の姿を大挙して見物に来ていたものだ。まるで幕末の黒船に乗っているよ

うな気分になったものだが、今はどうもあの内地軍とかいう連中が港を押さえたようで、見物人は今日は全く見当たらない。

「そのハミエーア女王とかいう人は苦しい立場なようだな」

蕪木は心配そうに岬の上に建つ王城を見た。

防衛戦争に勝ったはいいが、それが原因で疲弊したり混乱に陥った国は枚挙に暇がない。蕪木にはその女王の手腕を信じるしかなかった。

「……ところで、そろそろ顔を上げてもらえますか？」

そして、蕪木はウイングにもう一人いる、いつもの面子ではないある人物を見つめた。

草色の髪に、黒い槍兵将校風の軍服を身につけた美女だ。

海上自衛隊の機能的な作業服姿の蕪木と加藤に対して、彼女は明らかに異質だった。

それだけではない。彼女はここへ来て話を伝える間、こうして蕪木と加藤に対して片膝を突いて頭を垂れたままだったのだ。

「いいえ。カブラギ將軍、私のような身分の者にお気遣いなく」

カルダはそう厳肅な声で応じた。

初めて出会った異世界の人間。

平静を装ってはいるが、蕪木はどう接すれば良いのかよく分らないでいた。

とりあえず、小舟でひっそりとやってきた彼女は、この話は非公式なものであるため、使節としての接待は必要ないということで、折角なのでこの艦橋へ来てもらった。

ここなら、見晴らしも良いし、変に相手も緊張しないだろうと思

つてのことだ。だが、それは無駄な配慮に終わっていた。

「しょ、將軍、か……」

蕪木は戸惑いの表情を浮かべた。

軍ではない自衛隊には、將軍という階級は存在しない。

確かに、蕪木は海將補という將の字が付く階級ではあるが、將軍という大仰な呼び方にはやはり違和感を抱くのだった。

……所詮、自衛隊は公務員に過ぎんだからな。

蕪木は心の中で自嘲する。

日本という国には、軍人はいない。だから、將軍もいない。なら、我々自衛隊は何なのだろうかと問われれば、結局はその答えしか用意できない。

だが、それはカルダにしても同じだった。

（これほどの？力？を持つ軍勢の將軍だと聞いてどんな男かと想像していたが……）

ちらりとだけだが、蕪木の顔を見た彼女は思っ。

（ただの初老の男ではないか？ 着ているものも他の者とあまり変わりないように見える）

海上自衛隊の階級章を知らない彼女には、青い作業服姿の海上自衛隊員達は全員同じに見えた。

「まあ、司令もこう仰ってることですし、立ってくださいよ」

加藤がにつこりと笑ってカルダを促す。

彼女は戸惑いを隠せなかった。

「な、なりません！ 私のような者がカブラギ將軍ほどの身分の方と……」

「いいんですよ別に。この人、私服で基地歩いてたら誰も司令だなんて気付かないで敬礼してくんないんだよ？」

「余計なお世話だ」

カルダはわけが分からなかった。

軍だというのに、この規律の緩さはなんだ？

隣のメガネの男、どうやら將軍の右腕か何かのようだが、それでも上官に対して無礼が過ぎる。普通の軍なら不敬罪に問われるはずだ。

「ま、このバカの言うことはさておき、まあ、なんだ、非公式ならお互い目線が同じ方が良い話ができるような気がするんだがね？」

蕪木も加藤に悪ノリしてカルダを促した。

ここまで言われれば、もはや聞き入れないわけにはいかない。

カルダは恐る恐る、顔を上げ、その場に立ち上がった。

潮風が頬を撫で、髪を弄ぶ。

艦橋の上から見下ろす風景を、彼女はまるで王者のみに許される風景かのように錯覚した。

（……何と恐ろしい船だ）

この船はまるで島だ。

船と呼ぶには、この船はあまりにも巨大で、そして頑丈に造られている。どんな名工が作りだそうと、船は所詮船。木造の、人が海という死の世界で辛うじて生きて移動できるだけの存在に過ぎないはずだ。

だがこの船は違う。

鉄でできているのにも驚いたが、予想外だったのはその居住性の快適さだ。

まず、海の上にいるとは思えないくらいに揺れない。巨艦は確かに安定性が増すとは彼女も聞いたことがあるが、まるで地上にいるのと変わらないくらいに違和感がないのだ。それがフィン・スタビライザーと呼ばれる最新技術によるものだとは流石に彼女には分からない。

そして、船の中へ入って度肝を抜かれたのは、その明るさだ。

現代人からすれば何でもない、蛍光灯で照らされた廊下を見た瞬間、彼女はまじまじと天井を見つめたまましばらく固まってしまった。

窓の類の少ない外観から、艦内はきつと暗いだろうと想像していたのだ。

……光の精を封じ込めているのだろうか？

カルダはそう思って、ちょっと古くなってチカチカとなっている蛍光灯に手を伸ばそうとして、危ないですよと乗組員に注意されたのだった。

そして、ここへやってくるまでに感じた、あのえもいわれぬ涼しさ。

エアコンを知らない彼女には、艦内に何か巨大な氷を蓄えているのではないかと勘ぐっていた。きっと、氷を利用した何かの動力でこの船は動いているのだ。

この船は、一つの島だ。いや、島というよりは、一つの城。あるいは、その両方……

カルダは怜悯な人物だったが、それゆえに深読みが過ぎた。

（やはり、彼らを敵に回すなど自殺行為だ）

彼女は目の前の、この艦隊の最高司令官だという男に正対した。

一体何を考えているのだ？ カブラギ將軍。貴方達は、何が望みなのだ？

金、名誉、あるいは女の類か？ いや……

カルダの脳裏に、何か嫌な予感が過ぎった。

もしかして、生贄？

これだけの魔導兵器を維持するために、生き血が要ると言われれば、むしろ納得かもしれない。

カルダは恐ろしいことに、生贄としてかき集められそうな人間の数を計算までしていた。

彼女は決して自衛官達に憎しみや悪意を持ってはいない。むしろ、その不思議な人柄に好意と好奇心さえ抱いている。

だが、こうして鉄の軍船に乗った今は、あの戦いの時と同じく、恐れてもいるのだった。

彼女には、冷静になればきっとそんなことを彼らがしないと信じているものの、心のどこかで、この魔導兵器が自分の国へと牙を剥くのではないかという怯えがあった。

人が猛獣を恐れるように、それは本能的なものだった。

生贄を差し出せと言われれば、それで国家の命が保たれるのなら安いものだと考えてしまうのだ。

（ああ、そうか、ベレンゲル達は、この違和感と不安感、そして不快感に突き動かされているのだな……）

彼女は陰鬱な気持ちになった。

一歩間違えば、自分も同様に彼ら異世界人を恐れ、疑心を抱き、身を守るために大義名分をかざして排除しようとするだろう。

「……カブラギ將軍」

「はい、何ですか？」

「私は貴方達が怖い」

不敬を承知の上で、彼女はそう口にしていた。
カブラギ將軍ならば、それを咎めはすまいというある種の確信の上でのことだった。

蕪木は真剣な表情で、それでいてどこか苦笑を含んだような顔で彼女を見つめる。

「まあ、無理もないと思いますよ」

だが、カルダは一言、付け加えた。

「ですが私は貴方達のことを、好きでもある。こんな気持ちは初めてだ……」

そうだ、だからこそ、この会談は成功させねばならない。

彼らという存在を、このまま異敵のまま終わらせてはならない。

カルダはその決意を胸に、事を打ち明け始めた。

災害派遣部隊として輸送艦から送り込まれた陸上自衛隊の部隊は、都市中央に位置する広い公園に宿営地を設置していた。最初の頃は主に炊き出しとして野外炊具装置などをフル稼働させて被災者への食糧供給や、トラックに車載化されている野戦病院を展開して病人や負傷者への治療活動を行っていた。

が、内地軍がやってきてからはそれらの活動も取りやめるしかなかった。

また、最初の内に何度か起きた不運な行き違いも問題だった。

「……外科手術があそこまで嫌われるとは思いませんでした」

宿営地の司令部となつてゐる大天幕の中で、迷彩服の上に白衣を纏つた医務官の女性が意気消沈していた。

宿営地の責任者である佐官が慰めの言葉を口にする。

「仕方がない。この世界の医療水準や価値観なんて分からなかつたんだ」

天幕の中には他にも数名の幹部自衛官が会議に出席していたが、皆一様に複雑な表情を浮かべていた。医務官の失敗同様に、マリィスアの戦災者達に対して良かれと思つて行動した結果、とんでもない事になつてしまつたからだ。

まず、医務官の事例から振り返つてみると、この世界では高度な医療行為というのは基本的に？祈祷？……つまり治癒魔法に頼つてゐるのを知らなかつた。また、薬草を始めとする薬は存在するものの、飲み薬か塗り薬であり、注射という概念は存在しない。

そのため、隕石落下などで負傷した重傷者を搬送して来た際に、緊急手術を行つた時にそれは起こつた。

「父さんに何をしているのっ！？」

付き添いでやつてきていた娘が血相を変えて点滴や麻酔をする医療班に食つてかかつたのである。

それまで、命を救ふことに専念していたためか、トラックや発電機、浄水装置などが並んだ宿営地がこの世界の人間にとってどう写るのかまで考えが回らなかつた。

搬送されて来る人々にしても、宿営地の向こうにある教会が手一杯であふれたために、藁をもすぐる思いでやつてきたのに過ぎなかつた。そのため、得体の知れない服を着た連中に対する不信任は凄まじいものがあつたのだ。

娘はそして、手術室の中に並べられている医療器具を見て腰を抜かした。

手術台や照明設備、並べられたメスや鉗子、生命維持装置が、それを知らない人間にとってどう写るのか。

「き、切り刻んで悪魔の生け贄にでもするつもりなの!？」

父親を取り返そうと暴れる娘を、警務の隊員が慌てて飛んできて手術車両からつまみ出し、何とか緊急手術を終える事ができたが、そういった所から生まれた噂の類が致命的だった。

『あの公園にいる外国人達は怪我人を切り刻んで血を集めているらしいぞ』

『腹を切って中身を取り出しているのを見た者がいるんだとか』

『着ている物が気味が悪い。きっと邪教集団が何かだろう』

『やっぱり教会に運ぶのが一番だ……』

医務官の女性は若いが腕は確かだった。彼女が不眠不休で執刀した患者は一人も死なせていない。本来なら感謝されこそすれ悪評が立つ理由などなかった。

だが、この平行世界ではそうはいかない。

確かな情報伝達網もないため、噂が広がるとなかなか收拾がつかないのである。

それが原因で救える命が救えなくなったのではないか？

医務官の女性はメガネの奥でそう悔しさを滲ませていた。

教会でも大勢の人間を治療しているようだったが、少なくとも怪我人や病人が死亡しているようだった。医療知識のある彼女から見れば、外科手術や抗生物質の投与を行えば十分に救えたであろう怪我や感染症で死んでいるのが見て取れた。医者として、これほど口惜しいことはない。

「給食班はどうだ？ 久世三尉の部隊だったかね？」

佐官は医務官の女にかけるべき言葉が見つからず、苦し紛れに別の部署の報告を促した。

すると、背のすらりと高い若い青年が立ち上がった。

「はい。自分の部隊が当たっています」

久世は今は流石にエプロンは外した迷彩服姿だった。

「思わしくはないですね……」

24歳の若さで部隊を率いている久世も、医療班同様になかなか上手くいっていない実状を振り返った。

給食班は野外炊具と呼ばれる自衛隊の野外キッチンを使用して大量の食事を供給していた。戦後で家を失ったりした人々にとって、食事の有無は死活問題であると思われたからだ。実際、食事に関しては人々の手に渡り、その生命を支える事に成功していた。そういった面では医療班よりはマシかもしれない。

だが、ある問題があった。

実は作った大量の食事を被災者へ配給する作業は、作った自衛隊が行っているのではなく、教会が行っているのだ。炊飯に専念するための作業の効率化のためと、その方が素直に被災者に受け取ってもらえるからという全くの善意からだった。

だが、自衛隊がやってきてから、遠巻きにこちらを疎ましそうに見つめるだけだった教会関係者が、何故その時だけあんなに親切で協力的だったのか、後になって隊員達は知った。

そう、教会は自衛隊が作った食事を教会を頼ってやってきた被災者に、自分達が作った食事だと言って配っていたのだ。

いつも自衛隊が朝早くに教会の裏口から食事を搬入し、去ってからしばらくして神への祈りの声と共に人々の歓声が上がっていたが、今になって思えば、わざわざ人目のつかない裏口などに搬入させていたのはそのためなのだ。

久世は今日こつそりと朝に食事を搬入した後、教会前の広場を偵察してみたが、そこではでっぴりと太った高位らしき神官がこんな事を集まった大勢の被災者達に演説していた。

『神は、そして教会は困窮したる信徒を見捨てはしない！ 理不尽なる帝国の侵略を撃退した今、教会はこの守り抜いた食糧を信徒に分け与えようと思う！ さあ、神への祈りの言葉を！ そして教会への感謝を！』

守り抜いたとか分け与えると言っている割に、教会が設置している配給所に並んでいるスープの給食缶には、思いつき自衛隊の備品であることを示す桜のマークが刻印されているのだった。

そして、被災者達は口々にこう感想を漏らす。

子供を背負った若い母親が言う。

『肉入りのスープを無料でもらえるなんて、やっぱり教会は素晴らしいわ』

その夫が笑う。

『ほんとだぜ。戦争で避難先の教会に入れてもらえなかった時はどうしたのかと思っていたけどよ』

その隣で若い男が呟く。

『うまいスープだ。こんなにうまいのに、これだけ大量に毎日作っ

てるんだから頭が下がる……」

その母親らしきおばさんが忌々しげに吐き捨てる。

『それにしてもあの公園にいる外国人傭兵だか邪教徒だかはいつまでいるんだい？ 教会も一段落ついたら考えて欲しいねえ』

久世は途中から聞きたくないという思いもあつてそこで引きあげたのだった。

「自衛隊は公務員だから、その辺の損得勘定を読むのが苦手だとは言いますが……」

久世はそう言ってげんなりして報告を終えた。

大きくため息が漏れる。彼一人ではなく、そこに集まった幹部全員のものだった。

つまり、戦争でさっさと民衆を見捨てて教会に立て籠もったマイナスポイントを帳消しにするために教会は必死なのだ。そのためには、自衛隊であろうと利用しようと思つたのだらう。例えば自衛隊側が民衆に向かつて事実を語ったところで、信仰心の拠り所の教会がそれを事実無根と否定すれば、当然民衆は自衛隊の言葉など信じないであらう。その辺りの打算も折り込み済みなのだ、連中は。

結果として、どうすることもできずに自衛隊は邪教集団扱いをますます深め、しかも人々から感謝など全くされないという負の連鎖にはまっていた。

そして、泣きつ面に蜂とばかりに内地軍がやってきた。

もっと目に見える活動によって信頼を得てもらおうと、新たにシヨベルカーやブルドーザーを使用した瓦礫などの撤去作業も検討されていたが、それもおじゃんになった。

宿営地に留まってやれることは結局、実を結ばない医療活動と給

食活動なのだった。

「だあああやってらんねえええ！」

作業中止の命令が下達され、市之瀬はエプロンをむしり取るように脱いだ。

いくら災害派遣という善意の行いとはいえ、自分がやっていることが評価されないのが面白いわけがない。

市之瀬のあからさまな不快感に、周囲の先輩隊員が咎めるような視線を向けたが、久世がそれを制して言った。

「そう。やってらんない。そういうわけで……」

彼は野外炊具装置に向かうと、思いっきり電源ソケットを引っこ抜いた。

「今日はお休み！ 解散！」

いくら温厚な久世といえども、ややキレ気味だった。

部隊を解散させると、当番に当たっていた隊員達は自分のテントに戻っていく。皆、交代勤務をしていて疲労が溜まっているのだ。これから仮眠に入るようだった。

そんな中、一番下っ端である市之瀬は少しだけ残って後片付けをしていた。

彼と一緒に、責任者でもある久世も残って簡単な作業を手伝う。

「小隊長、いいですよ自分やりますから」

いくら高校生気分の抜けきっていない市之瀬とはいえ、上官の久世に作業を手伝わせるのは気が引けた。

「いや、いいんだ。僕があんな連中に任せてしまったのが原因だしね……」

「そんなこと、俺は思っただけだよ」

久世の判断は仕方なかった。自衛隊が食事を配給まで担当していたとして、受け取ってくれる被災者がどれだけいたかは分からない。おそらく、彼らを救うためには結果的にはああするしかなかったのだ。

「それより、教会の奴らが文句言ってきたりしませんよね？」

「タダで飯をくれてやったのにどうして文句言われなきゃいけないんだい？」

「まあ、そりゃあそうですけど……」

「それにね、今日休みにするのは単に嫌気が差しただけじゃないんだ。そろそろ生鮮食品については備蓄が底を突きそうなんだ。補給を受けなきゃもう作れない」

輸送艦から揚陸した補給物資の山は、確かに目に見えて減っていた。自分達が食べる分などを差し引いたとして、あと一回か二回炊き出しを全力で行えば消えてなくなりそうだ。

「缶詰とかあるじゃないすか？」

「工場で滅菌処理された、ちゃんとした缶詰の補給がこの世界で効くと思うかい……？」

市之瀬は息を飲んだ。こうして善意から炊き出し活動をしているが、使用している物資の大半は日本から……元の世界の文明から持

つてきた物なのだ。中世レベルの科学力しかないこの世界で生産したり補給したりすることは不可能なのである。上層部は、生鮮食品の補給が受けられないのなら、炊き出し活動は無理であると判断したのだろう。

「……俺達」

市之瀬は向こうにある教会を見た。そして、ぐるりと周囲を見渡す。見たこともない街並みが広がっている。

あの戦争からまだそんなに時間が経っていないとはいえ、実感としてまだまだ曖昧な事を口にする。

「異世界にいるんすよね」

久世もため息をついて答えた。

「そうだな……」

劇的な何かではない、缶詰の話でそれを実感するのは何とも地味な自衛隊らしいと二人は感じた。

それはさておき……さて、ここからが問題だ。

久世啓幸三等陸尉はすっかり静かになった自分の職場を見てそう思った。

仕事に追われている人間というのは、ふとそれが止まってしまうと、意外とどうすればいいのかわからなくなってしまうものである。幹部隊員として、こなすべき書類仕事などは膨大だが、今はとりあえず一息つける状態になってしまった。

と、背後に人の気配を感じ、振り返る。

「板井一尉……？」

そこには、すらりとした長身の女性が立っていた。陸自仕様の黒ベレー帽を被った、伶俐な印象を受ける美女だ。大人びた、久世より少し上くらいといった年齢に見えた。

板井香織一等陸尉。久世の直属の上官である。

「御苦労様。すまなかつたわ、今朝の会議にまで代理で出席させちゃったわね」

ハスキーな声でそう言うと、彼女は両手に持っていた内、片方のペットボトルを手渡して来る。

この国の暑さを配慮してか、スポーツドリンクだった。

「いいえ、防大にいた頃から中隊長の人使いの荒さは知ってますよ」

苦笑いしつつ、久世は近くのパイプ椅子に腰掛ける。

香織も動いていない野外炊具に背中を預けた。

「じゃあ、何で私がわざわざ後輩の久世くんの所に熱中症を心配してきてやったか分かるわよねえ？」

クスクスと妖艶に笑う香織の顔に不吉なものを感じた久世は、防衛大学にいた頃にシゴき倒された経験を思い出してしまい、背中に嫌な汗をかいてしまう。

ああ、だめだ……この人こういう顔する時って大体無茶振りしてくるからなあ……

二人は防衛大学での先輩と後輩の関係だった。久世は彼女が先に

卒業した時、これで地獄から逃れられたと胸をなで下ろしたものだ
が、今度は自分が卒業して部隊に配属された時に再び絶望を味わう
ことになった。

『いらつしゃい久世くん。私、待ってたのよ?』

まるで乙女の告白のような言葉を投げかけてきた香織は、防衛大
学の頃と同様に、すっかり部隊内で女帝として君臨していたのだっ
た。

「勘弁してくださいよ香織センパイ」

久世はペットボトル一本如きでこき使われては叶わないとばかり
に苦笑する。

「ダメ。勘弁してあげない。上官命令」

鬼上司、と言いたいところを我慢し、彼は彼女の話に耳を傾ける。
香織はそんな彼の律儀な態度に、目元を少し和らげたようだった。
この前にしても、偵察ヘリに彼を乗せたのは彼女の判断によるも
のだった。ただの後輩ではない。それだけ久世の能力を評価してい
るのだ。そのことを久世自身も理解しているので、断り難いのであ
る。

「……情報収集、ですか?」

「ええそうよ。情報がないから、私達はここへ上陸してから失敗ば
かりしちやってるワケ」

それは確かに一理あると久世は唸った。

医療活動の失敗、自分達のやっている給食活動が教会に利用され

た件。どれも事情というものを知らないでいたせいで起きたことだ。

「そのために、久世くんには小規模な情報収集部隊を指揮してもらって、この世界、この国の情報を集めてもらいたいワケ」

なんだかきな臭い話になってきたぞ、おい。
久世は逃げ出したくなった。

「それで、何の情報を調査せよ、と？」

「それこそ何でも良いわ。この世界の地理歴史からこの国の社会制度、この街の文化、名物に、住んでる人達の好きなモノ嫌いなモノまで何でも」

「……随分とアバウトですね」

「だから君を選んだんじゃない」

「買いかぶりすぎですよ」

彼はペットボトルを飲み干す。

南国の熱さにタオルで額の汗を拭い、一息をつく。

「ふふ」

「どうしたんです？」

「それよ、それ」

「は、はあ？」

何を言わんとしているのだろうか、この上官は、と久世はきょとんとする。

「だって久世くん、うちの中隊の小隊長の中じゃ一番若いし、それに……」

香織は彼の手から空のペットボトルを取り上げた。

「駐屯地の女性自衛官人気ナンバーワンのイケメンだもの。だからとりあえず人類の半分は味方にできるわ、きっと」

そうしてペロつと舌を出して見せる香織の顔は、まるで十代の女の子のようだった。

「じゃ、計画書を今日中にまとめて提出ね。後は任せたわ」

さっさとその場を去っていく上官の背中を見送る。

かなわないなあ先輩には……

久世は完全に観念し、疲労の余りパイプ椅子にぐでった。

第3章 道案内

「まあた俺っすかあ？」

翌朝、せつかくしばらくのんびりできると寝袋に入っていた市之瀬は、テントにやってきた久世から聞かされた任務にげっそりした。

「悪いね、どうも君以上に使い勝手の良い部下が見当たらないんだ」

かがんで彼を見る久世は苦笑するしかない。

半分冗談、半分本気だった。

市之瀬の狙撃の腕や、以前の実戦で見せた爆発的な行動力は、なかなか得難いものなのだ。また、ベテランの部下は安定感はあるものの、どうにも今回の任務には向かない気がした。それこそ、柔軟な適応能力などがある人材でなくては務まらない。そういう意味では、市之瀬は適任だった。中隊長が自分を任命したのもそのためだろう。少なくとも、頭の堅いおっさん幹部がやるような任務ではない。

やれやれ、と市之瀬よりも早起きして色々と準備までしていた久世は立ち上がる。自衛隊で最も気苦労が多いのは、実は彼のような幹部隊員だったりする。

「じゃあ、今から飯食って三十分後。 七三 に集合だ。 了解か？」
「……了解」

眠気眼をこすりながら、市之瀬は上官に答えたのだった。

さて、と。

市之瀬の寝ていたテントを後にすると、久世は任務の準備に取りかかることにする。

まず、今日の予定をプリントしたファイルを開く。

情報収集部隊の編成は二人。徒歩では行動範囲が限られるため、若干目立つが車を使用する。武装は戦時ではないとはいえ、治安や緊急事態などが未知数である以上、厳格な管理の下、護身用程度には所持することとする。決して一般市民に対して威圧感を与えるような行為はしてはならない。後は都市を東西南北に巡察し、可能な限りの情報を収集する。

「行き当たりばったりの観光みたいだな……」

とにかく最初の内はこれくらいしか思いつかない。偵察の中でも、臨機応変な判断が求められる威力偵察の類に近かった。もっとも、そんな格好の良いものではないが。

きちんと手続きを踏んで持ってきた車のキーをいじりながら、久世は公園の中を歩く。

朝のひんやりとした空気が心地よかった。

「さて……あんまり気が進まないんだけど……」

久世には実はもう一人、連れて行こうと思っている人物がいたのだった。

炊事場に近い水汲み場。

そこには一人の少女がいた。

深い海色の長髪に、白と紺色を基調とした神官衣を纏った少女だ。

彼女、リュミは誰よりも早くに起きて一生懸命に洗い物をしていった。

彼女の脇には、大量の給食缶が積まれている。

彼女には分からなかったが、自衛隊のシンボルマークである桜のマークが刻印されている給食缶である。前日、最後の配給で配られたものだ。返却するために炊事場に置かれているのだが、使用後の給食缶の洗浄も教会は全て自衛隊に任せていた。

だが、リュミはそれではいくら何でも失礼に過ぎると思っていた。何より、罪悪感があつたのだ。

そう、教会が被災者への給食活動を手伝うと申し出た時、自衛隊へ働きかけたのは他でもないリュミだったのだ。

無論、それはリュミの純粋な善意と使命感からだった。

当初、猛烈な反発が教会内部では巻き起こった。

異教徒の作る食べ物を信徒へ配るなど神への冒瀆である、と。

この話は大司祭の耳にまで入った。

ゲルオド大司祭。この王都の教区を統括する最高人物である。

彼はでっぴりと太った腹を怒りと屈辱に揺らしながら、協会関係者の集会で叫んだ。

『確かに、異教徒とはいえ戦後で食糧の供給が心もとない今、食糧を融通してくれるのは有り難い。だが、教会には異教徒へ渡す金や宝物など持ち合わせていないのだ！ 愚かで邪悪な異教徒共のこと、いったいいくらふつかけられるか分かったものではない！』

リュミは彼女を信じてくれる少数の尼僧達と共に必死になって訴えた。

『大司祭様！ それは違います！ あの方達は無償で良いと仰ってくれているのです！』

『む、無償！？ タダで異国の人間を助けるというのか！？ 何の

裏がある？ この教会に眠る宝物か、それとも文献か？ 何を欲しているのだ！』

『彼らが欲しているのは、ただ救われぬ者達の平穩だけなのです！ 私はあの方達を知っているのです！ どうかお任せを！』

彼女の言葉に、大司祭は最後は折れた。

彼女は自分の熱意が通じたことに安堵した。事が自分の手を離れ、どこかおかしな調整が行われていることに気付けなかった。

そして、あまりにも遅く彼女は自分が異界の人々を裏切ったことに気付いた。

彼らはもう気付いているだろう。

怒り狂い、武器を手にもち向かって来るのではないか？ リュミにはそれが不安だった。

そして、そんな自分の恐怖心が先に立ったことを自戒した。

（私は……命まで救ってもらいながら……！）

彼女はあの戦いの中、異世界の戦士に命を救われた。

黒竜に勇猛に戦いを挑み、勝利した勇者を知っていた。

彼らの義に厚く、弱者の側に立って戦う心意気を知っているはずだった。……無論、自衛隊員達が場当たり的に戦闘に巻き込まれたことなど、彼女に分かるはずもなかった。

だが、まだ幼い少女には、大司祭に対して過ちを正すなどという大それたことをするのは酷というものだった。

彼女は、無心で給食缶を洗った。

白い手先がボロボロになっても構わなかった。毎日、疲れ切った顔をして食事を届けに来る彼らのことを思えば、何の苦でもない。

信仰は違えど、根底に流れる何かは、きっと同じ……

彼女はそれを思うと、余計に胸が痛むのだった。

と、背後に誰かの気配を感じた。

同室のファナかしら……？

彼女は何となしに振り返った。

ファナは今回の働きかけに関しても何かと自分を手助けしてくれた。だから、これ以上は世話にはなれなかった。手伝いに来てくれたのだったら休んでいてもらうように言わねばならないだろう。

相手の顔を見た瞬間、リュミは息を飲んで固まった。

「やあ、おはようございます」

若い男の声だった。

そこにいたのは、ファナではなく、奇妙な異世界の国の戦士の服を着た青年。

「ひあつ！？」

リュミは声にならない悲鳴を上げてその場に尻餅をついた。

彼の顔に見覚えがあったからだ。他でもない、彼女はこの青年に話を持ちかけ、今のこの有様を作りだしてしまった。

彼の顔に怒りの色は見えないが、異世界の人間の考えていることは不可解なことが多い。彼女には彼が何を意図してここへやってきたのかが分からなかった。

分からないものに対して、人間は本能的に恐怖を抱く。

「大丈夫ですか？ すいません、こんな朝早くに訪ねてしまって……」

彼は彼女の前へ立つと、そつと手を差し伸べて来る。

リュミはその手を取ることができなかった。

「ど、どうして……」

「え？」

「わ、私は……あなたを裏切ってしまったて……」

久世は頭を掻いた。

「まあ、受けた自分としても手痛い失態でしたけど」

ふう、と彼は苦笑した。

リユミは呆然とその笑みを見る。

「君みたいな女の子がやらかしたことにいちいち目くじら立ててちや自衛官なんざやつとれませんよ」

そもそも、一刻を争う状況だからと、十代の女の子の言う事をいい大人がホイホイと聞いてしまったのがそもその間違いなのだ。自衛隊指揮官として、責を彼女に求めるのは言語道断でさえあった。自省できない人間に指揮官は務まらない。

照れ隠しに、ぐい、と少し強引に彼女を引き起こす。

「あつ……！？」

リユミはさりげなく尼僧としての禁を破ってしまったことにハッと
とする。

「い、いけませんっ！」

彼女は驚きに反射的に手を振り払ってしまった。

「わっ！？」

久世が驚いて後退った。

未婚の男性、それも若い男性と身体を触れあわせることは禁じられているのだった。

「す、すみません、驚いてしまつて……」

彼女は彼にまた失礼を働いてしまつたと慌てる。

久世は「またやつちまつたかなあ……」と彼女に聞こえない声でボヤいてから、脱帽して頭を下げる。年端もいかない少女を怖がらせてはいけない。

「いいんですよ、こちらこそ無遠慮で申し訳ない」
「そ、そうですか？ あ、ありがとうございます」

久世の柔和な笑みに彼女はホツとする。
でも、禁を破ってしまったことはどう懺悔すべきだろうか。

（……そ、そうだわ、善意ですもの）

他者からの善行を拒否するのも禁だつたはずだわ、と彼女は無理矢理自分を納得させる。

とりあえず、彼が自分に怒りを訴えに来たのでないことに胸をなで下ろしていたのだ。

でも、じゃあ何のために私に会いに来たんでしょう？

彼女は小首を傾げて目の前の久世を見つめた。

「ちよつと頼み事がありましたね」

久世は自分がまた公務員らしくない行動に出ようとしていることに、内心でため息をついた。

「頼み事、ですか？」

少女の無垢な表情に意味もなく罪悪感を抱いてしまう。

……これってあれかな？ 未成年者略取とかに問われたりしないのかな？

そんなことが気になってしまう。

あの鬼上司の命令を達成するのに、まともな公務員の間までいるのは基本的に無理な話なのだった。

仮のモータープールにしてある宿営地の外れ。

久世は一台のパジエロを前にして隣の部下に尋ねた。

「市之瀬、君免許持ってたっけ？」

「……原付のなら」

オーケー、運転手もどうやら自分がやるハメになった。

久世は自分の浅慮にうんざりしながら運転席のドアを開ける。

「じゃあ、リュミさんも乗ってください」

自衛隊のジープ車両を前にする神官の少女というシユールな絵だ。しかし、リュミは目の前の鉄の箱を前にしてきょとんとしている。

「あ、あのう……どうやってこれは開ければよろしいのでしょうか？」

そうだった。

この世界に自動車なんてものは存在しない。

きつと彼女には、運転席だとか助手席だとか後部席だとかも分らず、しかもどうやって乗り込むのかさえ知らないのだ。
市之瀬が苦笑して彼女のために後部ドアを開けてやる。

「はい、ここに座って」

「ありがとうございます、イチノセ様」

リュミはあの城での戦闘で出会ったため、市之瀬とも面識はあったのだ。

少しでも知り合いに頼みたいというのはこちらの都合だった。

だが、リュミはリュミで、自分に役立てることがあるのなら快く引き受けていた。

（自分で頼んでおいてなんだけど、彼女悪い奴に利用されやすいタイプだ……）

久世はそんなことを考えながらキーを回す。

バックミラーで彼女を見ると、突然起こった振動に驚いていた。

「きゃっ！？ う、動いた？」

更に車がバックして動き始めると、目を白黒させて見渡している。

「……引く馬も地鳥もないのに？」

彼女は荷車が自走しているのが不思議で仕方がないようだった。

「とりあえず、内地軍の検問を抜けよう」

久世がリュミを連れて来たのには知り合いだからという以上の理

由があつた。

目的も定かにせずに宿营地を囲んでいる内地軍の検問を突破するには、彼女の存在が最適だと思われたからだ。

日本でも、かつては随所に関所があつた時代があつたが、そういった時に詮索も受けずに通ることができる身分がいくつかあつた。

大道芸人と、聖職者である。

特に、この国での教会の威光はかなりのものようだ。

リユミがいれば、おそらく……

「と、止まれ！」

少しばかり走ると、検問にぶち当たつた。

中世の騎士を思わせる格好の内地軍の兵士達が殺気立つた様子でこちらを睨んでいる。

マリースアの王都駐留の兵士はもつと軽装で、文化様式も南方風の武装をしているが、内地軍はどうやら違うようだ。

非マリア人が多いから、と道すがらリユミが教えてくれた。ちなみにリユミ自身は非マリア人で内地の出身だという。だから、久世の目論見は予想外にうまくいきそうだと笑みを見せた。

「御苦労さまです」

「なっ！？ 光母教の神官殿が何故こやつらの乗り物に！？」

案の定、内地軍の将校らしき男に戸惑いの色が浮かんた。リユミは柔和に笑みを見せる。

「はい。こちらの方々があの船に帰るといので、私が責任をもつて港までの道案内を」

内地軍の末端の兵士達も、自衛隊が医療活動や給食活動をして市

民を救っているという情報を得ていない。

なら、今はそのことを逆手にとろう、と久世とリュミは示し合わせていた。

「何と！ 貴女のような乙女がこやつらの監視を……」

「とんでもありません。聖職者としての義務です」

リュミは内心ヒヤヒヤしていたが、なんとか平静を装っていた。自分の持つ身分を利用するのは初めてのことだったからだ。

「そういうことならば、我が軍からも一人同行させましょう。騎士として、乙女一人を蛮族の中に置いておくことなどできません」

が、信用があり過ぎるのも考えものだった。

久世はまずいことになったと焦る。

しかし

「私は前の戦いで王城に立て籠もった神官戦士の端くれ。戦友は皆ヴァルハルへと旅立ちました。私の戦士としての力量に疑問をお持ちだと？」

リュミは今までに見せたことのない鋭い表情と口調で内地軍の騎士を睨んだ。

兵士達に動揺が走るのが面白いように見て取れた。

聖職者の不敬を買うのは、神からの不敬を買うのと同じなのだ。少女といっても、それは変わらない。

「と、とんでもありません！」

騎士は後退ると、深々と腰を折って頭を下げる。

「貴官には貴官に与えられし任がある。私への助力は不要にございます」

リュミは冷たくそう口にする、久世にちらりと目配せをした。

（今です！）

久世は相手が怯んでいる隙を突き、アクセルを踏んで正面をこじ開けた。

槍を手にした内地軍の兵士が悲鳴を上げてパジェロを飛び避ける。しばらくは、公園を抜ける道が続くようだった。

「……なんとかなった」

久世と市之瀬がぐったりとする。

「リュミちゃんすげーな！俺より年下とか信じられねー」

市之瀬が助手席から後部座席を見やる。

「あわわわ……私、何てことをしてしまったのかしら……」

後部座席のリュミは、目を丸くして青い顔をしていた。やはり、根は真面目な少女である。

「すみません、何かあったら責任は取りますので」

久世がなんだか色んな人を色んな事情で巻き込んでいることになりにする。

「……久世三尉、ここんとこんなか責任取らされてはっかですね」
「そりやおめえのせいだろ馬鹿野郎！」

誰一人まともな心境でいられない車が、異世界の街へと進入して
いくのだった。

第4章 街の中で？

レティアは朝になると店の準備を始めるのが日課だった。

彼女は今年で一七になる少女で、いわゆるこの店の看板娘である。金髪を一束に纏めたポニーテールに、動きやすいエプロン姿が彼女の快活な性格を良く表していた。

テーブルを拭き終わると、今度は厨房だ。

竈の火を起こし、スープなどの支度にかかる。

忙しくそれらの準備を進める彼女だが、何も今まで看板娘の自分だけでこれらをこなしていたわけではない。

彼女は一段落がついた辺りで、なけなしの貯金で買ってきたパンと、できたばかりのスープをお盆に載せて三階へ上がる。

「父さん、具合はどう？」

部屋に入ると、全身に包帯を巻いた彼女の父がベッドに横になっていた。

そう、本来なら父と娘の二人で切り盛りしていた店なのだ。

ここ、『海狼の毛皮亭』は、小さいながらも中央広場の一角に面したそれなりの立地の大衆食堂だ。日中は一階が食堂となり、夜は酒場ともなる。二階は旅人向けの安宿で、三階が親子の住まいという、この世界では割とよく見られるスタイルの食堂である。

「ああ、大分いい。そろそろ立てそうだ」

父は筋骨隆々の、厨房に立っていなければ戦士にしか見えない男だった。そのためにレティアはよく母親似で良かったと常連から言

われる。

だが、そんな父も、『流星の目』による破壊の前には無力だった。戦火から逃れようと教会へ向かったが、堅く門を閉ざされ避難できず、街の中を逃げ惑っていた時に、隕石の欠片が降り注いできた。レティアを庇い、彼は犬怪我を負ったのだ。

「良かったあ！　きっと神のご加護だわ」

彼女は安堵して笑みを浮かべた。

母を病で亡くした彼女には、肉親はもう父だけなのだ。

「はい！　朝御飯だよ」
「すまん」

いかつい顔の父は少し照れくさそうに娘からお盆を受け取る。
彼女はそっとベッドに腰掛けた。

「ホント、あんな気味の悪い連中に何かされちゃったから、どうなっちゃうのか心配だったんだ……」

朝食を食べていた父が、ふと気になったような顔をする。

「なあ、レティア」

「なあに？」

「父さんが、昔軍にいたことは知ってるな？」

「うん。母さんともそこで出会ったんだよね？」

その母の面影を確かに持つ娘を見つめ、彼は疑問を口にした。

「ああ、そうだ。母さんは怪我人の看病に当たる仕事をしていたん

だ。でもな、普通、これだけの怪我をして助かるなんてことはまずなかった……」

自分が助かったことへの疑問に、娘はぎよっとする。

「な、何よ父さん！？ 死んだ方がよかったわけ！？」

「そうじゃない。この左足にしてもおかしいんだ。あれだけズタズタになっていたのに、しっかりと傷口が塞がって化膿もせず治りかけている……切断しても助かるかは微妙だというのに」

彼は過去の軍での経験から、この世界での負傷によって命を落とす確立を肌身で知っていた。

そう、この世界の医療水準は極めて低い。

現代世界なら常識でしかない、消毒一つまともにできないのだ。些細な傷から感染症にかかって命を落とす者は珍しくない。彼には自分の怪我の具合で五体満足でいられることが不思議なのだった。

それが、適切な消毒措置に手術と輸血、更に抗生物質の投与によってもたらされた奇跡なのを知る由もない。

「だから！ 神様のご加護なのよ！ きつと教会で追い払った代わりに命をお救いになったんだわ！」

「……そうだな、そうかもしれない」

「あんな緑色の変な服を着た外国人達からも守ってくださったのよ？ これが治ったら、ちゃんと礼拝に行ってお布施もしなくちゃ」

「う、うむ……」

腑に落ちない何かを感じながら、彼は愛娘の作ってくれた朝食を口にすのだった。

自衛隊仕様のオリーブドラブ色のパジェロが一台、市街地を徐行運転で走っていた。

理由は簡単、危険だからだ。

交差点に信号機がない。標識もない。車道と歩道が分けられてない。人が当たり前のように車両の前を横切る。

まともにアクセルを踏んで走行するのは自殺行為、いや他殺行為である。

ノロノロと最高時速20キロ以下で走らせ、何かあれば停止する。

「車の意味あんまなくないすか？」

「うっさい。いっぺん計画書やらの作成してみろ」

徒歩で歩き回るなんて計画書を板井一尉に提出しようものなら、

『それで集められる情報の量は確保できるのかしら？ リスクと対比した場合の車両なしの根拠は？』

と突き返されるのがオチだ。久世は上司との折り合いという仕事の難しさを骨身に染みて知っていた。

「……でも、やっぱり通りに人が少ないです」

リュミが悲しそうな表情で通りの風景を見つめる。

「前にもっと多かったですか？」

現地の人々に威圧感を与えない、という計画上、クラクションを鳴らすことができずに停車したところで久世が尋ねる。

「はい。こちらへんからは中央広場に近いですし、市が定期的に開催もされているはずなんです。でも、今は行商人の姿も少なくて……」

久世は周囲を見渡す。

この辺りは隕石の欠片が直撃して大きな被害を受けたらしく、人影は確かに多いとは言えなかった。

「とりあえず、その中央広場というのに行けばいいんですね？」

「そうですね、中央広場を基点に街の東西南北を回った方が分かりやすいかと思います。私がこの街へ来て間もない頃はそうやって街を覚えましたし。あ、そうですね！ とても良いお店を知ってるんですよ？ 朝食でもそこでどうでしょう？」

「良いっすね！ 朝なんてカンパン食っただけだから俺腹ぺこぺこで……」

「じゃあ、そこでちょっと一息入れましょうか」

リュミの丁寧な説明は道案内に最適だった。元々が、多くの人々に神の教えを説く立場にある聖職者だけあって、そういった説明する力が高いのだろう。

とりあえず、人選だけは間違っていなかったことに安堵しながら、久世はノロノロと車を運転する。

すると、気になるものがあつた。

「武装した集団が時々いますが、内地軍の増援ですか？」

リュミがぎょつとした様子で久世を見た。

「とんでもありません！ 彼らはハゲタカですよ！」
「ハゲタカ？」

市之瀬も思わず後部座席を見やる。

「あれは傭兵達です。戦争の臭いを嗅ぎつけてこの街へやってきたんでしょう」

リュミにしては珍しく、忌々しげに語る。

向こうでは、傭兵らしき武装した一個小隊ほどのグループが、まだ陽が昇ってそう時間が経っていないというのに、酒を飲みながら通りを我が者顔で歩いているのが見えた。

彼らは下品な笑い声を上げ、道行く一般市民を威圧するように怒鳴ったりしている。

さっきの内地軍のような統一された武装などではなく、雑多な服装や武器を携行している。見ただけの印象だけで言うなら、人相もまともではない輩ばかりに思えた。

リュミのような他者に対して純心な少女が指して「ハゲタカ」と形容するのだから、よほどの嫌われものなのだろう。

「……もしかして、マリースア軍に加わる予定だったのがアテが外れたから気が立ってるとか？」

傭兵というのなら、雇い主を求めてやってきたのだろう。

久世はなんとなしに聞いてみたが、リュミは首を横に振った。

「いいえ。違いますわ、クゼ様」

リュミははっきりと傭兵達に軽蔑の眼差しを向けて言った。

「彼ら、帝国軍に加わるつもりでやってきたんです」

久世は再び、「なるほどね」とため息をつくように言ったのだ。

レティアはその日、あの戦争以来初めて店を開けた。

地元の人達の憩いの場でもあるこの『海狼の毛皮亭』を早く再開して、元通りの街の姿を皆に思い出して欲しかったからだ。それに、何より父の怪我が快方へ向かい、精神的にも楽になった。

まだ食糧の供給が十分でなく、昼飯時だけの営業になるが、とにかく、戦後の第一歩を踏み出したかった。

「うしっ！ これでいいわ」

彼女は本来は父と一緒にであるはずの中、一人で全ての支度を整え、軒先に看板を『営業中』の意を表すように吊り下げた。

「はぁーい！ いらっしやいらっしやい！ マリースアーおいしい食堂が再開したよぉ！」

レティアはそう元気よく広場に向かって叫んだ。

まだ人通りはまばらで、戦争前の活気には遠く及ばない。

それでも、誰か来客があることを期待して、彼女は元気いっぱい笑顔を見せた。

「さてと」

彼女は店内へ戻ると、忙しく皿拭きなどの仕事へ戻るのだった。

隕石の落下でかなりの枚数の皿が割れてしまい、無事だったものも埃にまみれてしまった。そういったものを減らしていく作業が残っている。まあ、今の状況で店が満員になることはないだろう。彼女はゆつくりと、丁寧に戦災を逃れた食器を磨くのだった。と、しばらく経った頃、奇妙な音が外で聞こえた。

ブロロロロ……キツ！

耳にしたことのない変な音だった。

一瞬、旅の芸人がどこか遠い国の鳥の鳴き声のマネでもしているのかと思ったが、客への呼び込みもなしにそんなことをするわけはない。

……一体何の音なのかしら？
そう思って耳をそばだてていると、店の近くで誰かの声が聞こえる。

「こんなとこ停めて違反切符切られないすかね？」

「駐車禁止の標識はないんだからいいんじゃないか？」

「大丈夫ですよ。この辺りはよく馬車が止まっていますし」

若い男二人と、少女の声だった。

レティアは、少女の声には聞き覚えがあった。

（この声っ！？　もしかして）

彼女がはつとすると同時に店内に一人の少女の姿が現れた。

「ごめんください。今お店やっていますか？」

「リュミ司祭様！」

レティアは歡喜の声を上げて飛び出していた。

「あらレティアさん。良かった、ご無事でしたのね？」

リュミもレティアの顔を見て笑みを見せる。

「はいっ！ ああ、本当良かったわ！ 司祭様が今日一番のお客様だなんて」

「そんな……それに私はまだ司祭見習いですよ？」

「もう！ そんなご謙遜を。あ、どうぞお座りになってください。どのテーブルでもよろしいので」

レティアは嬉しさのあまり飛びはねそうになっていた。

リュミは以前からこの食堂を利用してきている常連だ。

聖職者だからと気取らずに下々の人に対しても教えを説き、悩み事の相談にも乗ってくれる彼女の存在は、敬虔な信徒であるレティアにとってはそれこそ聖女のように見えていた。彼女の中では、リュミのお陰で父が快方へ向かっているのだという構図が勝手に出来上がっている。

レティアがそうして一人興奮しているところへ、男の声がかけられた。

「リュミさん、その方はお知り合いです？」

「え？」

レティアが声の方を振り返ると、彼女は息が詰まるかのような衝撃に襲われた。

そこには、緑色を下地に小汚い茶色や黒の斑点模様の服を着た、

あの不気味な邪教徒だか、傭兵だかの姿があつたのだ。

「し、司祭様お下がりになって！」

レティアは咄嗟にリュミを庇うように前へ出た。
そして、キツと目の前の男達を睨む。

「な、何しに來たのよこの邪教徒共！？」

「じゃ、邪教徒？」

レティアの剣幕に、二人の男がぎよつとして顔を見合わせる。
すると、慌ててリュミが彼女に言った。

「ち、違うんですレティアさん！？ この方達は私の恩人で……」

レティアはこの状況に恐ろしい何かを感じ取った。

リュミ司祭はともお人がよろしいお方だ。

きつと、こいつらにもお慈悲や説法をと近づいてしまったに違いない。

そして、自分の父のように恐ろしい目に遭わされてしまったのではないか……？

「司祭様ダメです！ こんな奴らの口車に乗ってはいけません！
はっ！？ もしや司祭様にこいつら洗脳の魔術でもかけたんです！
？」

勝手にヒートアップするレティアに、久世と市之瀬は何か見ては
いけないものを見ている気分になる。なんというか、怖いのである。

「ち、違うんですよ！」

食堂の中に、リュミのおっとりとした悲痛な声が木霊したのだった。

街の中で？

テーブルの上に、よく磨かれたガラス製のコップが置かれた。
中に入っている水も澄んでいるのが分かる。

「どうぞ、お水です。司祭様」

「ありがとうございます、レティアさん」

リユミは両手でそつとコップを手にする。

レティアはもう二つ、コップを盆から取り出すと、今度は乱雑に
テーブルにブチ置いた。

ドスの効いた声で言い放つ。

「ほら、司祭様の下僕だか奴隷だか知らないけど、同じ席に着ける
だけ有り難いと思いなさいよ」

そのコップは高価なガラス製ではなく、安価な木製のものだった。
しかも、年季が入っているのか、どこことなく木の腐った臭いが鼻
を突く。

中の水もよく確認してみると、何か不純物が浮遊している、お世
辞にも綺麗とは言い難いものだった。

きちんと水売りから購入した水と、その辺の洗い物用の井戸で汲
んできた水の違いである。

「そ、そりやどうも……」

久世と市之瀬はとりあえずそのコップを手に取るが、流石に口は
つけず、互いに目配せをして示し合わせると、レティアが目を離し
た隙に窓の外へ中身を投げ捨て、代わりに自分の腰の水筒の水を入

れた。

リュミはそんな二人の早業を見なかったことにして、必死になってレティアがまたあからさまな嫌がらせに出ないか気を揉む。

結局、リュミは久世と市之瀬を命の恩人だ、と説明したのではレティアが納得しないことに断腸の思いで進路変更し、『この二人は異国からやってきた改宗希望者で、自分の下につかせて教育中である』という苦しい説明で納得を引き出すに至った。

リュミはまだ十代だというのに、既に胃が痛くなりそうになっていた。きつと、料理もまともな味がしないことだろう。

「す、すみません……クゼ様、私……」

「いいえ、礼はこっちが言うべきですよ」

久世は苦笑いしてリュミの言葉を遮る。

別に皮肉を言っているわけではない。リュミがいなければここまでやってくることはできなかったし、何より店に入れてもらえなかったわけだからだ。

だが、久世はリュミに対しては悪意はなかったが、『教会』そのものに対してはかなり不信感を募らせていた。

リュミが少し説明してくれたが、ゲルオド大司祭とかいう男はかなりの策士であり、同時に自己中心的な人物であることが透けて見えた。

自衛隊が何のバックも持たないことを本能的に察知し、教会の威光があればいくら利用しても大丈夫だと足下を見ている。

教会のお陰で、この店の店員、レティアとかいう少女のような人々から誤解されたままで見ているのは、いくらなんでもまずい。

さて、どうしたものか。

自衛隊の武装集団としての力を見せつけて屈服させるのが一番手っ取り早い仕返しだし、内地軍に対しても文句を言わせない効果にも繋がる。それこそ、戦車でも繰り出して脅しをかければ良い。

だが、それをしてしまえば明確な敵を作ることになる。何よりこの国の人々の心の拠り所を攻撃してしまえば、このマリーシアの全国民が今のレティアの比ではない自衛隊への敵対心を持つことになる。

（その辺りまで織り込み済みで利用してるんなら相当だな、教会の上層部は）

そもそも、武力をちらつかせて相手を屈服させるなど、考えてはみても、とてもではないが現実的とは思えなかった。自衛隊がそんな手段に訴えたことは歴史上一度もないし、自衛官自身、そんなヤクザみたいな方法を公務員組織である自衛隊がやるという発想に繋がらない。久世自身、本気で戦車を繰り出して脅しをかけようと思っているわけではない。

自衛隊という軍隊は、『抑止力』ではあっても『武力外交の手段』としての役目を負わされていない珍しい軍隊なのである。軍隊と外交がイコールである場合が多い中、ある意味では世界に例がない。

では、どうするのか……？

久世が思索していると、目の前に皿が降りてきた。

「ほら、食べなさいよ」

ぶっきらぼうな口調だったが、皿に盛られた料理はなかなかおいしそうだった。

それも、一皿ではない。次々と運ばれて来る。

海に面しているだけあって、魚料理が主だった。

リユミは料理については誠実なレティアにホッと胸をなで下ろした。

「さ、どうぞクゼ様、イチノセ様、冷めないうちに」

「冷めないうちというか、あの店員さんの気が変わらない内にですね。あ、そうだ」

久世はそうこぼしながら、ふと任務のことを思い出す。

ポケットからデジカメを取り出すと、料理を手早く撮影する。

ピピッ カシャッ

この世界での食文化の理解もバカにできない重要な任務だ。国や宗教によっては禁忌とされている食べ物やマナーがある可能性もあるのだ。その辺のリサーチもここで生活していく上では重要だった。本来なら、給食作業前にやっておくべき事だったが、これに関しては教会が出せないようなものは弾いていたと樂觀することにする。

「クゼ様、それは何をしてるんですか？」

久世が取り出した小さな箱形のモノから、小鳥のさえずりのような音が聞こえたことにリュミが小首を傾げている。

「ちょっとブログに載せる写真を撮ってたんですよ」

冗談めかして久世は答えたが、彼女はぽかんとするばかりだ。

彼は苦笑すると、撮影した写真を再生して彼女に見せてあげることにした。

「ま、まあ！？こんなに綺麗な絵をいつの間に！？」

リュミは静止画を絵と勘違いしたのか、しきりに被写体の料理とデジカメの画面を見比べている。

「それはカメラって言って、風景や物をそのままの姿で記録できる機械ですよ」

「ま、魔法の念写のようなものですか？」

「魔法でそんなことできるのかは分かりませんが、まあ似たようなものじゃないですかね？」

「不思議ですねえ……念写だったら長い時間意識を集中していなければいけないのに、こんなに簡単に姿を写すことができるなんて……」

リュミはしげしげとデジカメを観察している。

久世はそんな好奇心旺盛な尼の少女に微笑ましいものを感じつつ、皿に盛られた料理を取り皿に移した。

朝飯にしては重そうな料理が多いように見えるが、それは土地柄らしく、リュミはそれほど気にはしていない様子だった。

魚の蒸し料理を試しに食べてみるが、日本人の感性からいうと少し味が濃いものの、比較的あっさりとしている。塩鮭の代わりと思えばいけなくもない。

何より、久世も市之瀬も肉体労働を仕事にしている若い男性だけあって、多少の塩気や脂っ気は必須である。過去の日本の戦国時代でも、粗食だったのは特権階級だけで、最前線で戦う下級武士達の料理はかなり濃い味付けだった。若い自衛官二人には調度良い。

「うつま！ こっちの鶏肉もイケますよ久世三尉」

「ああ、ここんとこおにぎりか缶飯ばっかだったから格別だな」

二人はしばし任務のことなど忘れてこの世界で初めて口にする料理を楽しんだ。

リュミも自分のチョイスした店の料理を気に入ってくれたことが嬉しかったのか、自分もちままとサラダをつつき始める。

「どうです、司祭様？」

「ええ、とてもおいしいです。お店、再開できて本当に良かったですね」

レティアが満面の笑みを浮かべてリュミに「こちらはサービス」と追加でフルーツの盛り合わせを差し出す。

「そ、そんな、いただけませんわ」

「あはは！ いいんです、せめてもの恩返しですよ！ ……私もこの間まで、教会の炊き出しのお世話になってましたから」

ピタリ、と久世と市之瀬の動きが止まる。

リュミは引きつった笑みを顔に貼り付けたまま固まった。

レティアはリュミしか視界に入っていないのか、神妙な表情で語る。

「私だけじゃない、食料が手に入らなかった戦後間もない頃なんて、教会からのあの配食がなければみんな飢えてました。私なんて、父さんが動けなくて、でも食べ物も少なくて、本当に心細かったのに、リュミ司祭達教会の方々は食料どころか料理にまでして私達に配ってくれて……私、料理人だから分かるんです。あんなにたくさんのお食事を毎日作るのがどれだけ大変かって！」

感極まった様子でレティアはリュミの両手を握る。

「私、今度食事を作ってくれていた人達にお礼がしたいです！ とってもおいしかったって！ そうそう！ 見たこともない料理とかもあって、あれってレシピ教えてくれませんか！？」

レティアはその料理の事を思い出し、えもいわれぬ表情になる。

「ほくほくのお芋とニンジン、それにタマネギが入っていて、それにトロトロの牛肉が、どうやってあんな絶妙な味を出したのか分からない煮汁の中に入ってる料理！ あれだったら、うちでも作れそうなんです！」

（肉じゃがだな……）

（肉じゃがつすね……）

自衛官二人だけが納得する。

肉じゃがは元々、明治時代に日本海軍において、軍隊で多用する食材で西洋料理のビーフシチューを再現しようとして発明された料理である。そのため、現在でも自衛隊ではカレーと並んでメジャーな料理だ。『お袋の味』というのは戦後に定着したイメージで、実際は『兵隊さんのメシ』なのである。大量生産に向いているので、今回の炊き出しでも作ったのを久世と市之瀬は覚えていた。

「ほら！ その二人！」

「え？」

レティアが三白眼で久世を睨み、ズビシッと指を指す。

「教会の人の爪の垢を煎じて飲みなさいよ！？ 全く、あんたら何しに來たのようちらの国に！ 傭兵なんだつたらとつと余所行きなさいよ！ 邪教徒ならここで布教したって無駄なんだかね！」

「それは……こっちが聞きたいことなんですよ、実際……」

久世は苦笑して彼女の料理を無心につつく。

市之瀬も、上官がそうするならと目を伏せた。久世には迷惑をかけっ放しな手前、ここで彼女に反論するわけにもいかない。

レティアは久世がどんな嫌味を言っても怒らないことにふと我に返る。

「……ま、まあ、リユミ司祭の下にいるんだから、しっかり学びなさい、よ」

レティアはバツが悪くなって腕を組んで目を逸らす。
さつきから、こいつらは一体何なのだろう？

大衆食堂で物心ついた頃から働くちゃきちゃき娘の彼女にとって、
こういった男は珍しい存在だった。普通、ここまで言えば怒ってつかかって来るか、嫌気が差して出ていってしまうはずだ。レティアの快活な性格は、そのことまで分かった上で言っている。
だが、この男達はそうしない。受け入れ、黙って耐える。

（な、何よ！ あ、アタシじゃ怒る気にもなんないっての？）

彼女は久世をちらりと盗み見た。

……傭兵、というには、何か違う気がした。

確かに、身につけている服は小汚さが感じられる奇妙なものだが、それはあくまで服の模様だ。服そのものに不潔感はない。傭兵のよ
うに身だしなみにだらしなさがないのだ。

それは言動や態度にも表れている。本当に粗野で下品な傭兵なら、
ここまで大人しいだろうか？ 戦場から戦場を渡り歩き、状況が許せば略奪や虐殺を好んで行う連中には到底見えない。

かといって、商人や、ましてや聖職者には見えない。
なら、何をもって形容となすのか。

レティアの脳裏には、一つの直感しか浮かばなかった。

正規軍……それもかなり高度に訓練された軍人……

それは父がかつては軍人であり、職業軍人が身近であったことから直感できたに過ぎない、曖昧な感覚だった。

（そ、そうよ！　そもそも、軍人とも思えない格好してるじゃない！）

レティアは益々、この奇妙な外国人達のことからなくなった。そんな連中が、リユミ司祭と行動を共にしている理由も皆目見当が付かなかった。

なにか、自分では想像もつかない事情でも抱えているのだろうか？　そう思った時だった。

きやああ！

外で悲鳴が上がった。

店のすぐ外、中央広場だ。

全員が窓の外を見た。

そこには、一見するだけでそれと分かる傭兵の集団がいた。

「おらあ！　見せもんじゃねえぞ！　散れ散れえ！」

男達は周囲で朝の市を始めようとしていた商人や地元の人間に向かって剣を振り上げて威嚇している。

一体何があつた？

久世を含む全員がそう思う。

そして、傭兵達がある人物を囲んでいることに気がつく。

「よお姉ちゃん、俺達にケンカ売ってタダで済むと思ってんのか？」
スキンヘッドのいかにもな顔をした大男が、棍棒で肩を叩きなが

ら目の前の女に向かって言った。

そこには、ローブを頭からすっぽりと被った長身の人物と、その人物にすがりついて震えている少女の姿があった。

「うつさいわねえ。タダじゃないならいくらで済むのよ？　アタシ路銀尽きて昨日からなんも食ってないんだけど？」

ローブの人物は声からして女性のようにだった。

二十人はいる傭兵に囲まれても、まるで怯んだ様子もなく、傍らに少女を抱いている。

長身の女にすがっている少女を見て、レティアが血相を変えた。

「ファルアちゃん！？」

その少女は近所のパン屋の娘だった。

つい今朝方にも、パンを買いに行った時に会ったのだ。

歳の近い、レティアにとってかけがえのない友達である。

「ひやははは！　そいつあ俺達も同じだあ。帝国軍が思いの他弱かったみたいでよあ。稼ぎのアテが外れて喰いっぱぐれてんだ」

大男の言葉に、長身の女が冷たい口調で言った。

「……んで、だからこのコからパンとついでに純潔まで奪おうってしたワケ？」

傭兵達が爆笑した。

食いつぱぐれていると言つ割に、彼らはほとんどが酒に酔っているようだった。

「なあに、どの道もう少しすりゃあ別の稼ぎ場を探す予定だったんでな、去り際にちよいと土地のものを楽しみたくなるのが人情ってもんだろっ？」

戦場での非情に浸かり過ぎて、もはや善悪の境界線がすり切れてなくなつた連中。そんな連中なのだった。

「あ、ああ……なんてこと……」

レティアが顔面蒼白になっていた。

この辺りは宿泊施設が多く、それでいてこのところは内地軍の巡察が少ないせいもあって、傭兵達の姿が多く見られたが、こんなことになってしまふとは。

助けだそうにも、武装した二十人が相手ではどうすることもできない。

自警団の類もないわけではないが、娘一人のために戦争屋を相手に動くかどうか。

それにしても、あの長身の女は一体誰なのだろう。

レティアがおろおろしていると、その隣で誰かが席を立つた。見ると、真剣な表情を浮かべて、あの奇妙な服を着た二人が立ち上がっていた。

「……放っておくわけにはいかない、か」

「元々は治安維持のための国連軍所属なんでしたっけ、俺達」

訳が分からない会話をする二人を、彼女は呆然と眺める。

「市之瀬、ライフルの調整は済んでいるな？」

「はい。ジープの中にありますが」

「よし、車で装備を調える。市街地戦装備。お前は距離を置いて狙

撃体勢を取れ。俺が前衛を務める。無線機を忘れるな」

会話の内容が全く理解できないレティアだったが、彼らが今から何をしようとしているのか、それだけは辛うじて理解できた。

（奴らに、挑むつもりなのっ！？）

レティアは驚愕の表情で二人を見つめた。

リュミは、そつと祈りの姿勢を取って二人に向かっている。それはまるで、彼らの力を信じているような……

「状況開始！」

「了解！」

レティアが疑問を口にするよりも早く、二人は外へと飛び出して行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9111s/>

ルーントルーパーズ

2011年11月21日05時57分発行